



埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第222集

---

北埼玉郡騎西町

---

# 私市城武家屋敷跡

---

騎西郵便局庁舎新築工事関係埋蔵文化財発掘調査報告

1999

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

口 絵



漆 梶



独楽・オサ



下駄

# 序

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくにづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを進めています。さいたま新都心の整備も都市機能の集積を図り、豊かなまちづくりに寄与するものであります。

さいたま新都心には、いくつかの国の機関が移転する予定であります。関東郵政局もそのひとつになっています。平成11年1月には、郵便局と民間銀行がオンラインで結ばれ、相互に利便性が高まり、郵便局の果たす役割が、新たな局面を迎えてます。

このような状況下において、このたび騎西町根古屋に、新たに郵便局が建設されることとなりました。郵便局新庁舎の新築工事用地内では、周知の埋蔵文化財包蔵地として、私市城武家屋敷跡の一部が該当しておりました。上記埋蔵文化財の取扱いについては、関係諸機関で慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。発掘調査は埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整に基づき、関東郵政局の委託を受けて、当事業団が実施することになりました。

江戸時代に製作されたという絵図面『武州騎西之絵

図』は、私市城を知る上で大変参考になります。絵図面によりますと、発掘調査の対象となった部分は、当時の武家屋敷の一部に当たっております。発掘調査では、中国からの輸入品をはじめとして、瀬戸・美濃産の陶磁器類などが数多く出土し、また遺構では障子堀を検出するなど、私市城武家屋敷跡の性格を知る上で重要な成果をあげることができました。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用していただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査から報告書の作成に至るまで、多大な御指導・御協力を賜りました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、関東郵政局建設部、騎西町教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成11年1月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 荒 井 桂

## 例 言

1. 本書は、埼玉県北埼玉郡騎西町に所在する私市城  
武家屋敷跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の代表番地と、発掘調査に対する指示通知は  
以下のとおりである。

私市城武家屋敷跡（略号 K J B）  
北埼玉郡騎西町根古屋637-2他  
平成8年12月4日付 教文第2-168号

なお、本書で使用する遺跡名称は、埋蔵文化財包  
蔵地カード登載の名称を用いた。
3. 発掘調査は、騎西郵便局庁舎新築に伴う事前調査  
である。埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の  
調整のもと、関東郵政局の委託を受けた財団法人  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。本事業  
のうち発掘調査については、田中英司、伴瀬宗一  
が担当し、平成8年12月1日から平成9年3月  
31日まで実施した。整理報告書作成事業は、伴瀬  
が担当し、平成10年12月1日から平成11年3月  
31日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量および航空写真は、株式会社シ  
ン技術コンサルに委託した。巻頭写真は小川忠博  
氏に委託した。
6. 発掘調査時における遺構写真撮影は田中、伴瀬が  
行い、遺物の写真撮影は伴瀬が行った。
7. 出土品の整理および図版作成は伴瀬及び調査員補  
の遠山実生が行った。
8. 本書の執筆は、第1章第1節を埼玉県教育局生涯  
学習部文化財保護課が行った。第IV章第1節縄文  
時代の遺物は渡辺清志が、その他の執筆と編集を  
伴瀬が行った。
9. 本書に掲載した資料は平成11年度以降埼玉県立  
埋蔵文化財センターが管理・保管する。
10. 本書の作成に際し、下記の方々から御教示・御協  
力を賜った。（敬称略）

島村範久・嶋村英之・藤澤良祐・加藤真司・佐々  
木健策・騎西町教育委員会・財瀬戸市埋蔵文化  
財センター・財土岐市埋蔵文化財センター

## 凡例

本書における挿図指示は次のとおりである。

1. X、Yによる座標表示は国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
2. グリッドは10×10m方眼を設定した。グリッドの名称は、方眼の北西隅の杭番号である。
3. 遺構挿図の縮尺は次のとおりである。例外的なものについてはスケールで示した。  
遺構全測図 1/200  
堀跡 1/120  
その他の遺構平面図 1/60
5. 遺構図中のスクリーントーンの指示は以下のとおりである。



6. 遺物挿図の縮尺は次のとおりである。

縄文土器 1/4・1/5  
土器・陶磁器類 1/4  
古錢拓影図 1/1  
木製品 1/4

7. 遺物観察表の計測値は、( ) 内は推定値、単位はcmである。
8. 遺物観察表の色調は新版標準土色帳に準じて細別したが、厳密ではなく概ねである。
9. 遺物観察表の胎土は、概ね最も多量に含まれる含有物を表記した。含有物の種類は次のとおりである。

A…黒色粒子 B…ガラス質黒色粒子  
C…軟質黒色粒子 D…半透明粒子  
E…砂粒子

10. 遺物観察表の焼成は次のとおりである。

A…良好 B…普通 C…不良

# 目次

口 紋

序

例 言

凡 例

目 次

I 発掘調査の概要	1	(4) 土壙	37
1. 調査に至る経過	1	(5) ピット群	50
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(6) グリッド・表採遺物	51
3. 発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織	3	(7) 染付・五彩・青磁	51
II 遺跡の立地と環境	4	(8) 和鏡・古銭	54
III 遺跡の概要	7	(9) 石製品	57
IV 遺構と遺物	11	(10) 木製品	67
1. 縄文時代	11	3. その他	69
(1) 壺穴状遺構	11	近世出土遺物	69
2. 中世	21	V まとめ	70
(1) 堀跡	21	附編 1	75
(2) 井戸跡	31	附編 2	87
(3) 溝跡	35		

# 挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第15図 堀跡断面図(1)	22
第2図 周辺遺跡の分布図	6	第16図 堀跡断面図(2)	23
第3図 私市城跡の地形図(1)	8	第17図 堀跡出土遺物(1)	25
第4図 私市城跡の地形図(2)	9	第18図 堀跡出土遺物(2)	26
第5図 全測図	10	第19図 堀跡出土状況図	28
第6図 第1号壺穴状遺構	11	第20図 井戸跡	29
第7図 第2号壺穴状遺構	12	第21図 井戸跡出土遺物	31
第8図 第3・4号壺穴状遺構	13	第22図 溝跡出土遺物	32
第9図 縄文土器(1)	15	第23図 第1・6号溝跡	33
第10図 縄文土器(2)	16	第24図 第2・3号溝跡	34
第11図 縄文土器(3)	17	第25図 第4・5号溝跡	36
第12図 縄文土器(4)	18	第26図 土壙跡出土遺物	37
第13図 縄文土器(5)・石器	19	第27図 土壙(1)	38
第14図 堀跡	21	第28図 土壙(2)	39

第29図	土壙(3) .....	40
第30図	土壙(4) .....	41
第31図	ピット群(1) .....	42
第32図	ピット群(2) .....	43
第33図	ピット(1) .....	45
第34図	ピット(2) .....	46
第35図	グリッド・表採遺物 .....	52
第36図	染付・五彩・青磁 .....	53
第37図	和鏡 .....	54
第38図	古銭 .....	55
第39図	五輪塔 .....	56
第40図	石臼(1) .....	58
第41図	石臼(2) .....	59
第42図	砥石 .....	60
第43図	板碑(1) .....	61
第44図	板碑(2) .....	62
第45図	板碑(3) .....	63
第46図	木製品(1) .....	64
第47図	木製品(2) .....	65
第48図	木製品(3) .....	66
第49図	近世出土遺物 .....	68

## 図版目次

図版 1	私市城武家屋敷跡遠景	第 8 号井戸跡出土状況
	私市城武家屋敷跡全景	図版11 第 9 号井戸跡
図版 2	第 1 号竪穴状遺構	第10号井戸跡
	第 2 号竪穴状遺構	第11号井戸跡
図版 3	第 3 号竪穴状遺構	図版12 第 2 ・ 3 号溝跡
	第 4 号竪穴状遺構	第 2 号溝跡
図版 4	堀跡全景	第 2 号溝跡
	堀跡障子堀 i	図版13 第 4 ・ 5 ・ 7 号溝跡 (東より)
図版 5	堀跡障子堀 b ・ c (西から)	第 5 号溝跡
	堀跡障子堀 b ・ c (東から)	第 4 ・ 5 ・ 7 号溝跡 (西より)
	堀跡障子堀 f ・ g ・ h	図版14 土壙(1)
図版 6	堀跡障子堀 g ・ h	図版15 土壙(2)
	堀跡障子堀 k ・ l	図版16 土壙(3)・A 4 グリッドピット群
	堀跡障子堀 j	図版17 ピット群
図版 7	堀跡遺物出土状況	図版18 石器
図版 8	第 1 号井戸跡	縄文土器(1)
	第 2 号井戸跡	図版19 縄文土器(2)
	第 3 号井戸跡	図版20 縄文土器(3)
図版 9	第 5 号井戸跡	図版21 縄文土器(4)
	第 6 号井戸跡	図版22 縄文土器(5)・土師器皿(1)
	第 6 号井戸跡出土状況	図版23 土師器皿(2)
図版10	第 7 号井戸跡	図版24 土師器皿(3)
	第 8 号井戸跡	図版25 土師器皿(4)

- 香炉 和鏡
- 天目茶碗 (1) 図版32 古銭
- 図版26 天目茶碗 (2) 図版33 石臼
- 内耳鍋 (1) 図版34 五輪塔
- 図版27 内耳鍋 (2) 板碑台石
- 擂鉢 (1) 図版35 板碑
- 鍋 図版36 木製品 (1)
- 図版28 内耳鍋 (3) 図版37 木製品 (2)
- 擂鉢 (2) 図版38 木製品 (3)
- 図版29 灰釉陶器 図版39 木製品 (4)
- 図版30 青磁 図版40 木製品 (5)
- 染付 図版41 木製品 (6)
- 図版31 香炉 図版42 近世出土遺物 (1)
- 常滑大甕 図版43 近世出土遺物 (2)

# I 発掘調査の概要

## 1. 調査に至る経過

関東郵政局では騎西町根古屋地内に新たな郵便局建設の計画があり、平成8年4月2日付け建計第1083号で関東郵政局建設部長より、埋蔵文化財の所在及び取扱いについての照会があった。

事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地私市城武家屋敷跡(71-007)内にあたることが明らかなために、平成8年5月17日付け教文第234号で工事計画上やむを得ず現状変更する場合には、事前に文化財保護法第57条の3の規定による発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施する必要がある旨を回答した。

その後、関東郵政局と県文化財保護課で協議し、事業の計画変更が不可能であることから、遺跡にかかる造成地区について記録保存の措置を講ずることとした。

発掘調査の実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、関東郵政局・文化財保護課の三者で工事日程、調査計画・調査期間などについて協議し、平成8年12月1日から平成9年3月31までの期間、発掘調査を実施することとした。

文化財保護法第57条3の規定による埋蔵文化財発掘通知が関東郵政局から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査に関わる通知は以下のとおりである。

平成8年12月4日付け 教文2-168号

(文化財保護課)

## 2. 発掘調査・報告書作成の経過

### 発掘調査

平成8年12月1日から平成9年3月31日までの4ヶ月にわたり、私市城武家屋敷跡の発掘調査を実施した。発掘調査面積は1000m<sup>2</sup>である。

12月初旬にプレハブ事務所を設置した。同時に安全対策のため囲柵を行った。囲柵完了後重機によって表土除去を行った。

12月中旬には、中近世の遺構・遺物を検出し、補助員による手掘りの発掘作業を開始した。同時に基準点測量を行い、調査区内に測量杭を設置した。

発掘調査は、表土除去の段階で、建物・井戸等の高い部分と堀跡の低い部分とに分かれることが判明し、高い部分から調査することとした。遺物は、ほぼすべての出土位置を記録した。1月中旬からは、遺構の測量図および遺物の出土状況図を順次作成した。1月下旬には、堀跡部分に排水用の溝切りを行い、本格的に調査を開始した。2月下旬には、高い部分の遺構および、遺物の出土状況を写真撮影した。

3月上旬には、堀跡部分の出土遺物を記録し、ほぼ発掘も完了した。つづいて遺構の測量図を作成し、終了と同時に完掘の写真撮影、航空写真撮影を行った。

3月下旬には調査を終了した。続いて、囲柵の撤去、埋め戻しを行い、すべての調査を終了した。

### 整理・報告書刊行

整理作業は、平成10年12月1日から平成11年3月31日まで実施した。12月初旬から遺物の接合・復元を行う。中旬には、復元の終ったものから順次実測に入った。遺物の接合・復元は、ほぼ12月中旬をもって終了した。それと並行して遺構図面の整理・トレースを進めた。遺構図面のトレースが終了したのは、12月下旬である。引き続き遺物実測図のトレースに入る。遺物の復元と並行して行った実測は、12月下旬に終了し、遺物実測図のトレースは、平成11年1月上旬には終了した。

1月からは遺構と遺物の版組を開始する。1月中旬には、版組と並行して遺物の写真撮影を行い、終了したものから順次写真図版の割付け・編集作業を進めた。

平成11年1月から原稿執筆を行い、下旬には終了した。

報告書刊行作業は、1月下旬には、印刷業者を決定し、2月中旬より校正に入り、3月中旬には校了。3月末に報告書を刊行した。

### 3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

#### (1) 発掘調査

平成8年度

理 事 長 荒 井 桂  
副 事 長 富 田 真 也  
専 務 事 長 吉 川 國 男  
常務理事兼管理部長 稲 葉 文 夫

#### (2) 整理事業

平成10年度

理 事 長 荒 井 桂  
副 事 長 飯 塚 誠一郎  
常務理事兼管理部長 鈴 木 進

#### 管 理 部

庶 務 課 長 依 田 透  
主 査 西 沢 信 行  
主 任 長 滝 美智子  
主 事 菊 池 久  
専門調査員兼経理課長 関 野 栄 一  
主 任 江 田 和 美  
主 任 福 田 昭 美  
主 任 腰 塚 雄 二

管 理 部  
庶 務 課 長 金 子 隆  
主 査 田 中 裕 二  
主 任 長 滝 美智子  
主 任 腰 塚 雄 二  
専門調査員兼経理課長 関 野 栄 一  
主 任 江 田 和 美  
主 任 福 田 昭 美  
主 任 菊 池 久

#### 調 査 部

理事兼調査部長 小 川 良 祐  
調査部副部長 高 橋 一 夫  
調査第三課長 村 田 健 二  
主 査 田 中 英 司  
主任調査員 伴瀬 宗一

#### 資 料 部

資 料 部 長 増 田 逸 朗  
主幹兼資料部副部長 小 久 保 徹  
資料整理第二課長 市 川 修  
主任調査員 伴瀬 宗一

## II 遺跡の立地と環境

私市城武家屋敷跡の所在する北埼玉郡は、埼玉県東北部に位置する。郡境は、北および東は利根川を挟んで群馬県と接し、西は大里郡、南は東から北葛飾郡、南埼玉郡、北足立郡と接している。南の3郡は、北葛飾郡が、ほぼ中川低地に含まれ、北足立郡では、大宮台地がおむね全域を覆っており、南埼玉郡はその双方の特色を兼ね備え、加須低地と大宮台地から続く島状に台地が点在している。西に接する大里郡は、加須低地に連続する妻沼低地が郡の東半分を覆っている。このような周辺の地形が、個々に独立するものではもちろんないが、北埼玉郡の最も特徴的な地形的特色は、ほぼ全域を低地に属していることである。中川中流低地としての妻沼低地、加須低地である。

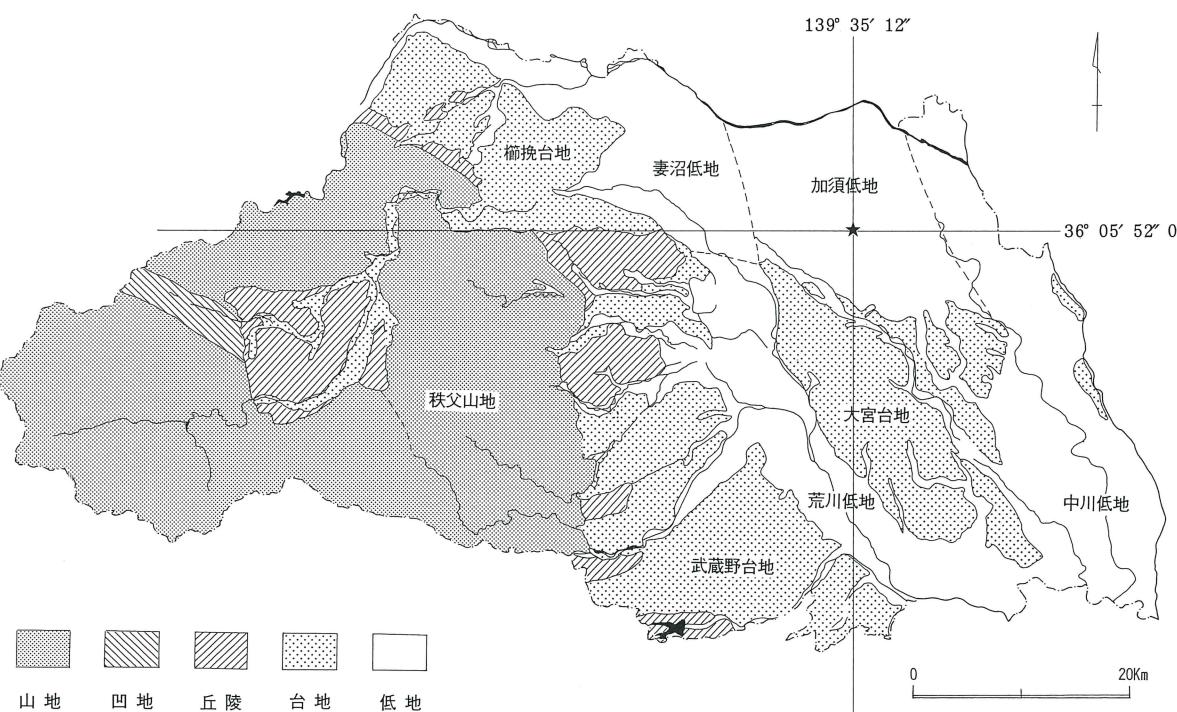
また、郡単位で見た場合のもうひとつの特色は、郡の西側が大宮台地の北方突端にあたり、妻沼低地と荒川水系の低地と接し、さらに広大な低地を形成してい

ることである。ただし、大宮台地の主要部とは、元荒川、見沼代用水（星川）、古利根川、中川などの作用で分離しているが、低地内には島状の台地が存在する。

騎西町は、北埼玉郡の南部に位置し、巨視的には、上記のように加須低地が町のほぼ全域をおおっている。微視的には支台とも呼べない小さな島状のローム台地が点在し、現在の集落を形成している。菖蒲町西堀・三箇から鴻茎・芋茎に至る地区、備前堀川と星川に挟まれた上崎・下崎地区などである。この島状ローム台地は、桶川、北本、鴻巣市の元荒川沿いで、比較的大きな支台を形成するが、北にいくに従い小規模になり、加須市至ってはほとんど見られなくなる。

また、これらの台地には、大宮台地における西側の荒川に接する部分や、南側の中川低地に接する部分と大きく異なり、台地と低地の接点において明瞭な崖線を形成しないという特徴がある。以上は、加須低地を

第1図 埼玉県の地形



中心とするいわゆる関東造盆地運動による特異な地形特質である。

菖蒲町西堀・三箇から鴻茎・芋茎に至る一連の島状台地は、解析谷が入り込んで樹枝状の形態を示し、一部では分離している。私市城武家屋敷跡は、その一連の島状台地のほぼ北端に位置する。さらに北側は、広大な加須低地が眼前に広がり、これより以北は狭小な島状の台地さえ見られなくなる。もちろん、現況の表層地表が、泥質性の堆積物であったとしても、地表下にはローム層が検出され、以前は台地を形成していたことがわかる。

上記のような地理的環境では、島状のローム台地上に遺跡が立地することはもちろんとして、表層地質が沖積層であっても地下地形に埋没ローム台地が存在し、そこにも遺跡が立地する。菖蒲城跡（18）は、一見沖積低地の真中にあり、このような埋没ローム台地に立地する遺跡の典型といえる。菖蒲城跡は、地表下に埋没ロームを検出するとはいっても、埋没ローム上のじかに立地していたわけではないので、城の立地としては極めて特異である。

元荒川対岸にある桶川市における大宮台地縁辺の崖線は明瞭である。この元荒川を望む台地の縁辺に加納城跡（14）がある。加納城跡では、青磁・白磁をはじめとして、瀬戸・美濃の灰釉陶器、天目茶碗、常滑の大甕などが出土している。

騎西町にもっとも所縁があるのは、これ以前に溯るが、武藏七党の野与党である道智氏（4）・多賀谷氏（2）である。道智氏は、字名から騎西町大字道智周辺に、また同様に多賀谷氏も大字内田ヶ谷周辺に、館跡が伝承として伝えられているが、明確に遺構を確認することはできない。しかし、このことによって騎西が歴史の舞台に登場することになる。

これら在地領主の台頭は、平安時代後期からの、旧

土地制度の崩壊と新たに荘園を経済基盤とする武士集団の台頭とに呼応している。さらに在地中小領主の同族的結合が武士団を形成し、その過程の中で結合を繰り返し、その集積の結果として鎌倉幕府の成立を見る。さらに北条執権政治の下、新秩序の安定期を迎えることとなるのだが、この中世前期の明確な遺構を騎西町内で見出すことはできない。

元弘の乱（1331）を経て南北朝の動乱期へと時代は移行していく。

室町幕府が成立すると足利尊氏は、鎌倉を東国支配の要所として、初代鎌倉公方に次男基氏を派遣する（1349）。やがて補佐役の関東管領職は、上杉氏の世襲となり、さらに武藏国の守護を兼ねた。やがて東国支配の権力機構が内包する問題が顕在化する。鎌倉公方足利持氏は、將軍家、関東管領上杉家と対立し、自害に追い込まれる（永享の乱 1438）。持氏の遺子成氏が鎌倉公方となるが、やはり上杉氏と対立し、古河に逃れ、古河公方と呼ばれることになる（1453）。この後、後北条氏が台頭し、北武藏支配を手中に治めるまでの約100年の間、主に山内・扇谷両上杉氏と古河公方の三つ巴の抗争が繰り広げられることになる。ここに私市城をはじめ周辺の中世城郭が登場すると考えられる。

『鎌倉大草子』には康正元年（1455）に古河公方成氏が私市城（1）の上杉勢を攻めるとあり、この頃私市城は、上杉勢の勢力下にあった。山内上杉氏は対抗上、深谷城を、扇谷上杉氏は家老大田資清（道真）をして江戸城・河越城・岩付城を築城させた。

菖蒲町菖蒲城跡からは、古くは13世紀の常滑甕が出土しているが、主体は16世紀である。加須市花崎城（10）からは、15世紀末の古瀬戸系灰釉陶器が出土しているが、遺物の主体は16世紀であるという。

1 私市城	2 多賀谷氏館跡	3 戸崎城	4 道智氏館	5 荒川氏館	6 明願寺館
7 礼羽氏館	8 設樂氏陣屋	9 久下塙氏館	10 花崎城	11 鐘撞山（油井城）	12 館山
13 井沼堀の内	14 加納城	15 柏山氏館	16 下柏間陣屋跡	17 姉井氏館	18 菖蒲城
19 菖蒲陣屋	20 種垂城跡	21 八幡廊			

第2図 周辺遺跡の分布図



### III 遺跡の概要

私市城武家屋敷跡は、ローム台地に立地する。しかし、周辺の島状の台地と同様に、関東造盆地運動の沈降によって、台地と低地の明確な崖線を確認することはできない。私市城の乗る島状台地をより微細に見ると、牛重から根古屋にかけての幅約500m、長さ約2.5kmを測り、極めて狭小であることがわかる。そのほぼ北先端に私市城は位置する。調査区の代表的な地点の標高は約12.0mである。西側は微弱な谷を経て、騎西の市街地が乗るやはり狭小な島状台地となる。この微弱な谷の境界が私市城の西側を画しているものと予想される。北側は、新川の形成する自然堤防とその後背湿地があり、さらにその先は、広大な加須低地が広がる。福島東雄の『武藏誌』に私市城は「北西深田」によって近寄り難いとあり、まさに加須低地の様相を著しているものと考えられる。

第3図の私市城地形図では、現在の地目によってトーンを入れた。白抜きが水田である。また騎西町教育委員会の調査成果をもとに、私市城の想定範囲を入れた。上記の立地のとおり北に低地が広がり、南東から北西にかけて帯状に台地が延びていて、さらにその台地の形状に合わせるようにして私市城が占地していることがわかる。第4図は、その拡大図である。縄張りに用いる名称は、時代によって検討する必要があるが、ここでは江戸時代初期に制作された『武州騎西之絵図』に拠り用いた。本丸は、最も北に位置し、まさに加須低地を望んでいる。その南に二ノ丸、東に折れるようにして天神曲輪、二か所の丸が続き、さらにその西に大手門が想定されている。大手門の以西、以南に武家屋敷跡が広がっている。

本調査区は、濃いトーンの部分である。先に触れたように、一帯が武家屋敷跡であるが、『武州騎西之絵図』によると、本調査区は武家屋敷跡のなかでも「御蔵屋敷跡」呼ばれる地区であり、またそれに隣接する堀跡であるということがわかる。騎西町教育委員会の発掘成果によると、御蔵屋敷跡は南北幅約60m、東

西の奥行きは、西端が不明だが少なくとも100m以上はあると考えられている。

発掘調査の対象面積は、1000m<sup>2</sup>である。調査区は、北および西を区画整理の道路で画される角地である。道路下は騎西町教育委員会で発掘調査された。本調査区の北側の道路下から極めて良好な障子堀が検出された。また、本調査区に隣接した西側の道路でも、東西方向に走る障子掘りが検出されている。

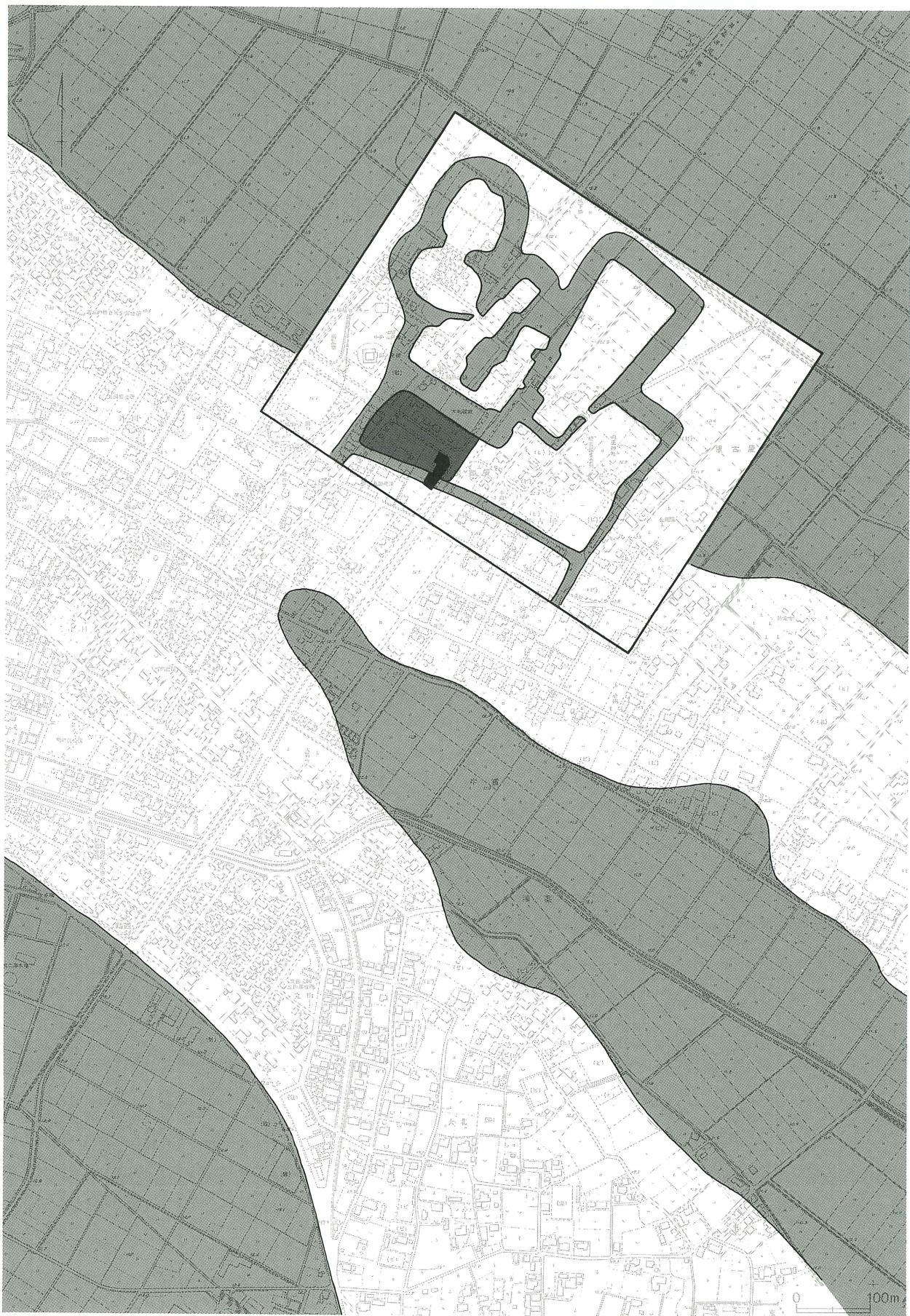
第4、5図に図示したとおり、調査区の遺構の内容は、大きくふたつの部分からなっている。ひとつは北半の溝・土壙・井戸・建物の柱穴と考えられるピット群で構成される御蔵屋敷本体の部分である。これらは北に向かい遺構数を増す傾向にある。これは調査区のさらに北側が御蔵屋敷跡の中心であり、そこに建物跡などの遺構が集中ためと考えられる。

調査区の南半は、御蔵屋敷跡の南限を区切る堀跡である。東西方向に延び、騎西町教育委員会の発掘成果と一致する。幅約13mである。堀跡の内部はさらに3条に区切られており、それそれがまたさらに畝と呼ばれる高まりで小区画を形成している。このような特異な形態の堀を障子堀と呼んでいる。障子堀は、県内では加須市花崎城、伊奈町伊奈氏屋敷跡、所沢市滝ノ城跡で検出例がある。県外では、小田原市小田原城やその支城の三島市中山城などがある。堀跡の古環境については、自然科学分析を行っている。附編に載せたので参照されたい。

遺構数は、溝10条、土壙36基、井戸11基、ピット135基と堀跡1である。

出土遺物は、中国産の染付、青磁、五彩の磁器類がある。国産では、常滑の大甕、瀬戸・美濃の擂鉢、天目茶碗、灰釉皿や志野、肥前系染付、唐津がある。在地系の瓦質土器では、内耳鍋、擂鉢があり、その他に土師器皿がある。石製品には、石臼、砥石のほかに、板碑がある。板碑の中には、文明十九年（1487）の紀年銘を持つものがあった。木製品では、漆椀、下駄、

第3図 私市城跡の地形図(Ⅰ)



独楽、杭、曲げ物蓋などがあり、特にムシロ編みのオサの検出は極めて珍しい。オサとはムシロの編み目を上から叩いて詰める道具で、藁紐を通す穴が規則正しく並んでいる。民俗資料にも残されており、その形状はほとんど変わらない。漆椀、下駄、独楽、杭、オサについては、自然科学分析で樹種同定を行ったが、良好な結果が得られていない。附編に載せた。

文献で、私市城が登場する最も古い記載年代を持つものは、『鎌倉大草子』である。『鎌倉大草子』によると、康正元年（1455）足利成氏が私市城の上杉勢を攻め落とすとある。以後私市城は、永禄六年（1563）に上杉輝虎（謙信）に攻め込まれるなどし、最後の城主大久保忠職が寛永九年（1632）に美濃へ転封となり、私市城は廃城となる。以後代官所がおかれる。

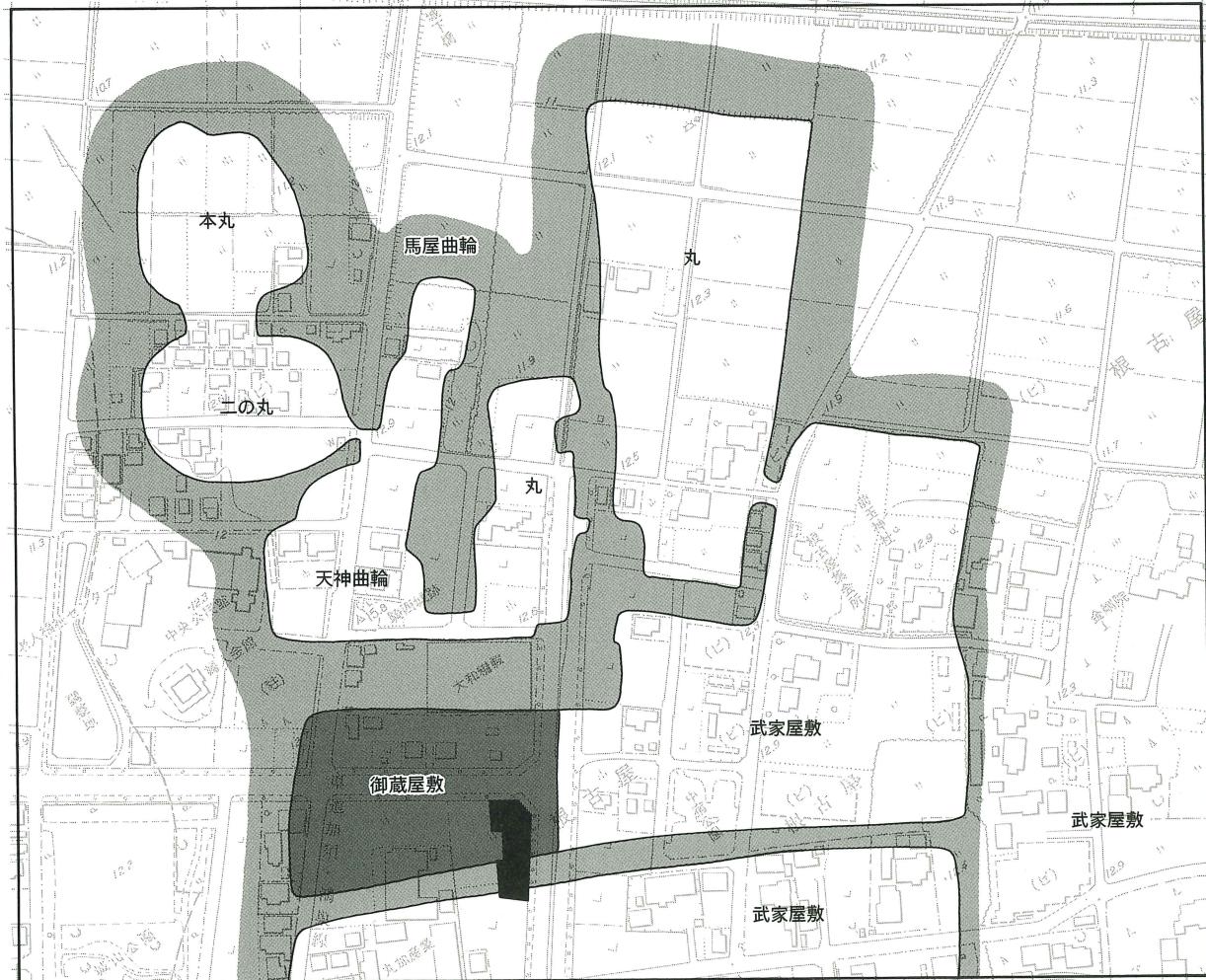
遺物から年代をはかるには、少し注意を要する。堀跡は、比較的長期にわたって機能していた。遺物はそ

こに堆積した粘土質シルト層から主に出土した。御蔵屋敷部分でも、遺構検出面より上層からの出土がほとんどである。それでも、検出面直上層から出土であった場合など、遺構確認以前の遺物であってもある程度所属の復元が可能なものは、極力遺構出土として扱った。このような状況で、遺物が遺構の年代の手掛かりになるものは、皆無である。

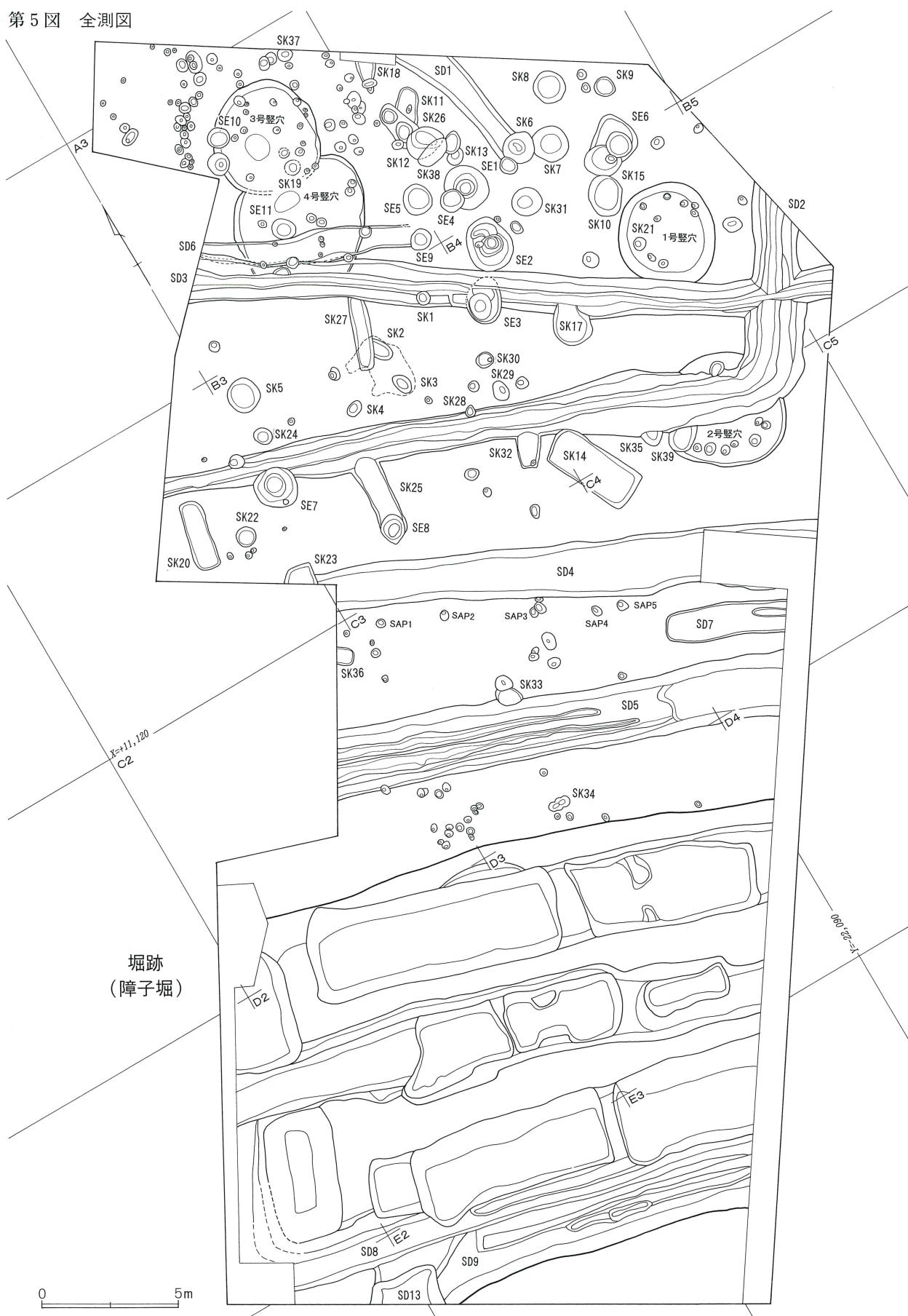
遺物そのものの年代は、各項ごとに詳しく扱っていくが、古瀬戸の縁釉皿が出土しており、上限は概ね15世紀の中頃とできる。下限は、近世の肥前系磁器が18世紀であり、近世遺物の占める割合も高い。

縄文土器が出土している。加曾利E III式と安行式である。遺構は、必ずしも遺物を伴わないが、竪穴住居状の掘り込みを検出した。ここでは、明確な炉を伴わなかったため竪穴住居跡の可能性を示す意味で、竪穴状遺構と呼んだ。竪穴状遺構は4基あった。

第4図 私市城跡の地形図(2)

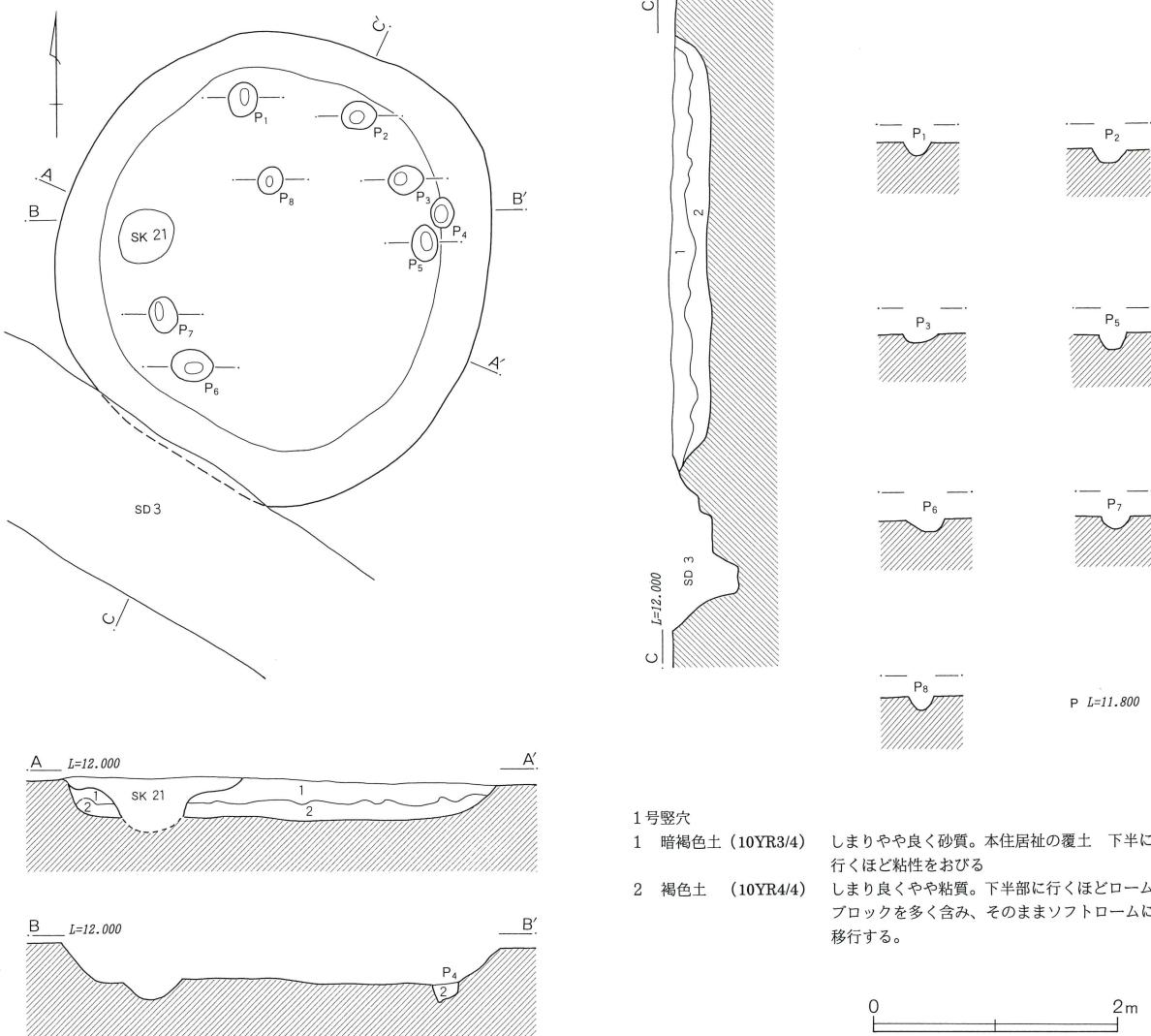


第5図 全測図



## IV 遺構と遺物

第6図 第1号竪穴状遺構



### 1. 繩文時代

#### (1) 竪穴状遺構

##### 第1号竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構は、B 4 グリッドから検出された。南側の一部をSD 3に切られているが、ほぼ完掘できている。平面形は円形である。

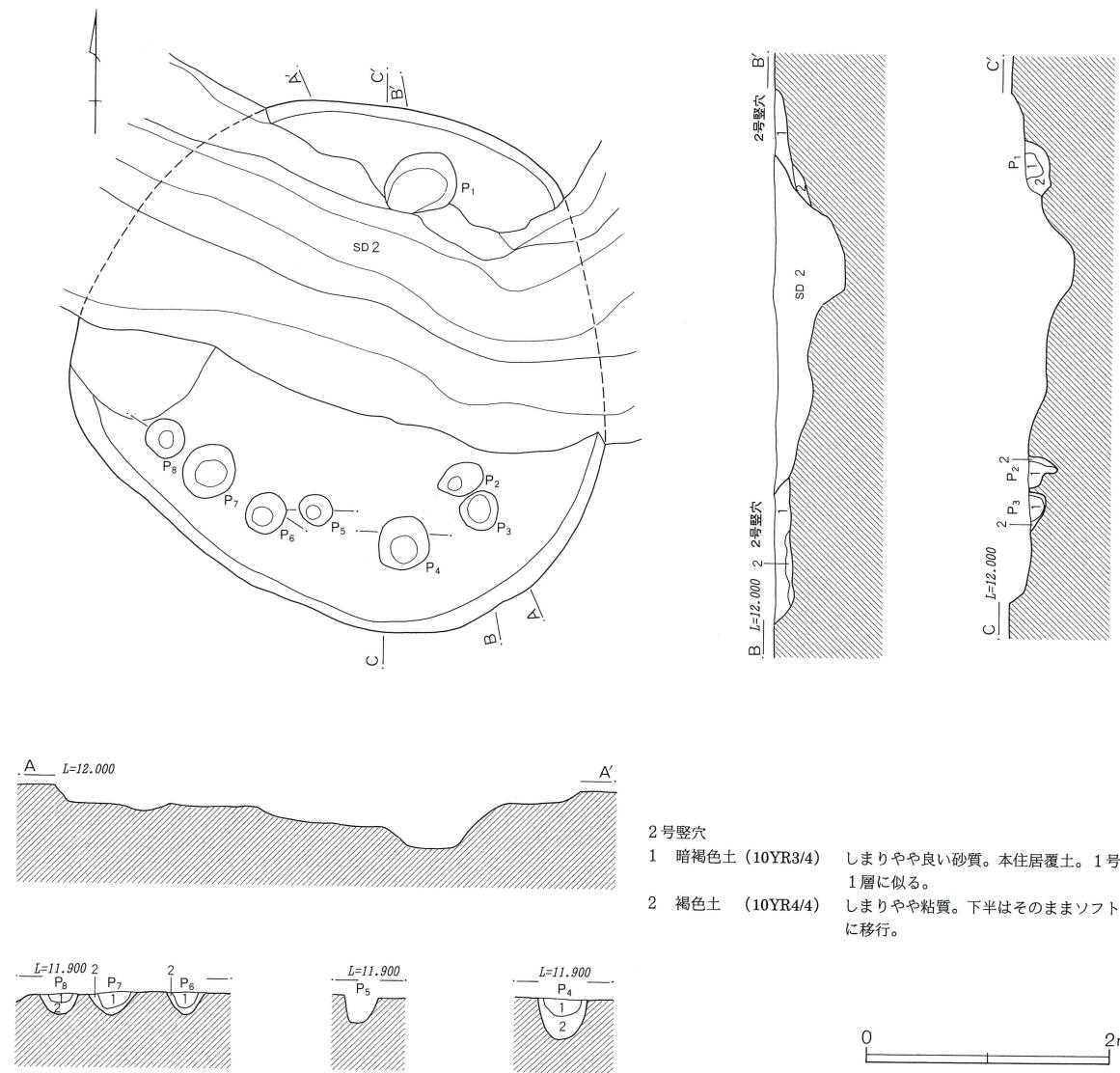
径は東西3.52m、南北3.64mである。断面形が、丸皿状を呈していて、上場径と下場径に差がある。長径方向の下場では2.82mであった。深さは0.32mであった。柱穴は、覆土から本住居に伴うと観察されたものを8本検出した。北側と南東側に集中し、南西側

には、検出されていない。P 1 の径は0.26m、深さは0.10mと極めて浅い。P 2 の径は0.29m、深さは0.11mと同様である。P 3 の径は0.28m、深さは0.06mで最も浅かった。P 4 は、径が0.22m、深さは0.17mであった。P 5 の径は0.36m、深さは0.14mである。P 3・4・5が最も近接している。

P 6 の径は0.24m、深さは0.1mであった。P 7 の径は0.22m、深さは0.1mであった。P 8 の径は0.21m、深さは0.11mであった。

柱穴の検出状況は悪いが、後の第2～4竪穴状遺構

第7図 第2号竪穴状遺構



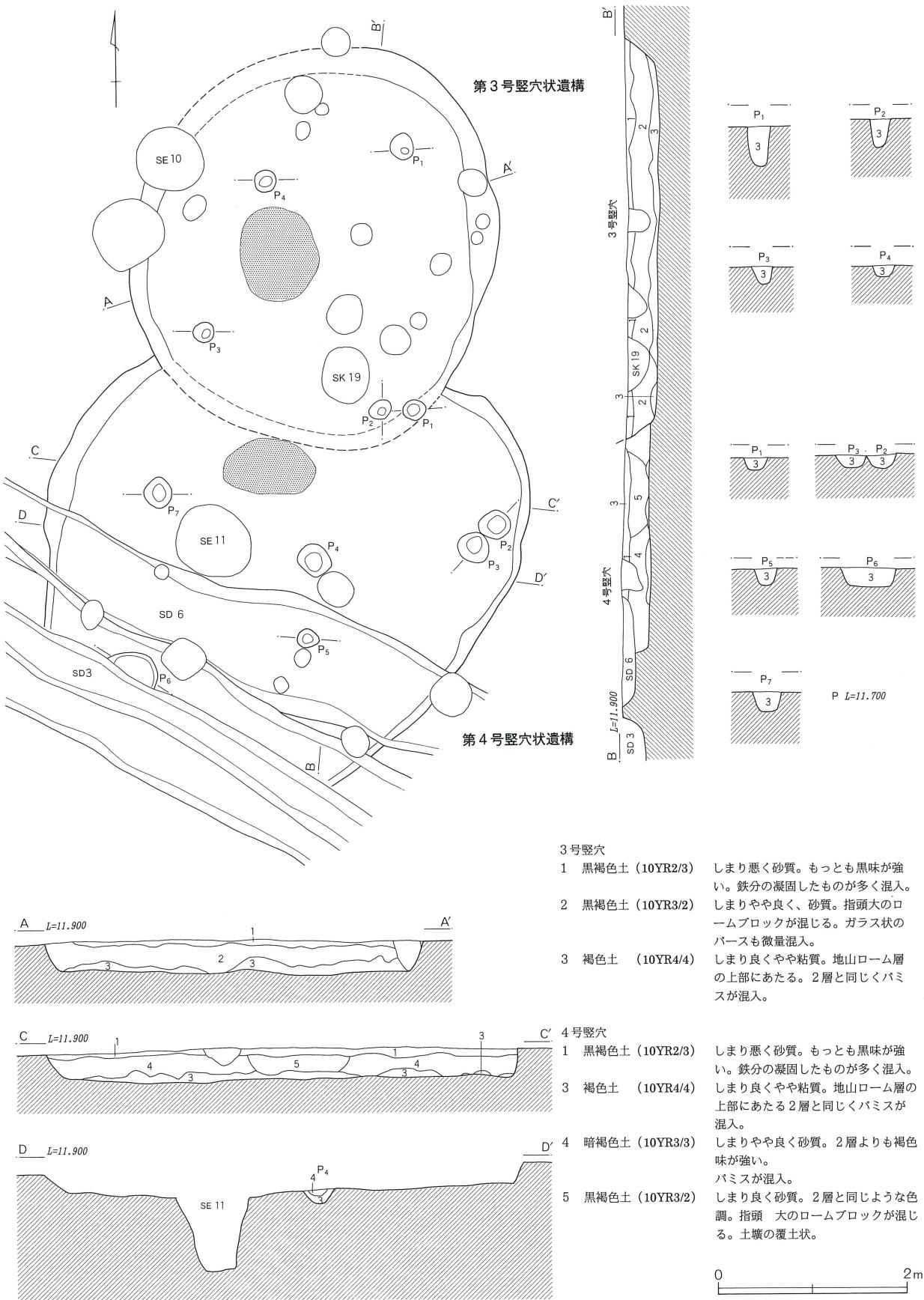
に比べて、中世の遺構にもあまり切られず相対的には最も検出状況は良い。炉は検出されていない。焦土の痕跡も確認できていない。

#### 第2号竪穴状遺構

第2号竪穴状遺構は、C 4 グリッドから検出された。住居の中央を大きく SD 2 に切られて、大半を失っているが、幸いプランは想定できる。平面形は、やや不整形な円形である。南北方向で、径が4.18m、東西方向は、推定であるが約4.40mとなる。深さは0.18mと浅かった。ちなみに東西方向の下場径では4.00mであり、深い割には差を生じている。やはり、断面形が丸皿形で、床面と住居壁の境が明確ではない。

柱穴は、覆土から本住居に伴うと観察されたものを8本検出した。P<sub>1</sub>の径は0.56mと大きい割には、深さは0.20mと浅かった。SD 2 に切られている。P<sub>1</sub>だけがSD 1 の北側に位置し、以下はすべて南側である。P<sub>2</sub>はやや楕円形を呈し、長径で0.40mあった。深さは0.24mであった。P<sub>3</sub>の径は0.32m、深さは0.12mであった。P<sub>4</sub>の径は0.4m、深さは0.34mであった。P<sub>5</sub>の径は0.28m、深さは0.2mであった。P<sub>6</sub>の径は0.34m、深さは0.18mであった。P<sub>7</sub>の径は0.44m、深さは0.18mであった。P<sub>8</sub>の径は0.32m、深さは0.16mであった。径は特にP<sub>1</sub>・4・7が大きく、深さは、P<sub>8</sub>が深かった。

第8図 第3・4号竪穴状遺構



炉は検出されていない。焼土の痕跡も確認できていない。

### 第3号竪穴状遺構

第3号竪穴状遺構はA 3グリッドから検出された。S E 10やS K 19、多くのピットなど中世の遺構に多数切られている。さらに第4号竪穴状遺構とも切り合い関係を持っている。第4号竪穴状遺構との新旧関係は、断面観察から本遺構のほうが新しい。平面形は、第4号竪穴状遺構との重複部分と北側の位置部が不明であるが、円形で間違いない。

規模は東西が3.84m、南北が推定値4.24mである。ちなみに下場では約3.78mであった。深さは0.36mであった。柱穴は、覆土から本住居に伴うと観察されたものを4本検出した。P 1の径は0.24m、深さは0.42mであった。P 2の径は0.22m、深さは0.23mであった。P 3の径は0.22m、0.2mであった。P 4の径は0.24m、深さは0.12mであった。

炉は検出されていないが、焼土のわずかに痕跡を検出した。スクリーントーンで示した。

### 第4号竪穴状遺構

第4号竪穴状遺構は、A 3グリッドから検出された。S D 3・6に切られ、南半を欠いている。東西方向で4.94m、南北は推定で4.96mである。深さは0.32mであった。柱穴は、覆土から本住居に伴うと観察されたものを7本検出した。P 1の径は0.26m、深さは0.14mであった。P 2の径は0.36m、深さは0.15mであった。P 3の径は、0.32m、深さは0.14mであった。P 4の径は0.38m、深さは0.14mであった。P 5の径は0.24m、深さは0.19mであった。P 6の径は0.56m、深さは0.2mであった。P 7の径は0.28m、深さは0.22mであった。

炉は検出されていないが、わずかに焼土の痕跡を検出した。スクリーントーンで示した。

### 縄文時代の遺物（第9図～第13図）

本遺跡からは、縄文時代中期末葉および後期後葉を中心とした土器が出土した。

実測図の第9図1～3および、拓影図の第10図1か

ら第13図86までは、中期末葉の加曾利E III式およびこれに後続する土器群である。

第9図1は小型の深鉢口縁部である。水平口縁の直下に一条の沈線を巡らせる。胴上半部に逆U字形のすり消しモチーフが描かれ、これは縦に細長い玉抱き文を構成するものとみられる。宿東遺跡A区第48号住居跡の埋設土器に類例をみることができる。地文はRL単節の縄文で、口縁直下では横位、それ以外では縦位回転で施文される。

同図2は深鉢胴下半部である。全面に研磨が徹底され、RL単節縦位回転の縄文が疎らに施文される。

同図3はいわゆる両耳壺であろう。肩部に文様帯を持たず、地文のみの胴部から無文の口縁部へと接続する。両者の境には断面三角形の隆帯が巡り、一端に地文が乗り上げている。この地文はRL単節の縄文で、隆帯にかかる部分は横位回転、それ以外では縦位回転で施文されている。全体のサイズに比べて口縁はやや寸詰まりで、屈曲もさほど強くはない。

肩部文様帯の喪失や、両耳壺としては崩れ気味のプロポーションから、本例は時期が後期初頭に下る可能性がある。

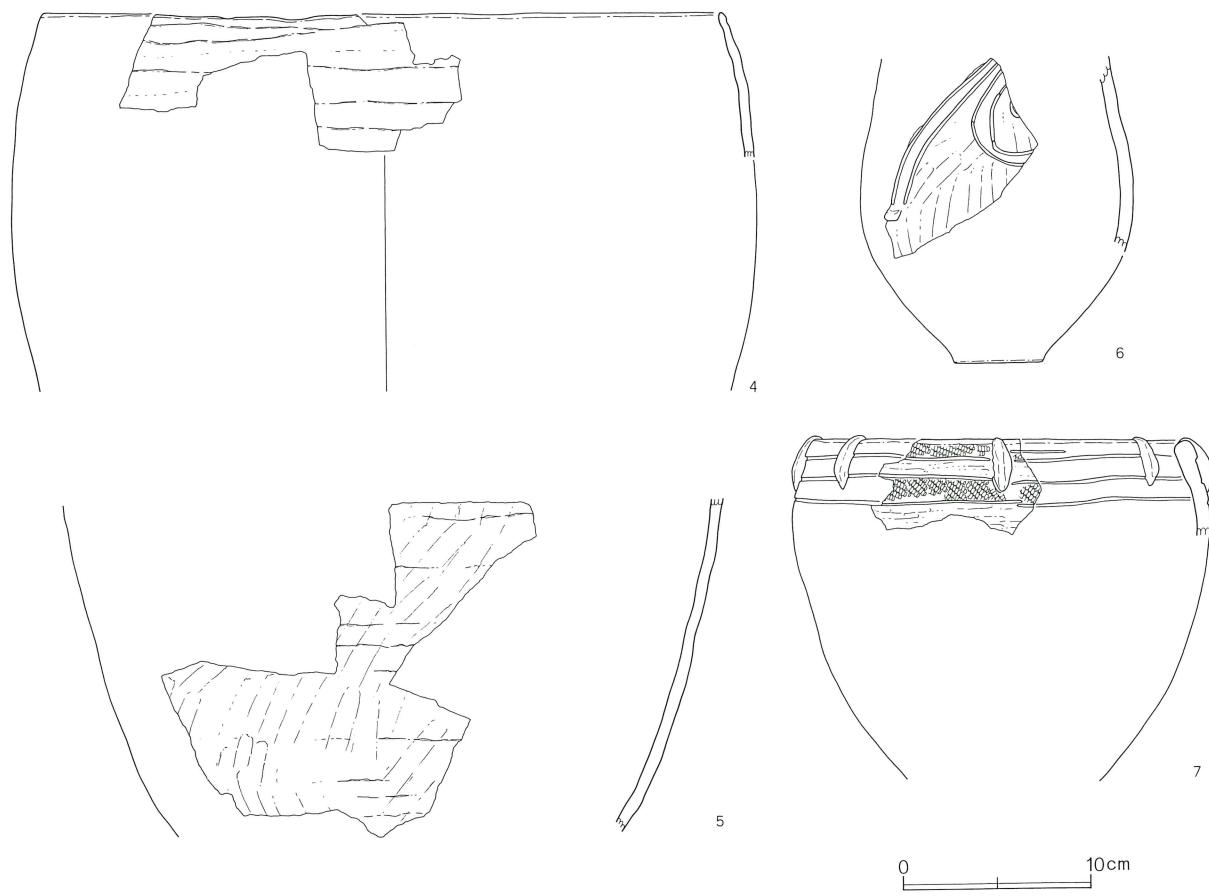
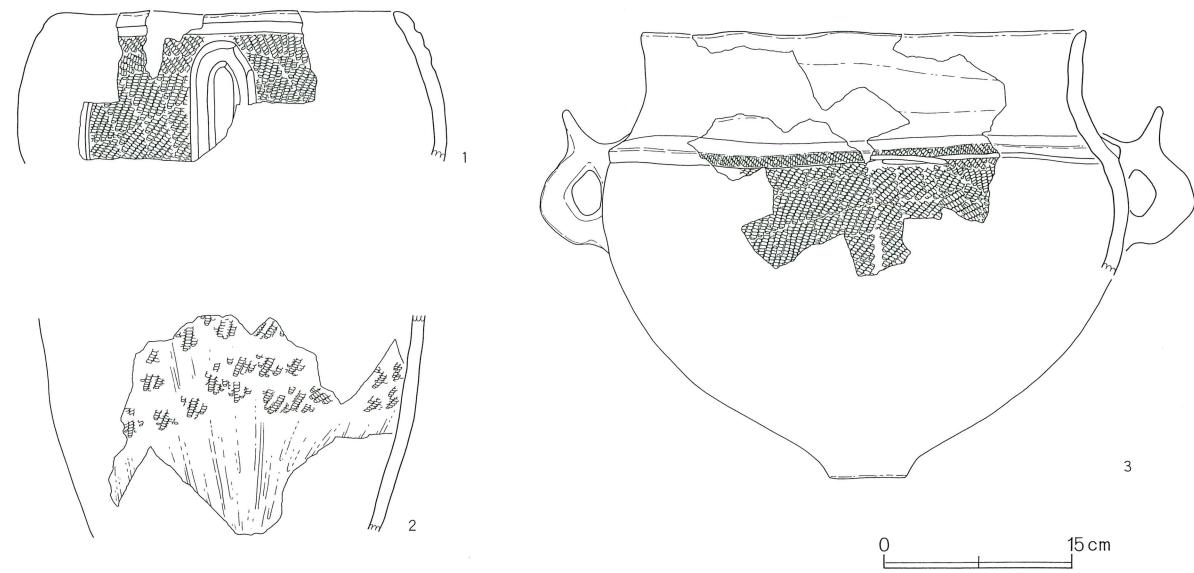
第10図1～11は、キャリパー類深鉢の口縁部である。隆帯による口縁部文様帯を持ち、水平口縁と波状口縁の両者が存在する。

2は口縁部文様が単なる横楕円形の区画へと変化している。10は両側になぞりを加えた隆帯によって文様が構成されており、梶山類に類似の大柄な渦巻き紋が描かれるかもしれない。

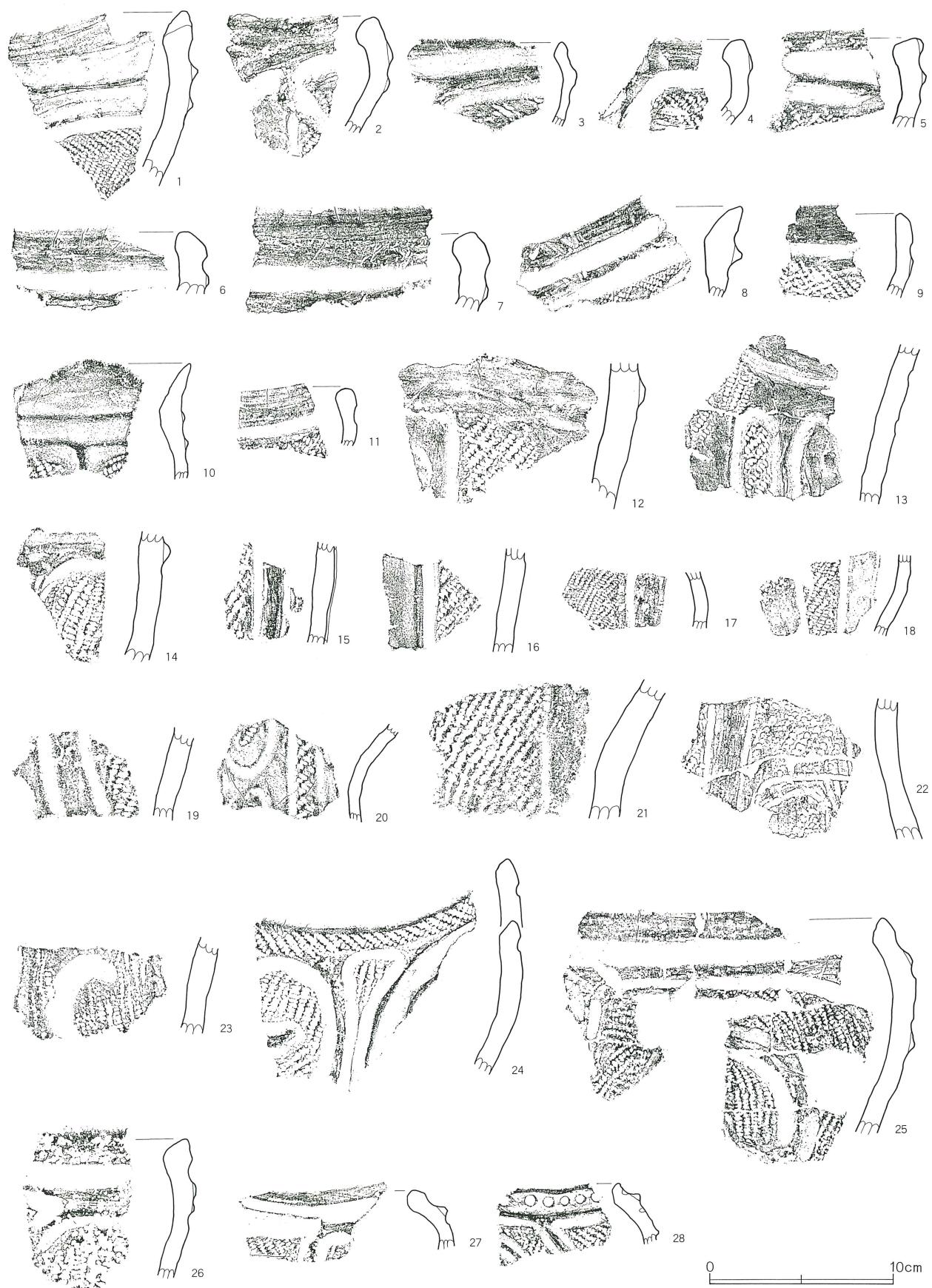
同図12～14は同類の頸部の破片で、口縁部文様帯下端の隆帯がみられる。胴部にはすり消し懸垂文が垂下するが、13では楕円形のすり消しモチーフへの変化がみられる。

同図15～23は同類の胴部である。いずれもすり消し懸垂文が描かれる。20は上部がY字状に分離し、下半部にはわらび手状の沈線が描き込まれる。22は懸垂文間が逆U字のモチーフによって連絡されており、曾利式からの影響が見て取れる。23は地文部にわら

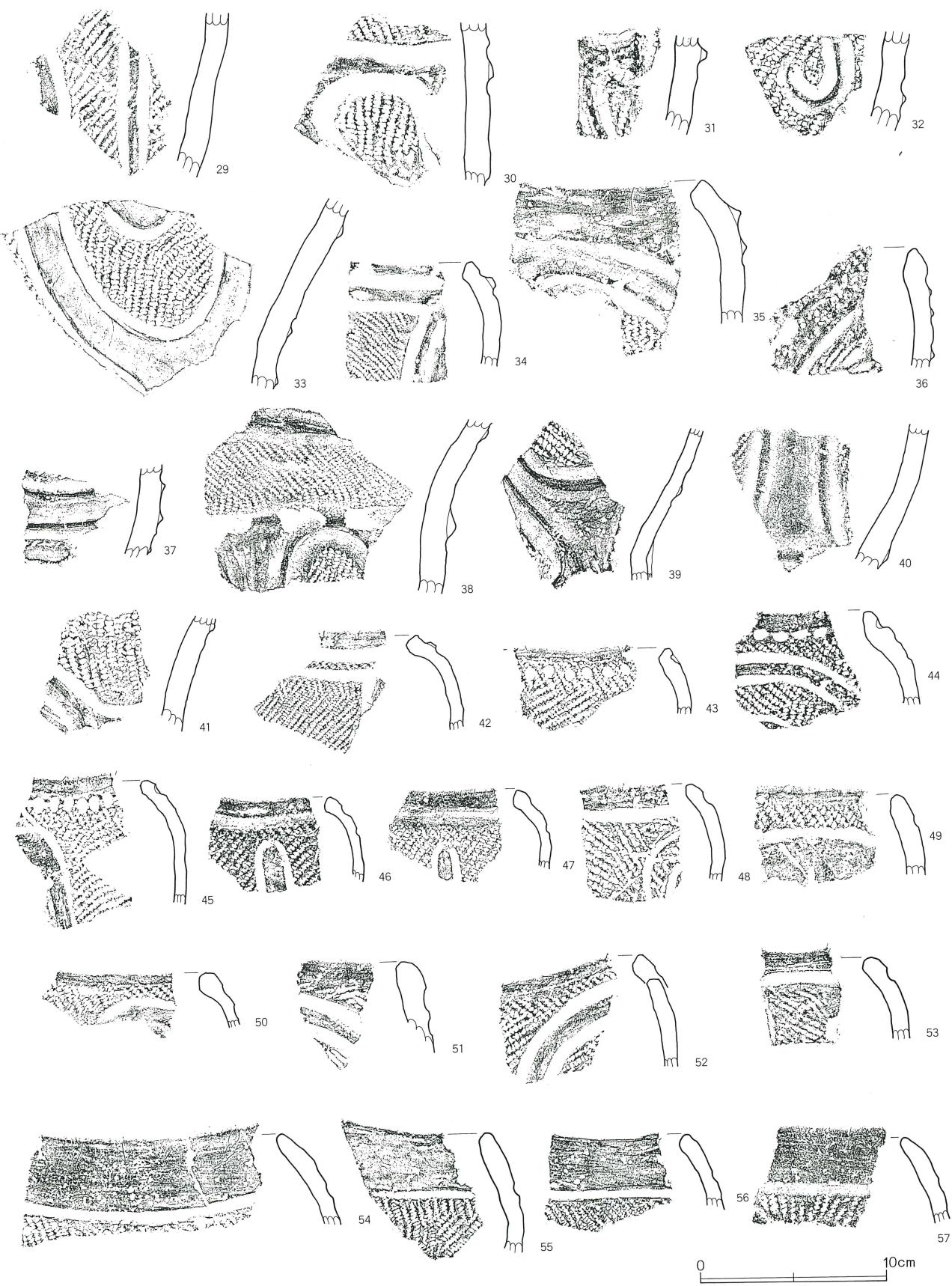
第9図 繩文土器(Ⅰ)



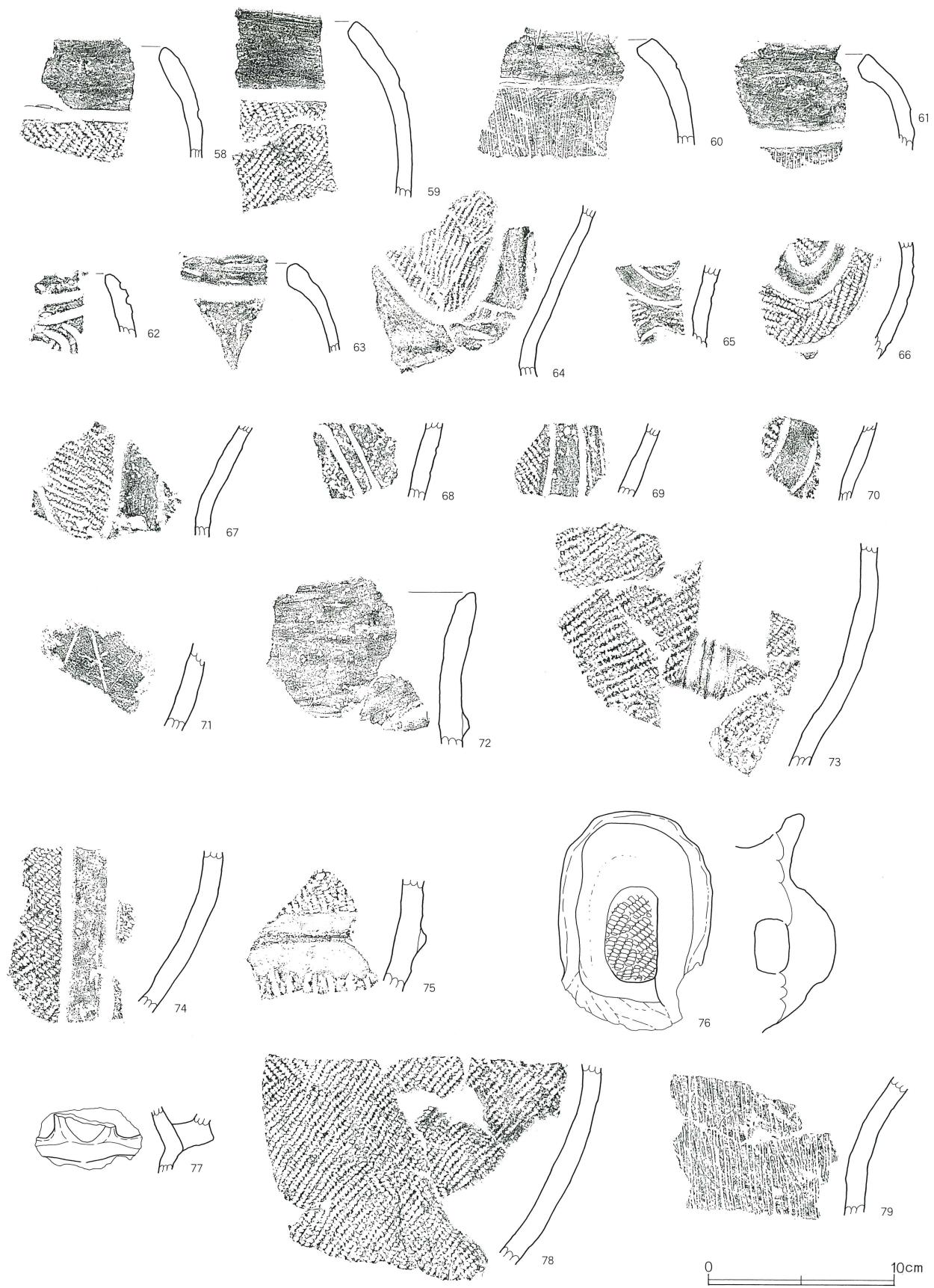
第10図 縄文土器(2)



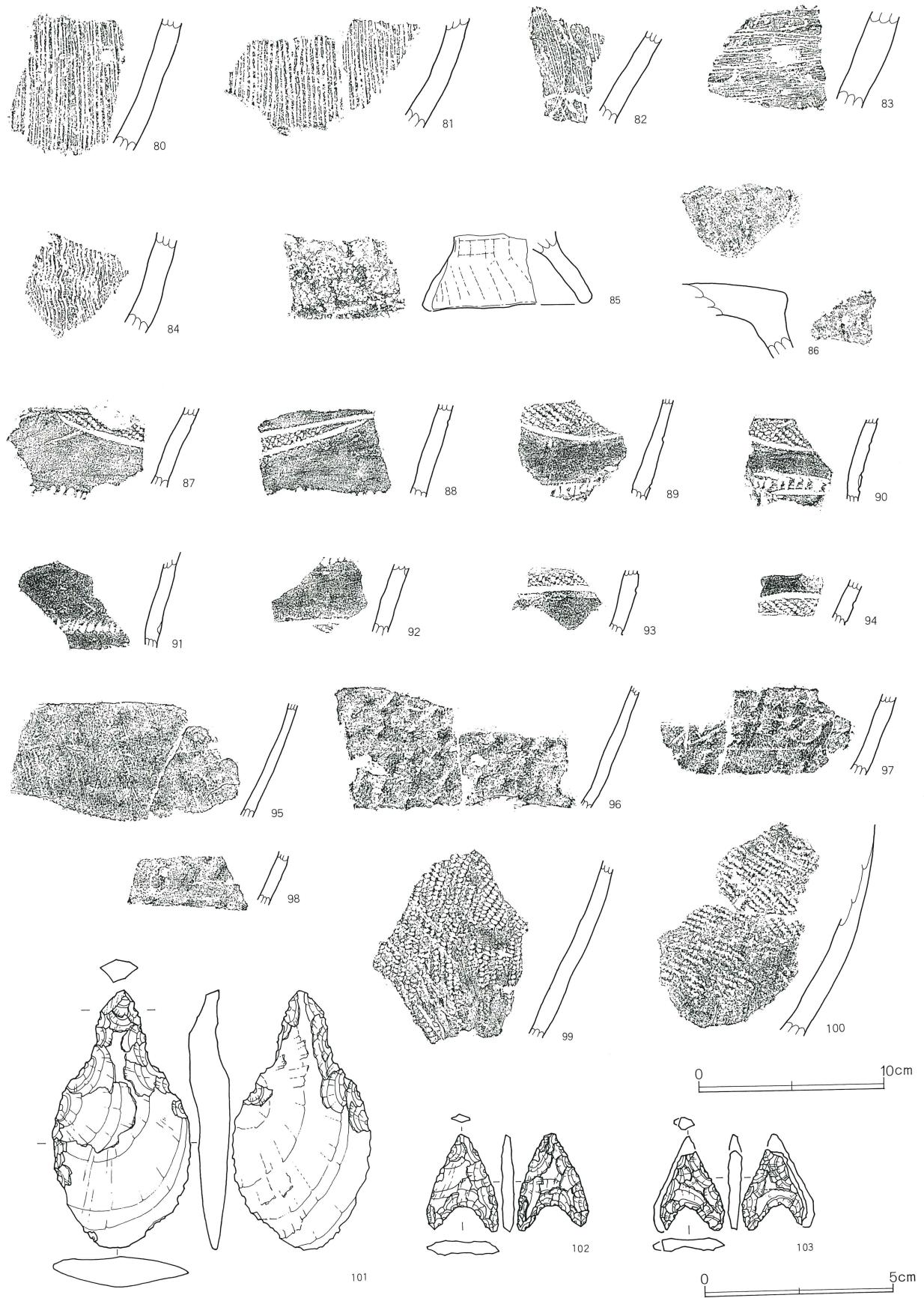
第11図 繩文土器(3)



第12図 縄文土器(4)



第13図 縄文土器(5)・石器



び手状の沈線が描かれる。

第10図24～第11図32は梶山類の深鉢である。両側になぞりを加えた隆帯により大柄の渦巻文が描かれ、空隙部に地文縄文が充填される。北本市提灯木山遺跡等、県東部を中心に類例が多数知られている。

同図33～41は2本の微隆起線によってJ字・渦巻きなどのすり消しモチーフが描かれる。38はキャリパ一類的な口縁部文様帶を持つものであろう。39はひさご形の土器である。ひさご形土器にこの種の文様が描かれるのは比較的まれなケースといえよう。

第11図42～第12図63は、口縁部文様帶をもたない深鉢口縁部である。

42は口縁直下に1条の隆帯が施文され、ここからすり消し懸垂文が垂下する。地文はR L単節縦位回転の縄文だが、隆帯上にも横位回転で施文される。

43～45は口縁直下に列点文が巡る。44は渦巻状のすり消しモチーフがみられる。

46～53は胴部に波状や逆U字状のすり消しモチーフが描かれる。46～48、53は口縁直下に1条の沈線が巡り、この部分に無文帶が存在する。

54～61は口縁下に幅広の無文帶をもつもので、大半が胴張りの浅鉢であるものと思われる。60・61が条痕文、それ以外は地文縄文である。

第12図62は幅の狭い平行沈線によって文様が描かれる深鉢口縁部である。同図63は口縁下に沈線が巡り、地文縄文がみられないもので、深鉢か、胴張りの浅鉢の可能性もある。

第12図64～70は曲線的なすり消しモチーフのみられる胴部破片である。64・67は胴上半部にJ字文が描かれるものであろう。65・66はS字等のアルファベット文である。これら的一部ないし大半は後期初頭に属するものであろう。

第12図71は、無文地に鋸歯状のモチーフが描かれ

るものであり、後期初頭の所産と考えられる。

第12図72～78は両耳壺である。72は口縁部であるが、両耳壺に特徴的な屈曲がほとんどみらないため、寸胴の広口壺である可能性もある。75は唯一、肩部の文様帶がみられる資料である。76・77は把手の一部である。78は破片の上端で地文縄文が横位回転に転じており、この部分が肩部の文様帶に隣接しているものとみられる。

第12図79～第13図84は条痕文のみの胴部破片である。79は深鉢であるが、それ以外は浅鉢であろう。83は非常に希な横位の条痕である。84は波状化した縄文である。

第12図85は台付き土器の脚台部である。86は器台の一部と考えられるものである。

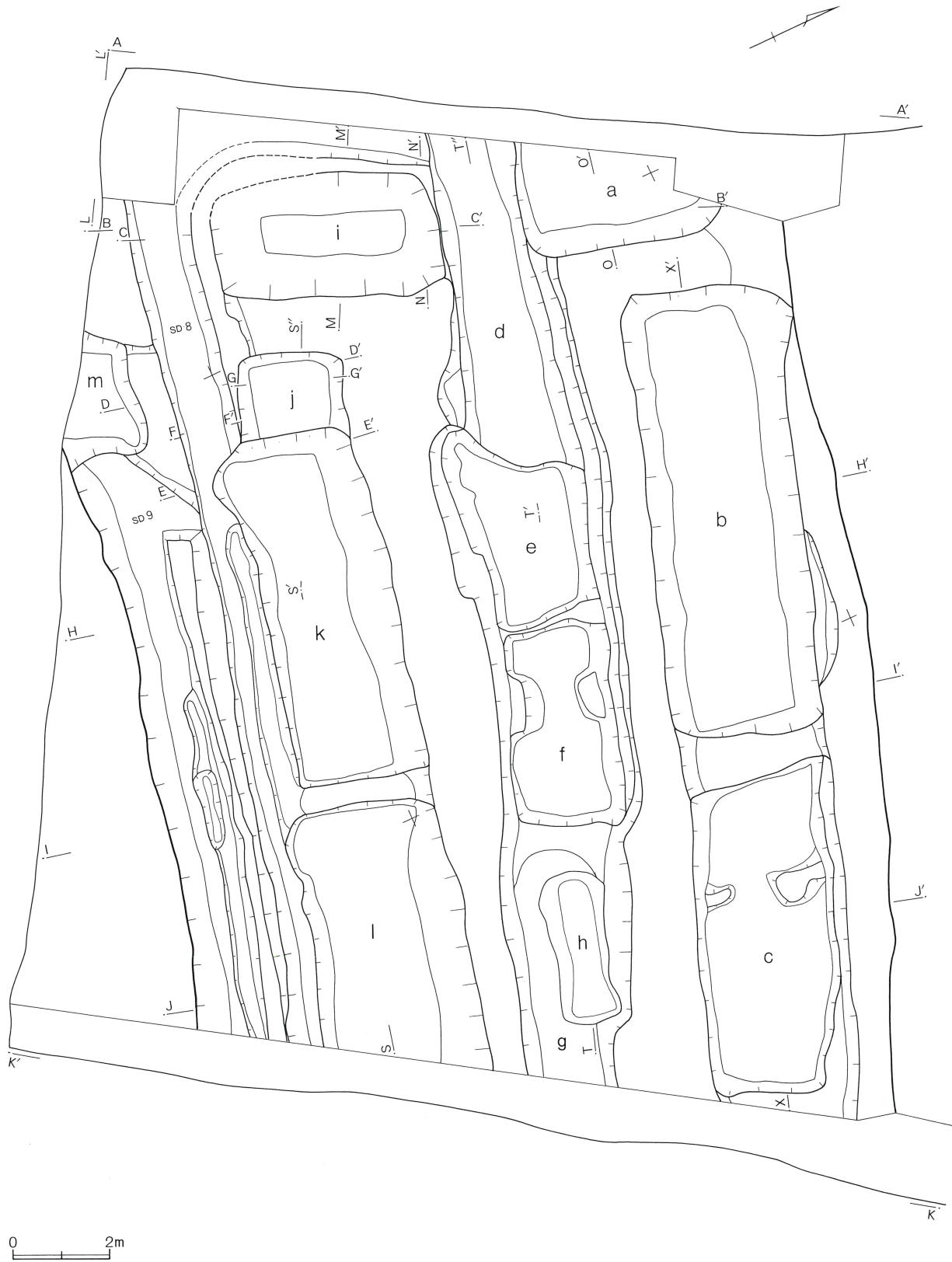
第9図6は後期初頭の称名寺式終末に並行する土器で、大波状口縁の深鉢胴下半部であろう。平行沈線によってJ字と、これを横位に連結するたすき状のモチーフが描かれ、モチーフ末端にひれ状の貼り付け文が付される。

第9図7と、第13図87～94は後期後葉の安行I式である。第9図7は砲弾型深鉢の口縁部である。口縁下にすり消し縄文による横位の区画を有し、これを横切って縦長の突起が配される。第13図87～92は胴部中段のくびれの部分で、大波状口縁の深鉢に属するものであろう。半月形のすり消しモチーフに沿って、へら状工具先端を用いた刺突列が巡る。

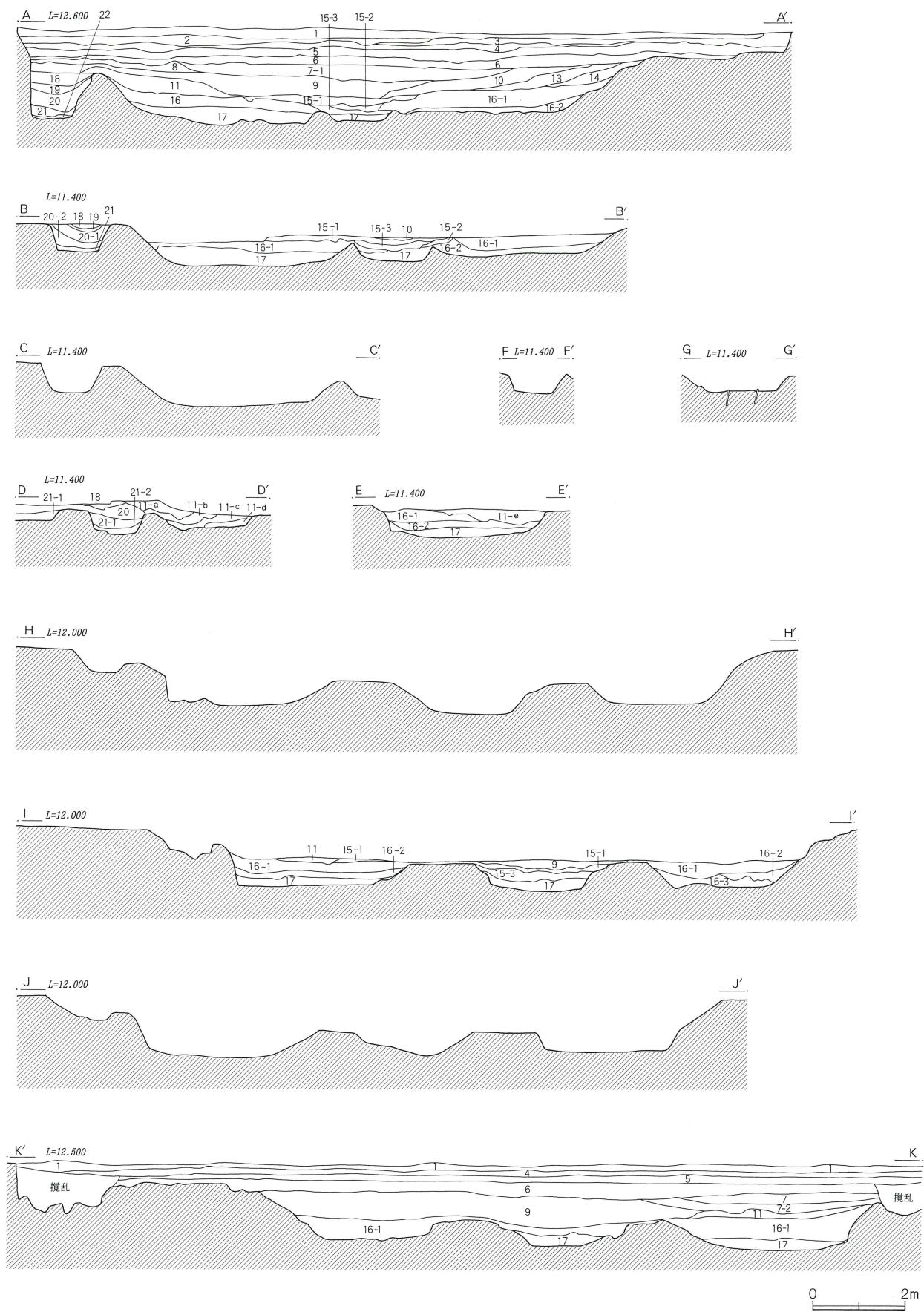
第9図4・5、第13図95～98は製塩土器である。全面に輪積みの痕跡を残し、外面には指頭やへら状工具によるなで調整がみられる。内面にはしばしば板状の当て具の痕跡が観察される。

第13図99・100はやや粗い縄文だけが施文される胴部である。中期末葉～後期初頭に並行するものであろう。

第14図 堀跡



第15図 堀跡断面図(1)



## 2. 中世

### (1) 堀 跡

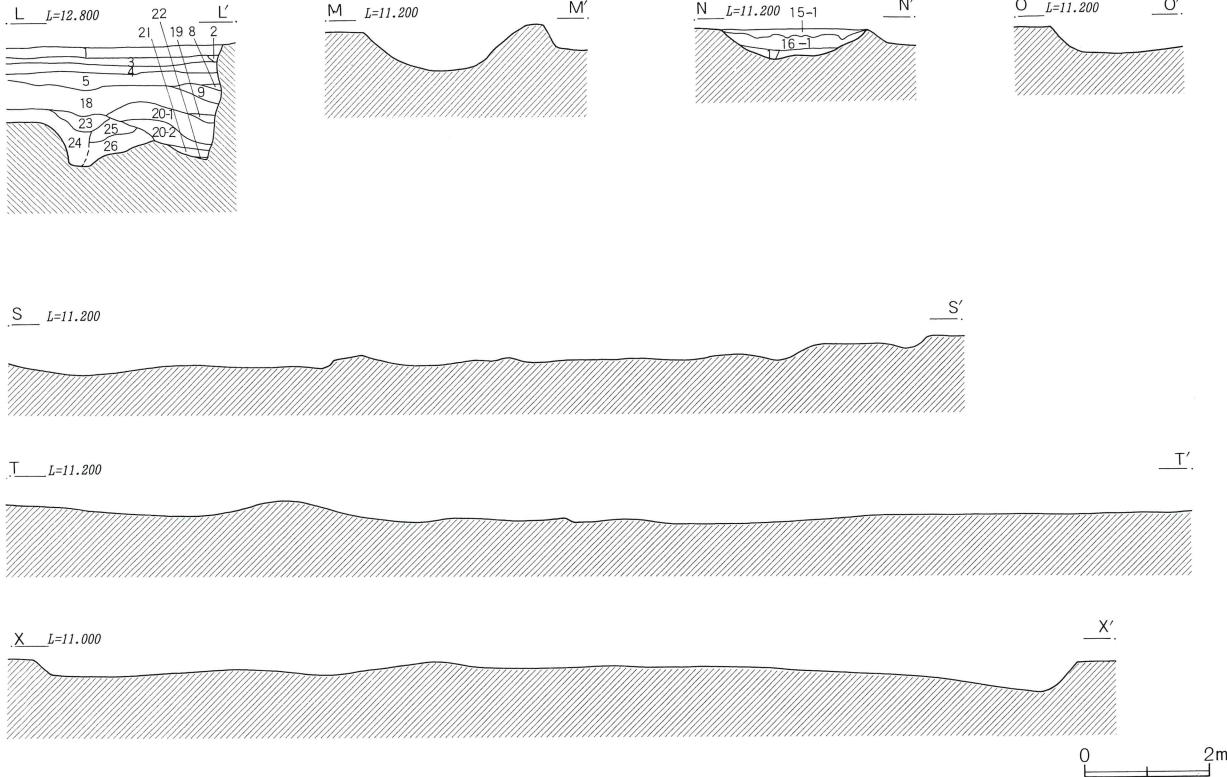
調査区の南半は、御蔵屋敷跡の南限を区切る堀跡である。騎西町教育委員会の調査で、東側の道路の調査で東西に走る堀跡を検出している。本調査区でも東西方向にその続きとして検出した。堀跡は、障子堀といわれる特殊な形態をしている。

堀跡の内部は大きく3条に区切られており、それぞれがさらに畝状の高まりで区切られ、小区画を形成している。この升形の小区画に小文字のアルファベットa～mを割り当てた。堀跡全体の幅は、SD 8の南側立ち上がりまでとして、12.00mである。深さは、堀跡の上面から約0.77mである。

区画a～mまでの各計測値は、畝状の立ち上がりからの計測値である。

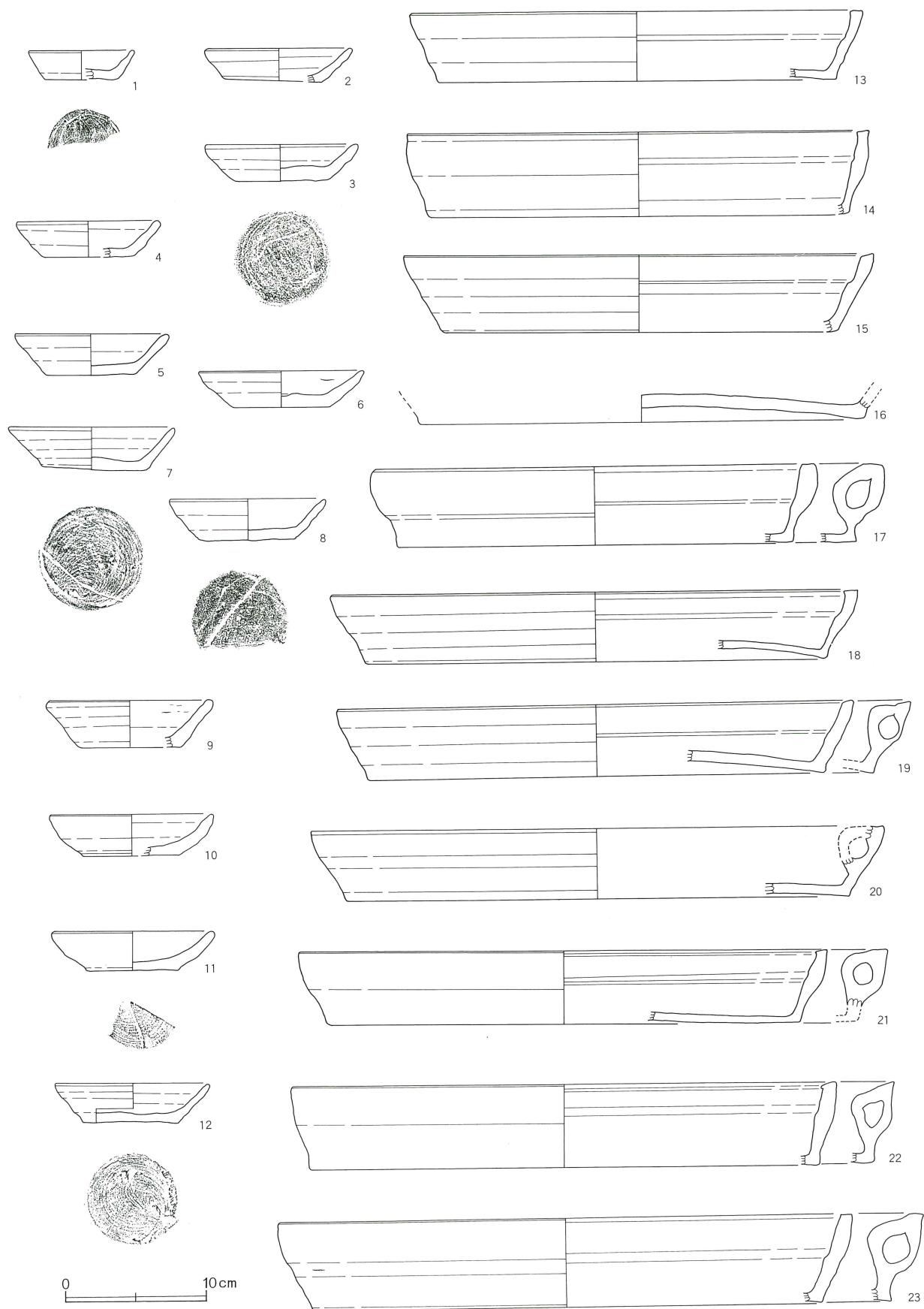
区画aは堀跡の西隅であるD 1 グリッドに位置する。平面形は長方形である。西側が調査区外、東側が削平され、全容は不明であるが、長軸は南北方向でほぼ3.15m、短軸は東西方向で推定2.05mである。深さ

第16図 堀跡断面図(2)

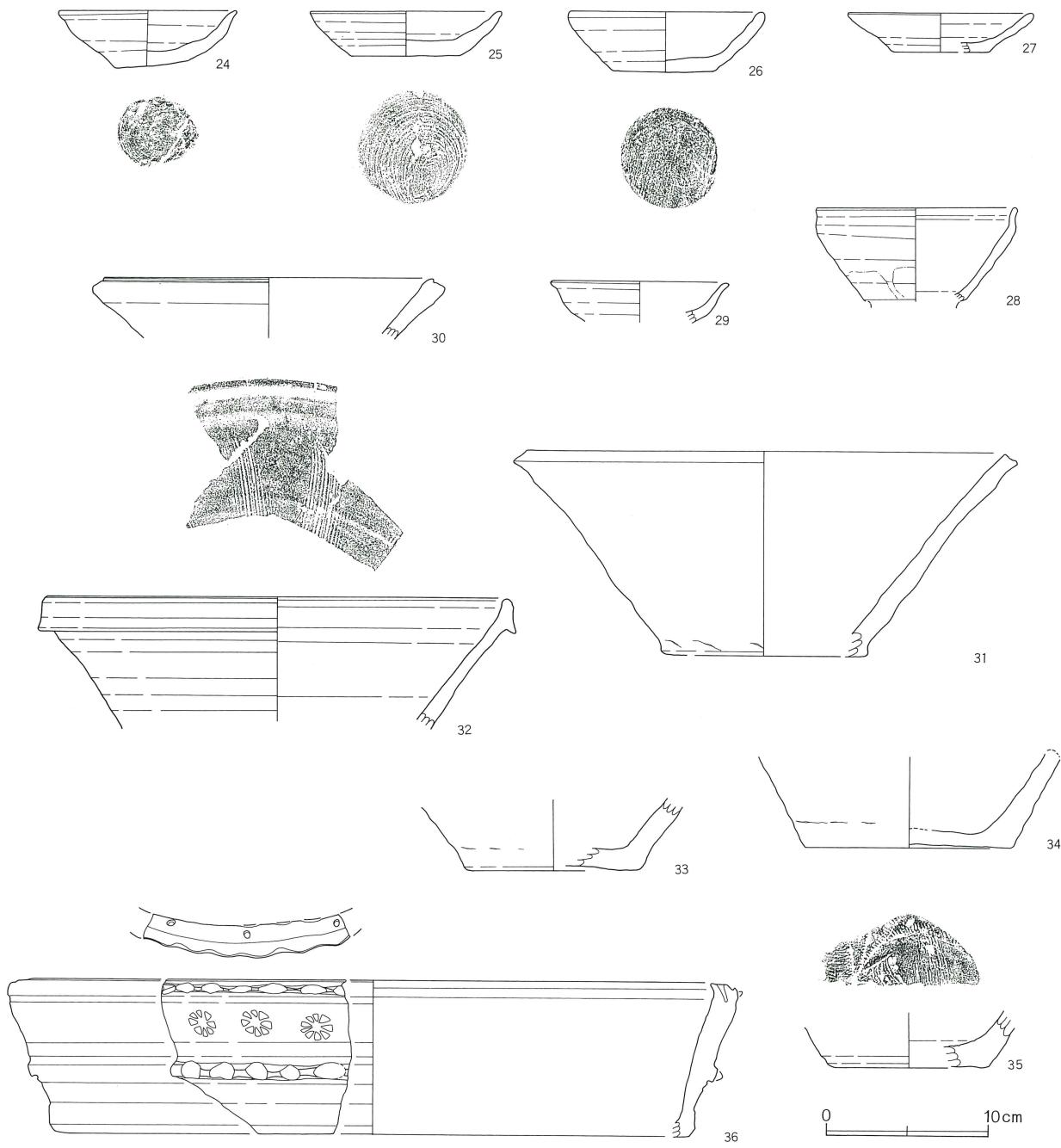


1 シルト 暗褐色土 (10YR3/4)	耕作土		
2 シルト 暗褐色土 (10YR3/4)	炭化物 (4.5mm) 少量 小～大ロームブロック極多量 焼土 (5mm～細粒) 少量 埋め戻しか、耕作の反転か、南東にのみ。		
3 シルト 黒褐色土 (10YR3/2)	炭化物 (4.5mm) 少量 ローム粒子 (5～10mm) 中量 焼土中量 FeO2 少量 マンガン粒状中量		
4 シルト 灰黄褐色土 (10YR4/2)	炭化物少量 焼土粒子少量 FeO2 中量 マンガン粒子少量 バミス状白粒少量 同層の底面付近 (斜線部) にマンガンもしくはFeO2の沈着あり		
5 シルト 灰黄褐色土 (10YR4/2)	炭化物 (4.5mm) 少量 焼土 (細粒) 少量～中量 マンガンか？スコリアか？中量 バミス状白粒中量		
6 シルト 暗褐色土 (10YR3/3)	炭化物 (4.5mm) 少量 ローム粒子 小ブロック少量～中量 焼土粒子少量しまりない		
7-1 シルト 暗褐色土 (10YR3/6)	炭化物 (4.5mm) 少量 ローム中ブロック極多量 マンガン中量 しまりない		
7-2 シルト 暗褐色土 (10YR3/6)	炭化物粒少量 ローム粒子少量 ロームブロック極少量 第7-1層に比ベシルト質多く純層に近くなる。		
8 シルト 暗褐色土 (10YR3/4)	炭化物 (4.5mm) 少量 ローム中ブロック・粗粒子極多量 マンガン多量		
9 シルト 暗褐色土 (10YR3/3)	炭化物粒子極少量 ローム中ブロック・粗粒子多量 焼土極少量 黒褐色シルトブロック多量		
10 シルト 暗褐色土 (10YR3/4)	炭化物粒子少量 ローム中ブロック・粗粒子極多量 黒褐色シルトブロック中量 シルト質ほとんどないくらいローム粒子、ロームブロック		
11 埋め戻しローム 褐色土 (10YR4/6)	ロームの中に黒褐色シルト大ブロック中量 同層下面及び15層上面、10層上面にFeO2の沈着 第11層が最も濃い埋め戻しローム ロームの中に黒褐色シルト大ブロック中量 同層下面及び15層上面、10層上面にFeO2の沈着 第11層が最も濃い		
11b 暗褐色土 (10YR3/4)	シルト埋め戻し 焼土なし、炭化物なし (有機物有り) FeO2		
11c 鈍黄褐色土 (10YR5/4)	ローム埋め戻し		
11d 暗褐色土 (10YR3/4)	シルト埋め戻し FeO2		
13 シルト 暗褐色土 (10YR3/4)	炭化物粒子極少量 ローム小ブロック・粗粒子中量 焼土極少量 マンガン中量、下面に多量 下面近く白色シルト一部あり		
14 シルト 暗褐色土 (10YR3/3)	炭化物粒子極少量 ローム粒子少量一部ブロックあり 焼土極少量 マンガン中量 下面の一部沈着あり		
15-1 シルト及びローム 褐色土 (10YR4/4)	ローム中ブロック極多量 風化した粘土質ローム極多量 シルトブロック中量		
15-2 シルト 暗褐色土 (10YR3/4)	有機物 (湿性植物) 含 ローム中ブロック多量 根跡に流れ込んだFeO2あり 底面に蘆の茎ようのものが多くあり ローム小ブロック多量 黒色シルトブロックが混じる 斜線部ローム大ブロック (褐色 10YR4/4)		
16-1 シルト	灰横褐色土 (10YR4/2) 炭化物少量 ローム粒子少量 縦縞にFeO2あり、植物の根跡、湿面であった。		
16-2 黒褐色土 (10YR3/1)	16-1層とほとんど同じ、分層が難しいが、相違点としてロームブロックが混じる。色調がやや黒い。16-1層へと明確に色調が変わるのはない。		
17 シルト 黒褐色土 (10YR3/1)	ロームは根跡からの流れ込みのみ一部還元土壤 灰色シルト粘土中ブロック中量		
18 シルト 黒褐色土 (10YR3/2)	炭化物極少量 ローム粒子少量 焼土極少量 FeO2粒子 (3mm) 中量 他シルト純層に近い		
19 埋め戻しローム 褐色土 (10YR4/6)	ローム中ブロック、シルト中ブロック中量 焼土下面近く少量、下面にFeO2沈着 第11層に対応		
20-1 シルト 灰黄褐色土 (10YR4/2)	ローム粒子極少量 縦縞状にFeO2の沈着 根跡 第16層に対応		
20-2 シルト (10YR)	ローム粒子中量 ローム中ブロック中量をナミナ状に含む		
21-1 シルト 黒褐色土 (10YR3/1)	FeO2粒子少量 灰色シルト粘土 大ブロック多量 第17層に対応		
21-2 黒褐色土 (10YR3/1)	ローム粒子がより多く混じる 木質、有機物多量		
21-3 黒褐色土 (10YR3/1)	ローム粒子少量 粘質シルト やや色調暗い 有機物有り		
22 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)	ローム小ブロック極少量 粘土に近いシルト		
23 シルト 褐色土 (10YR4/4)	ロームブロック極多量		
24 シルト 暗褐色土 (7.5YR3/3)	ローム中ブロック中量 全体に固いシルトブロック多量		
25 シルト 黒褐色土 (10YR3/2)	ローム粒子中量 ローム小ブロック中量 焼土かFeO2粒子が中量 シルト粒子多量		
26 シルト 褐色土 (10YR4/4)	ローム大ブロック・小ブロック中量 ローム粒子多量 FeO2粒、沈着層あり シルトブロック中量		

第17図 堀跡出土遺物(I)



第18図 堀跡出土遺物(2)



第17図 堀跡出土遺物(I) 遺物観察表

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	備考
1	土師器	皿(灯明皿)	(7.5)	2.1	(5.2)	A	A,C,E	にぶい橙	40	底部糸切り油煙付着
2	土師器	皿	(10.4)	2.4	(6.8)	B	B,C,F	にぶい黄燈	60	
3	土師器	皿(灯明皿)	10.8	2.60	6.35	B	B,C,E	にぶい黄燈	90	底部糸切り油煙付着
4	土師器	皿	(10.2)	2.5	(6.4)	B	A,E	橙	20	底部糸切り
5	土師器	皿	(10.85)	2.90	6.10	B	A	にぶい黄燈	30	底部糸切り
6	土師器	皿	(11.6)	2.55	6.8	B	B,C,E	橙	45	底部糸切り
7	土師器	皿	(11.6)	3.0	7.3	B	B	にぶい橙	70	底部糸切り
8	土師器	皿	(11.0)	2.9	6.8	B	C,E,F	にぶい橙	40	底部糸切り
9	土師器	皿	(11.8)	3.3	(6.8)	B	B,C,E	橙	30	
10	土師器	皿	(11.6)	2.9	(6.6)	B	A,B,C	にぶい黄燈	25	底部糸切り
11	土師器	皿	(11.6)	2.7	(6.5)	B	A,C	浅黄橙	30	底部糸切り
12	土師器	皿(灯明皿)	10.9	2.75	6.65	A	A,B,C	にぶい黄燈	100	底部糸切り 煤付着

深さは0.61mで、長軸の方位はN-74°-Wである。

区画fはD 2グリッドに位置する。平面形は長方形である。cと同様出島状の作り出しがある。短軸は1.8m、長軸は4.1mである。深さは0.52m。長軸の方位はN-74°-Wである。

区画gはD 3グリッドに位置する。平面形は長方形である。短軸2.35m、長軸推定で4.70mである。深さ0.33mである。長軸の方位はN-63°-Wである。

区画hはD 3グリッドに位置する。平面形は長方形である。短軸は1.03m、長軸は3.13mである。深さは0.14m、長軸の方位はN-68°-Wである。区画g内の土壙のような印象を受け、規則的な配置ではない。d～gは連続的にセットを成し、堀跡中央の1条を形成している。とくにe・fは、b・cと同じような対の関係にある。

区画iはD 1グリッドに位置する。平面形は長方形である。短軸は2.83m、長軸は4.6mである。深さは0.60m。長軸の方位はN-24°-Eである。軸方位は、これまでのものと直行する形である。区画dを挟むが、区画aと対を成す。

区画jはD 2グリッドに位置する。平面形は正方形に近い長方形である。東側が、区画kに向って開放された状態で、テラス状になっている。短軸は1.65m、長軸は2.15mである。深さは0.30m、長軸の方位は

N-23°-Eであるが、遺構の方位としては、この直行方向と考えたほうがいい。

区画kはD 2グリッドに位置する。平面形は細長い長方形である。短軸は2.7m、長軸は7.15mである。深さは0.52m、長軸の方位はN-75°-Wである。

区画lはE 3グリッドに位置する。平面形は長方形である。短軸は3.2m、長軸は東端が切れていまうが、検出部分で5.30mである。深さは0.61m、長軸の方位はN-74°-Wである。j・k・lがセットになり、北側の一条を形成しているが、jの部分で行き止まっている。

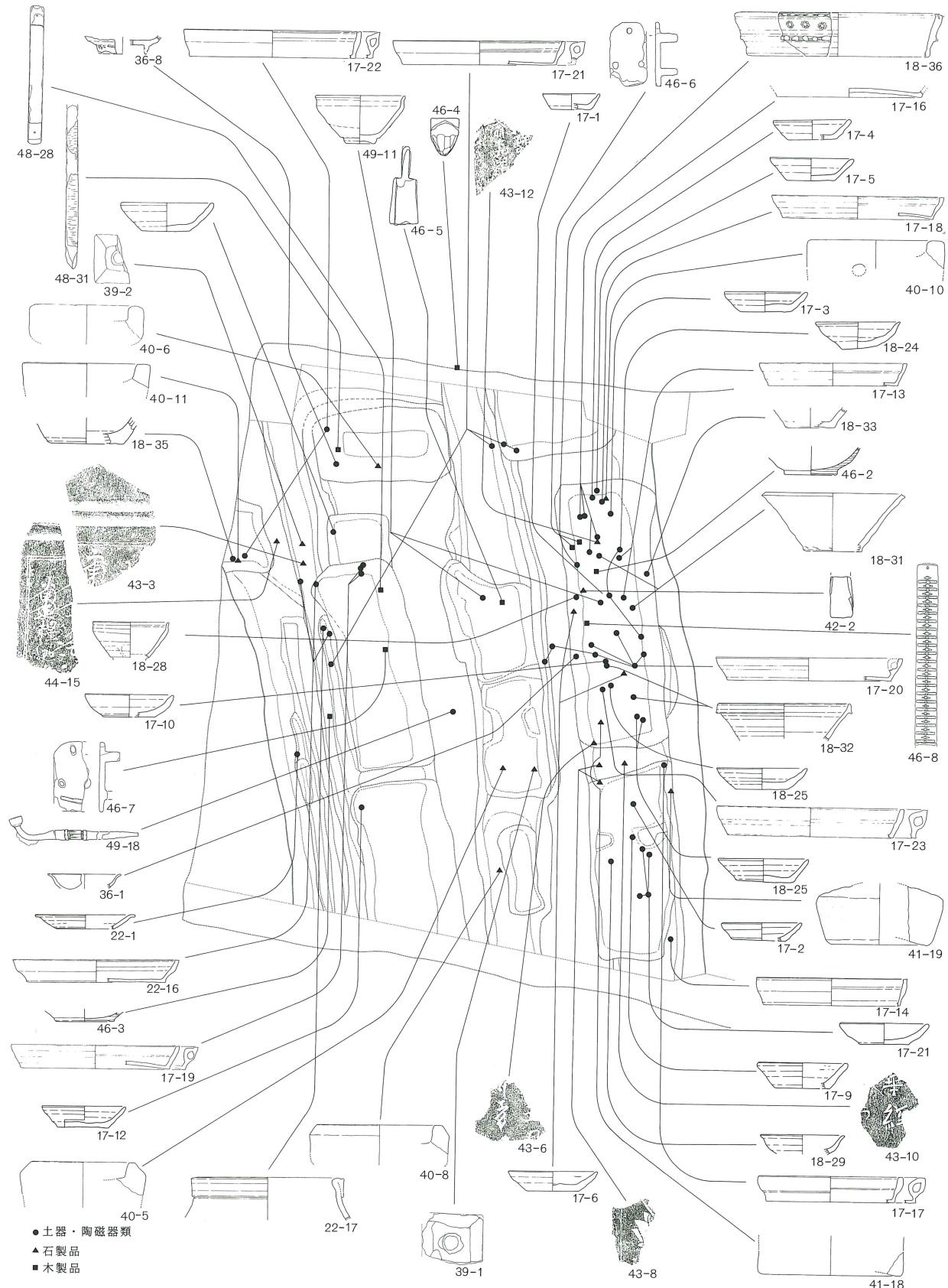
区画mはE 1グリッドに位置し、他の区画から隔離されている感がある。平面形は長方形である。短軸は推定で1.25m、長軸は2.45mである。深さは0.22m、長軸の方位はN-71°-Wである。

堀跡は、断面観察からいくつかの段階があったことがわかる。遺構からわかる最も初期の堀跡は、区画a～mが機能していた障子堀の段階である。いくつかの変遷はあるものの、その後単純な皿状の掘り込み（堀跡）であった段階が確認できる。第11層はローム層である。このようにローム層が二次堆積することは、通常考えられないので、人為的な埋め戻しで、皿状の掘り込みを形成したものと考えられる。

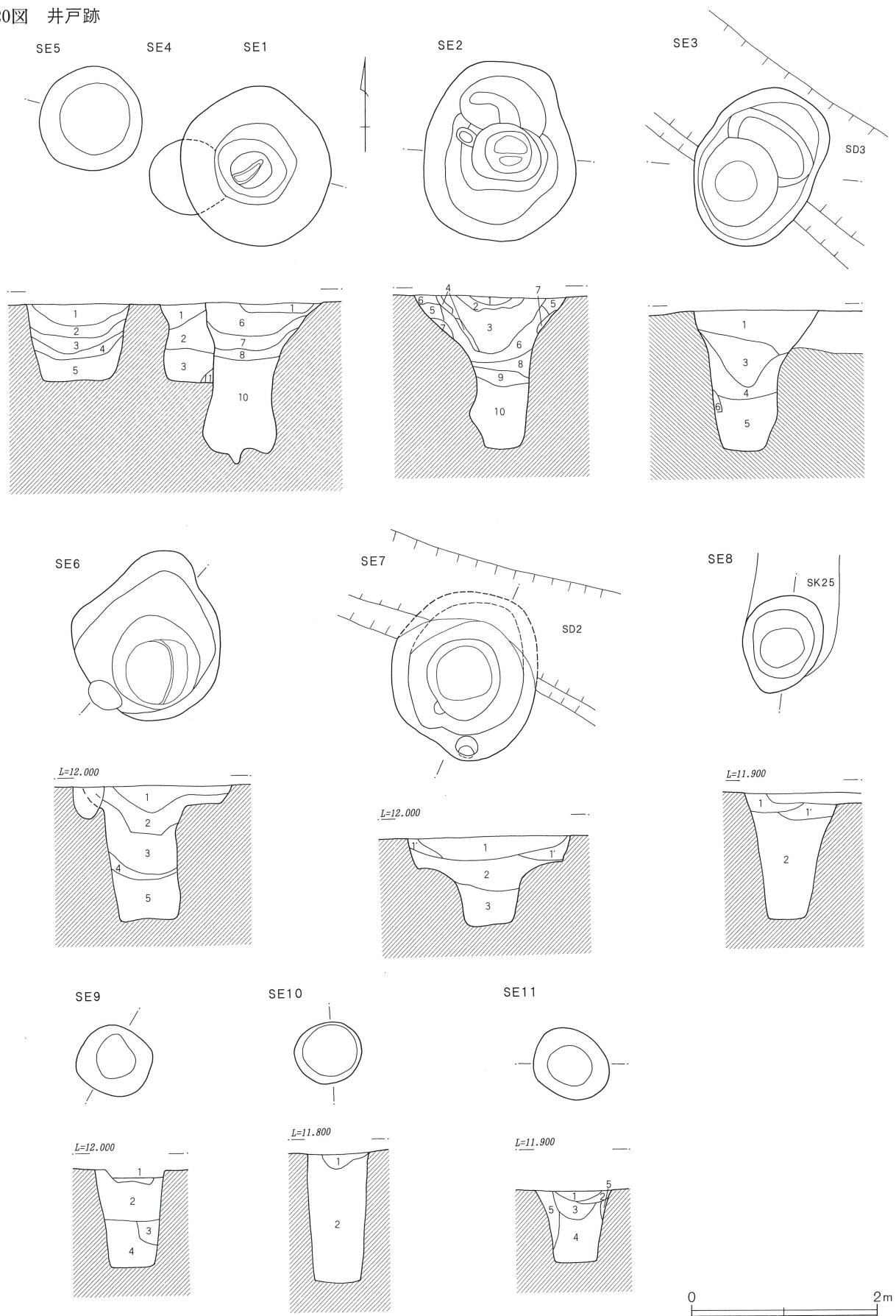
第17・18図 堀跡出土遺物遺物観察表

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	備考
13	在地・瓦質	内耳鍋	(31.75)	4.80	(27.80)	B	B,C,E	褐灰	5	
14	在地・瓦質	内耳鍋	(32.25)	5.80	(29.30)	B	B,C,E	にぶい黄燈	5	
15	在地・瓦質	内耳鍋	(33.0)	5.4	(27.8)	B	B,C,E	にぶい黄燈	5	
16	在地・瓦質	内耳鍋			31.0	B	C,E,F	灰褐	35	
17	在地・瓦質	内耳鍋	(30.9)	5.4	(27.5)	B	C,E,F	褐灰	10	煤付着
18	在地・瓦質	内耳鍋	37.10	4.80	32.50	B	C,E,F	灰褐	10	煤付着
19	在地・瓦質	内耳鍋	(36.3)	5.0	(32.1)	B	C,E,F	にぶい黄燈	20	煤付着 底部穴あり
20	在地・瓦質	内耳鍋	(40.20)	4.90	(35.10)	B	C,E,F	明褐	30	
21	在地・瓦質	内耳鍋	(37.1)	5.10	(32.90)	B	C,E,F	褐灰	30	
22	在地・瓦質	内耳鍋	(38.0)	5.8	(35.7)	B	A,B,C	燈	10	
23	在地・瓦質	内耳鍋	(40.3)	6.1	(35.8)	B	B,C,F	褐灰	8	
24	土師器	皿	(11.0)	3.80	4.5	B	E,I	灰白	60	底部糸切り
25	土師器	皿	11.7	2.7	6.7	B	C,F,I	にぶい橙	90	底部糸切り
26	土師器	皿	12.2	3.65	6.25	B	A,B,C	浅黄橙	100	底部糸切り 風化部分あり
27	土師器	皿	(11.4)	2.35	(6.0)	B	A,F	灰白	25	底部糸切り
28	瀬戸・美濃	天目茶碗	(12.15)	<5.70>		A		赤黒	30	
29	瀬戸・美濃	灰釉稜皿	(10.65)	<2.50>		B			25	
30	在地・瓦質	擂鉢	(20.00)	<3.60>		B	C,E	灰	5	
31	在地・瓦質	擂鉢	(29.4)	<12.5>	(12.6)	B	C,E,F	にぶい黄燈	40	15世紀後半
32	瀬戸・美濃	擂鉢	(25.95)	<7.55>		A		褐灰	20	
33	在地・瓦質	擂鉢		<3.80>	(10.6)	B	C,E,F	橙	10	内側煤付着
34	在地・瓦質	擂鉢		<5.8>	(12.5)	B	C,E,G	にぶい黄燈	30	米字 櫛目
35	瀬戸・美濃	擂鉢		<3.45>	(10.00)	B		暗赤灰	30	二条櫛目使用痕あり
36	瀬戸・美濃	火鉢	(45.4)	9.45	(38.8)	A	C,E,I	にぶい黄燈	20	

第19図 堀跡出土状況図



第20図 井戸跡



SE - 1 · 4 · 5

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) しまり良くやや粘性のある砂質 1cm 前後の炭化物・焼土粒を含んでいる。少量のロームブロックも含んでいる。  
S E - 3 の 1 層に近い
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) しまり良くやや粘性のある砂質 1cm 前後の炭化物・焼土粒を含んでいる S E - 2 の 1 層に近い
- 3 黒褐色土 (10YR2/3) しまり良く粘性もある 1cm 前後の炭化物・焼土粒を含み、下方へ行くほど酸化の形跡が見られる。
- 4 明褐色土 (7.5YR5/6) 酸化物の層 しまりの悪い砂質状の層
- 5 暗褐色土 (10YR3/4) しまりやや良く粘性は高い ところどころに酸化物を含む
- 6 褐色土 (7.5YR4/4) しまり悪く粘性も弱い 空気を多く含み崩れやすい S E - 3 の 3 層に近い
- 7 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり、粘性ともにややあるという程度 少量のローム粒子を含んでいる。
- 8 暗褐色土 (10YR3/4) しまり良く粘質 1cm 前後の炭化物を少量含む 焼土粒子も少しある
- 9 暗褐色土 (10YR2/3) しまり良く粘質 3cm 前後のロームブロックと 1cm 前後の炭化物・焼土ブロックを含んでいる シルト気味であり、1 層よりもロームブロックの混入が多い S E - 2 の 6 層にロームを加えたという感じ 下場付近には酸化の堆積が見られる
- 10 暗褐色土 (10YR3/3) しまり良く粘質 少量のロームブロック (1cm 前後) を含む また 1cm 前後の炭化物の混入も見受けられる。9 層よりも粘土でザラザラ感がなく、ロームも少ない
- 11 褐色土 (10YR4/4) しまり良く硬質 地山層

SE - 2

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) しまり良くやや粘性のある砂質 炭化物・ロームブロックは含まず、土質的には SE - 3 の 2 層に近い
- 2 褐色土 (10YR4/4) しまりは良いが粘性は弱い ロームブロックを多く含む
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) しまりはやや悪く、粘性はややある。空気を多く含み、ロームブロック (指頭位) を含む
- 4 炭化物層 3 層に多量の炭化物を含んでいる状態
- 5 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり良く粘質
- 6 暗褐色土 (10YR3/3) しまり良く粘性があり、シルト質が強い。1cm 前後の炭化物粒子と少量の焼土粒子を伴う。SE - 3 の 1 層に近い
- 7 褐色土 (7.5YR4/4) しまりは悪く粘性も弱い。SE - 3 の 3 層に近いが、前記ほど空気を含まない。
- 8 暗褐色土 (10YR3/3) しまり良く粘質。6 層に近いが、ロームブロックの混じり具合が 6 層より多い。
- 9 黒褐色土 (10YR2/3) しまり良く粘質であるが、シルト質、酸化物を含む
- 10 暗褐色土 (10YR3/4) しまりやや良く粘質 空気を含み密度は低いシルト質である

SE - 3

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) しまり良くやや粘性があり、シルト気味。1cm 前後の炭化物を含み、少量の焼土粒子も伴っている。ロームブロックを含んでいる。
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) しまり良くやや粘性のある砂質。上部に微量の炭化物を含む。ロームブロックは含んでいない。
- 3 褐色土 (7.5YR4/4) しまり良く粘性は弱い。壁面の崩落かと思われ、空気を多く含んでいて崩れやすい。
- 4 暗褐色土 (10YR3/4) しまり良く粘質。壁面付近に 1cm 前後の炭化物を少量含む。粘性は極めて高い。
- 5 黑褐色土 (10YR3/2) しまり良く粘質。シルト質
- 6 暗褐色土 (10YR3/3) しまり良く粘質。壁面か何かのロームの崩落、風化土層。炭化物 (指頭程度) を含んでいる。

S E - 6

- 1 シルト 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土中粒子少量 炭化物中粒子少量 ローム粒子・中粒子少量 ロームブロックあり パミス状白色粒子少量
- 2 シルト 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土粒子少量 炭化物中粒子少量～中量 小ブロック含む ロームブロック中量 マンガン・FeO2 粒中量
- 3 ローム+帶状シルト 鈍黄褐色土 (10YR4/3) ロームが固化もしくは水成の作用によって、シルト粘土状になっている 非常に細かい
- 4 シルト 黒褐色土 (10YR3/1) 炭化物中量 ローム小ブロック中量 FeO2 斑文やや大きい
- 5 シルト 暗褐色土 (10YR3/4) 砂粒子少量 FeO2 斑文多量

SE - 7

- 1 黒褐色土 (10YR3/2) しまり良くやや砂質。少量の炭化粒、ローム粒子を含む。中央付近は、空間が多い
- 1' 黒褐色土 (10YR3/2) 1 層よりも粒子が細かく、固くしまっている。
- 2 褐灰色土 (10YR4/1) しまり良く、粘性に富む。全体に灰色の粘土ブロックが入る。少量の炭化物、鉄分の凝固した物質が混入する。
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) 本遺構の基底部。粘性に富み、2 層に上り多くのロームブロックが混入した状態。

SE - 8

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) しまり良くやや粘質。均一な黒色土の中に微量の粒子が混じる。
- 1' 黒褐色土 (10YR2/2) 1 層よりも気泡が多く、緻密さに欠けている。他の混入物などは 1 層と同じ。
- 2 黑褐色土 (10YR2/3) 1 層よりもやや褐色味が強い。粘性のある均質な層でしまりが良い。ローム粒子は 1 層よりは混じらない。

SE - 9

- 1 シルト質粘土 褐色土 (10YR4/4) 焼土、炭化物を含む。ロームあまりなし。鉄分を含む。そのため、サビ色などで 10YR4/4 が強いが 10YR4/2 灰黄褐色土が地色。
- 2 シルト 暗褐色土 (10YR3/4) 烧土粒子を多く含み、1cm 前後のものも少量含む。炭化物 5mm 前後のものを中心に多量に含む。ローム少量含む。土は上部ほど多く、炭化物は全体的に散っている。
- 3 シルト質粘土 褐色土 (10YR4/4) 烧土、炭化物、ロームを少量含む。1 層に近いが、1 層よりしまりが悪く、炭化物、焼土粒を含んでいる。混じりのため、1 層との違いが見出されるが、基本土 (シルト質粘土) は同じ。
- 4 シルト 暗褐色土 (10YR3/4) 烧土あまりなし。炭化物、ロームを少量含む。2 層に近いが炭化物焼土粒の量が極めて少ない

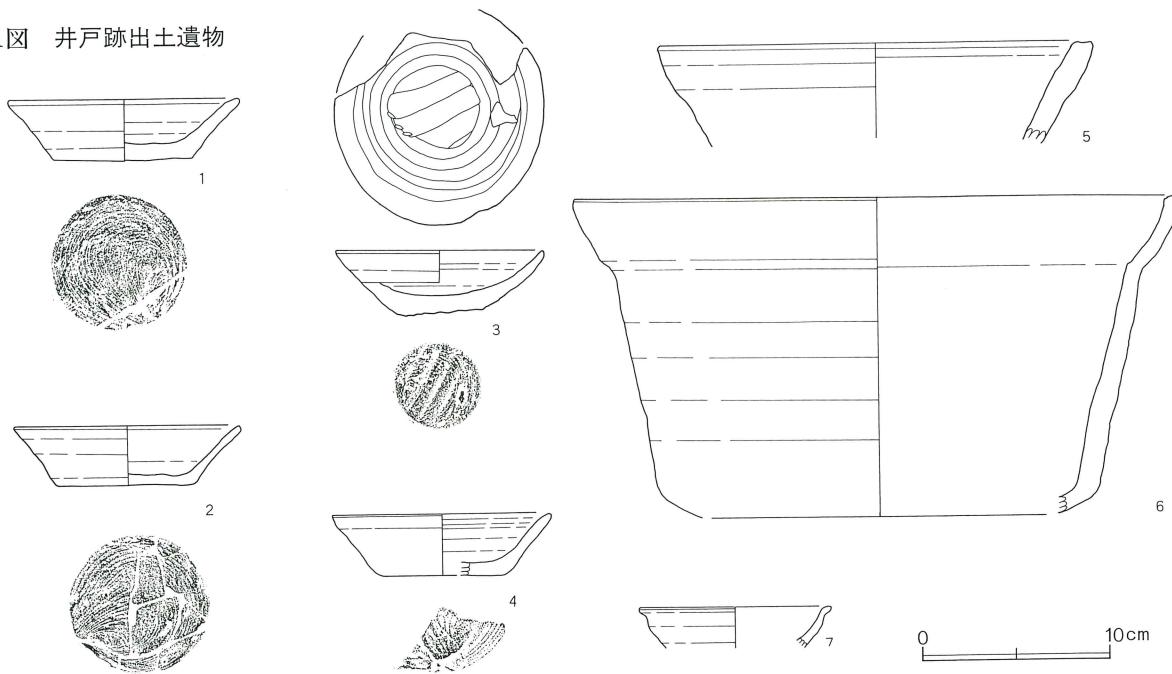
SE - 10

- 1 シルト 暗褐色土 (10YR3/3) 炭化物中粒多量 ローム中粒子中量 灰白色粘土
- 2 シルト 暗褐色土 (10YR3/3) ローム大ブロック多量 しまりない

SE - 11

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) しまり良く砂質。4 層中に焼土粒、炭化物が多く混入する。本住居の炉部をなすと思われるが、深い土壤状を呈する。
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) しまり良くやや砂質。6 層よりもロームブロックが多く入る。
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) 色調が 4 層と 7 層の中間に成す。焼土粒、炭化粒が多く混入。
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) 8 層から焼土粒、炭化粒を除いた性質。6 層の色調に近い。
- 5 褐色土 (10YR4/4) しまり良く、やや粘質。地山ローム層の上部にあたる。2 層と同 P 1

第21図 井戸跡出土遺物



## (2) 井戸跡

### 第1号井戸

第1号井戸はA 4 グリッドに位置する。平面形は円形である。S E 4 と重複関係を持つ。切り合いから本遺構のほうが新しい。石組み等は検出されていない。径は上場で1.66mである。下場では0.38m、その直行方向では、0.41mを測る。深さは1.72mであった。出土遺物はない。

### 第2号井戸

第2号井戸はB 4 グリッドに位置する。平面形は円形である。石組み等は検出されていない。径は1.66m、直行方向で1.9mである。下場では、0.46m、その直行方向で0.62mである。深さは1.62mである。瓦質の擂鉢の破片（第21図5）、板碑（第43図4）が出土している。

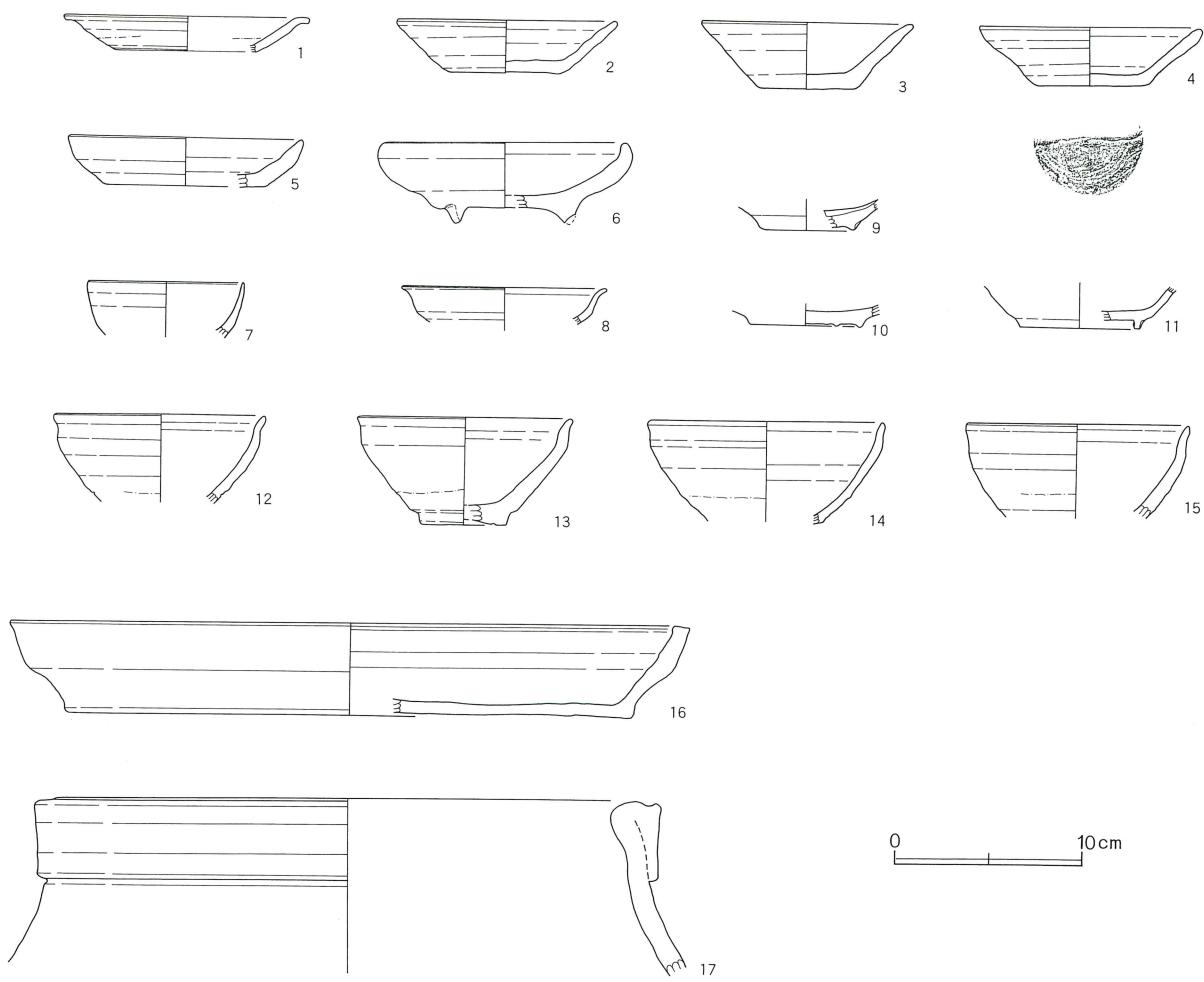
### 第3号井戸

第3号井戸跡はB 4 グリッドから検出された。SD

### 第21図 井戸出土遺物観察表

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	備考
1	土師器	皿	12.3	3.25	7.2	B	A	にぶい燈	100	底部糸切り
2	土師器	皿	12.05	3.25	7.05	A	A	橙	100	底部糸切り
3	土師器	皿	11.0	3.3	4.55	B	C,E,F	灰白	90	底部糸切り
4	土師器	皿	(11.65)	3.3	(6.5)	A	A	橙	20	底部糸切り
5	在地・瓦質	擂鉢	(23.0)	<5.35>		B	C,E,I	褐灰	5	
6	在地・瓦質	鍋	(31.8)	<16.8>	(22.35)	A	C,E,F	灰	25	15世紀後半
7	瀬戸・美濃	端反皿	(10.00)	<2.15>		A		浅黄	5	

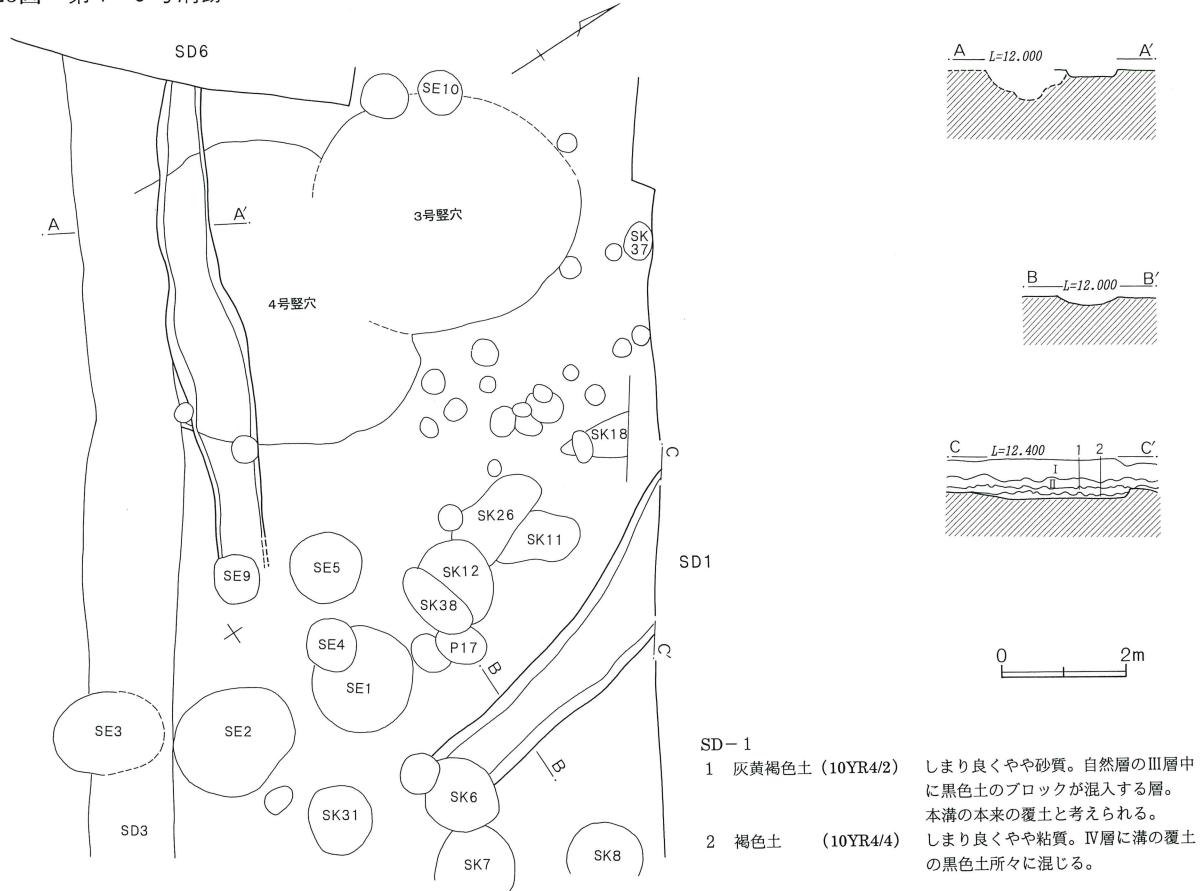
第22図 溝跡出土遺物



第22図 溝跡出土遺物遺物観察表

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	備考
1	瀬戸・美濃	縁釉皿	(13.00)	<1.80>		A		灰白	5	
2	土師器	皿	(11.6)	2.8	5.7	B	E	にぶい黄燈	45	底部糸切り 表土
3	土師器	皿	(11.2)	3.5	(5.00)	B	C,I	灰白	50	
4	土師器	皿	(11.70)	3.10	(5.90)	B	C,E	橙	50	底部糸切り
5	土師器	皿	(12.4)	2.55	(8.4)	B	A	灰黄褐	20	
6	土師器	香炉	(12.75)	4.2	(7.2)	B	A,B	にぶい燈	30	3脚付 煤付着
7	肥前	碗	(8.10)	<2.85>		A		明オリーブ灰	5	
8	瀬戸・美濃	灰釉皿	(10.80)	<1.80>		B		灰白	5	
9	瀬戸・美濃	灰釉皿		<1.60>	(4.80)	A		暗オリーブ	5	貫入
10	瀬戸・美濃	灰釉皿		<1.15>	(5.95)	A		オリーブ黄	10	貫入
11	瀬戸・美濃	灰釉皿		<2.30>	(6.30)	A		明緑灰	10	
12	瀬戸・美濃	天目茶碗	(11.60)	<4.65>		A		暗赤褐	10	
13	瀬戸・美濃	天目茶碗	(11.4)	5.6	(4.5)	A	A,B,C	黒褐	40	内反り高台
14	瀬戸・美濃	天目茶碗	(12.5)	<5.30>	(6.00)	A		にぶい赤褐	20	
15	瀬戸・美濃	天目茶碗	(12.50)	<4.60>		A		暗赤褐	5	
16	在地・瓦質	内耳鍋	(35.8)	4.8	(29.6)	B		にぶい燈	20	煤付着
17	常滑	大甕	(30.4)	<8.7>		A	C,F	灰赤	5	

第23図 第1・6号溝跡



### 第6号井戸

第6号井戸はB 4 グリッドに位置する。平面形は掘り込みが円形で、上部に方形の掘り込みが付随する。その上場の長辺で1.62m、短辺で1.84mである。掘り込みの径は、0.92m、直交して0.88mである。下場では、0.32m、同じく0.66mである。深さは1.44mである。

板碑が2点（第44図18、第45図23）と木製品の小片の板材（第44図15、19）が出土している。

### 第7号井戸

第7号井戸はB 3 グリッドに位置する。平面形は円形である。上部に円形の段を持つ。SD 2 と重複関係を持つ。切り合から本遺構のほうが新しい。径は段の上場で1.62m、直行方向で1.77mである。下部では1.24、同じく1.22mである。下場では0.65m、直行方向で0.7mである。深さは0.96mと極めて浅い。出土遺物はない。

### 第8号井戸

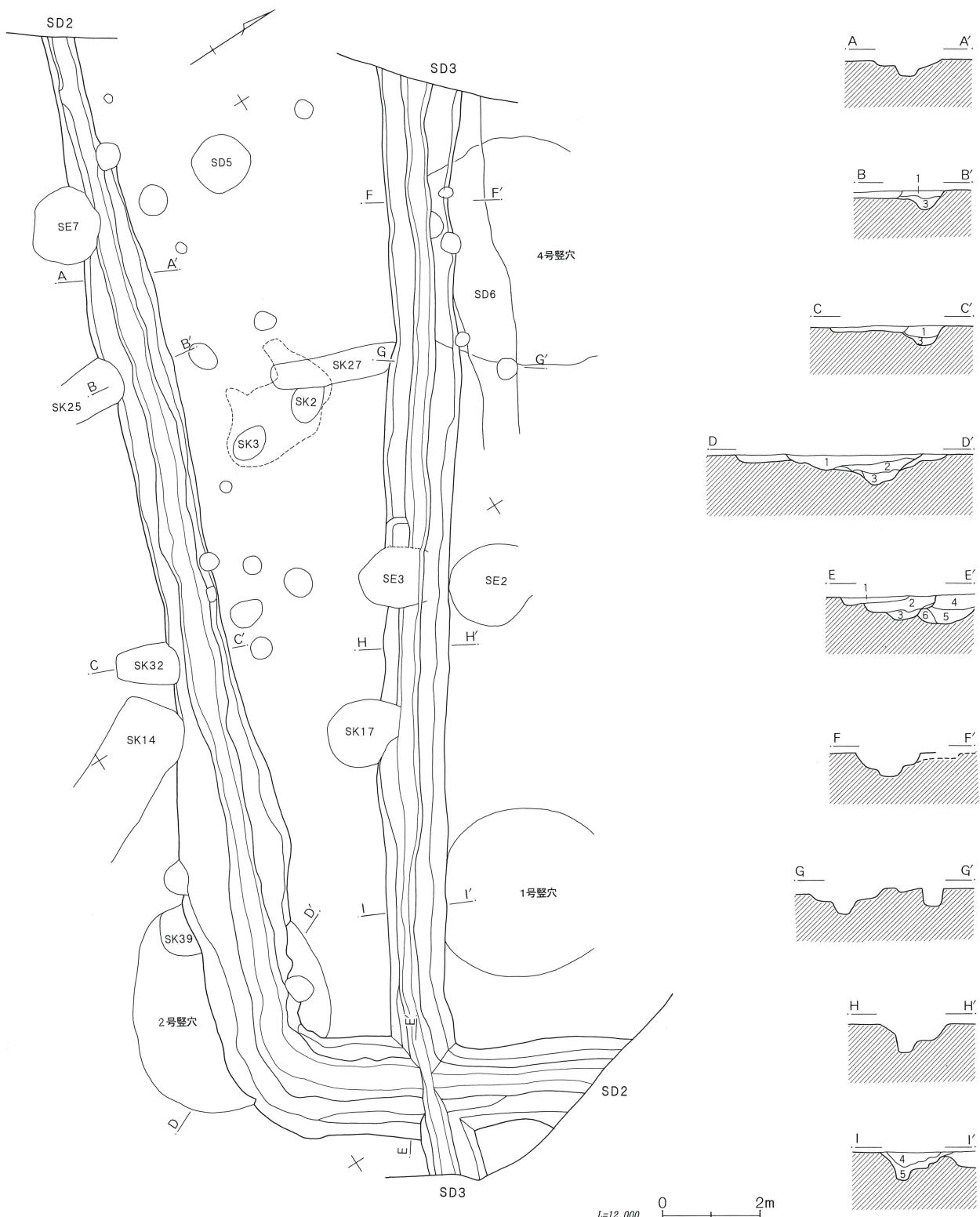
第8号井戸はB 3 グリッドに位置する。平面形は円形である。SK27と重複関係を持つ。切り合から本遺構のほうが古いが、あるいは井戸の排出溝の可能性がある。SK25はSD 2 に当たっている。石組み等は検出されていない。径は上場で0.87m、直行方向で1.03mである。下場では0.46m、直行方向で9.4mである。深さは1.38mである。

出土遺物は、土師器皿が4点（第21図1～4）、板碑が3点（第43図2、5、第44図16）ある。その他在地の擂鉢（第21図5）、鍋（同6）がある。

### 第9号井戸

第9号井戸はA 3 グリッドに位置する。平面形は円形である。石組み等は検出されていない。径は上場で0.72m、直行方向で0.8mと小さい。下場では0.42m、直行方向で0.44mである。深さは1.08mである。出土遺物はない。

第24図 第2・3号溝跡



SD-2

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土細粒～中粒子少量 炭化物中粒子中量 ローム細～中粒子少量
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土粒子少量 炭化物粒子少量 ローム中ブロック多量
- 3 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土粒子少量 炭化物粒子極少量 ローム中ブロック少量

SD-3

- 4 焼土細粒子少量 ローム細粒子極少量 バミス状白色粒子多量 FeO<sub>2</sub>斑文多量
- 5 ローム大、中ブロック多量 中粒子多量

### 第10号井戸

第10号井戸はA 3 グリッドに位置する。平面形は円形である。径は上場では0.66m、直行方向で0.72mである。下場では0.56m、同じく0.6mである。深さは1.4mであった。

遺物は、端反りの灰釉皿（第21図7）が出土している。

### 第11号井戸

第11号井戸はA 3 グリッドに位置する。平面形は円形である。径は上場で0.76m、直行方向で0.81mと小さい。下場では0.46m、直行方向で0.48mである。深さは0.8mとやはり浅かった。出土遺物はない。

## (3) 溝 跡

### 第1号溝

第1号溝は A 4 グリッドに位置する。今回検出した溝跡は、ほぼ東西南北に方向をそろえているが、SD 1だけは、その例外である。また、検出状況が極めて悪い。幅は0.95m、深さは0.15mである。方向はN-12°-Wとなる。出土遺物はない。

### 第2号溝

第2号溝は、Aグリッド2・3・4・5を横断している。SD3、SE7、SK25・32・14・35、第2号竪穴状遺構などと重複関係を持つ。SD 3との関係は不明であるが、状況から本遺構のほうが新しい。その他については、縄文遺構を除いて本遺構のほうが古い。

幅は、北西端で0.6m、深さは0.3m、その東で1.35m、深さは0.4m、1.25m、2.25m、東端で2.1m深さは0.6mである。方位はN-70°-Wである。

遺物は、第22図12の瀬戸美濃産の天目茶碗がある。体部は丸味をおびて立ち上り、口縁がわずかにくびれ、さらに緩やかに外反する。大窯第3段階である。砥石（第42図7）がある他は、近世の浅鉢（第49図14）が出土している。

### 第3号溝

第2号溝は、Aグリッド2・3、Bグリッド3・4・5を横断している。SD 2、SK17・27、第1号竪穴

状遺構などと重複関係を持つ。SD 2との関係は不明であるが、状況から本遺構のほうが古い。その他については、縄文遺構を除いて本遺構のほうが古い。

幅は北西端で幅1.3m、深さは0.5mである。その東で幅1.45m、東端では幅1.15m、深さは0.5mである。方位はN-58°-Wである。

遺物は、土師器皿が1点出土した（第22図5）。

### 第4号溝

第4号溝は、Bグリッド2・3・4を横断している。幅は北西端で1.6m、深さは0.2m、その東で1.8m、深さ0.13m、東端で2.7m、深さ1.9mである。幅が広く、浅い。断面形が上、下辺の長い逆台形をしている。方位はN-65°-Wである。遺物は、土師器皿（第22図3）と瀬戸・美濃の灰釉皿（同8）がある。

### 第5号溝

第5号溝は、Cグリッド2・3・4を横断している。幅は北西端で2.3m、深さは0.45m、その東で幅2.1m、深さ0.5mである。西側は、溝底にさらに2条の不整形な掘り込みがあった。東側は、一段低くなっている。方位はN-70°-Wである。遺物は、第22図9～11の灰釉皿、13、14の天目茶碗がある。13は大窯第2段階、14は第3段階である。

### 第6号溝

第6号溝はA 3 グリッドから検出された。極めて不明確である。幅は0.85m、深さは0.1mである。方位はN-68°-Wである。出土遺物はない。

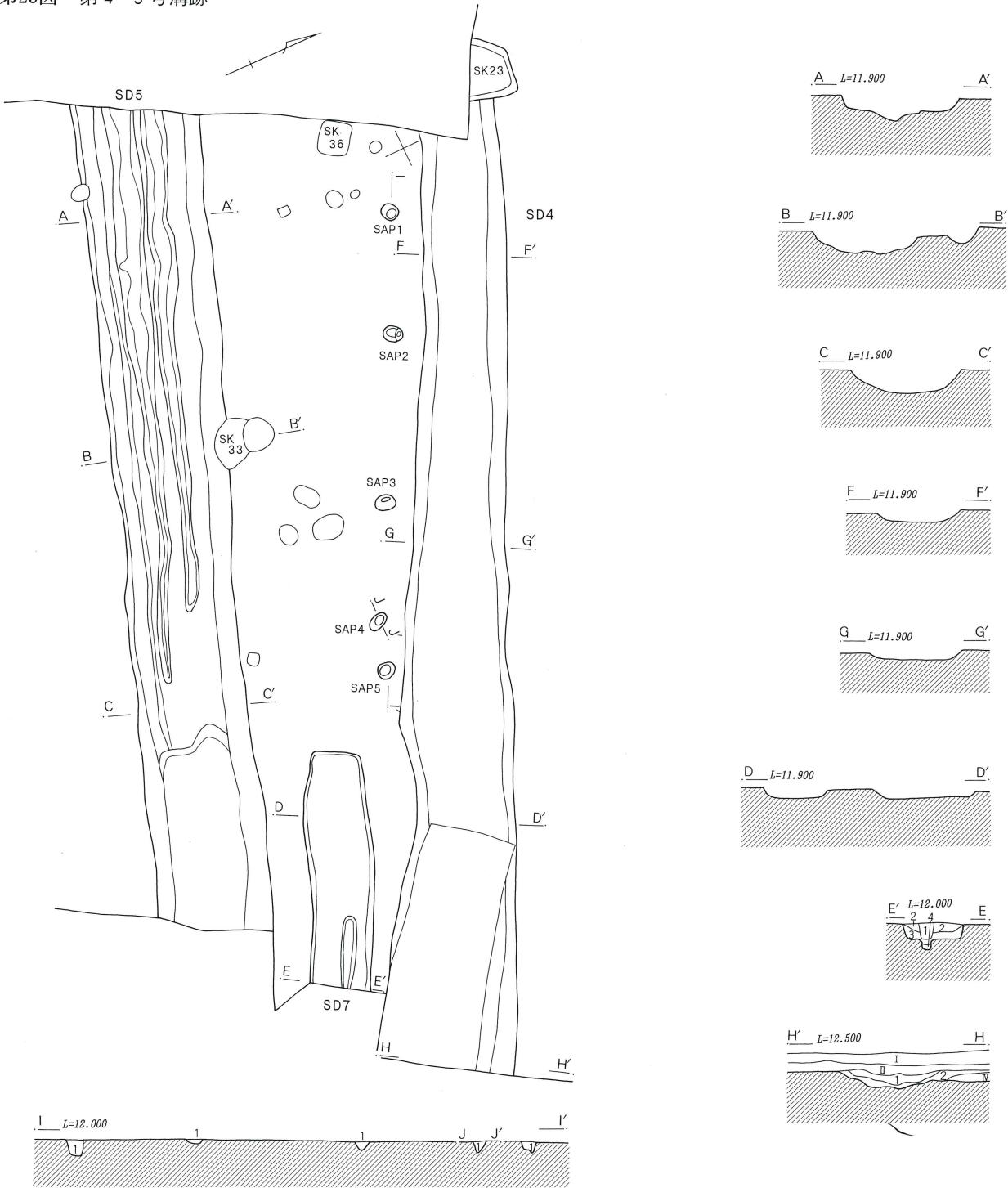
### 第7号溝

第7号溝はC 4 グリッドから検出された。途中で止まっている。幅は1.2mである。深さは0.15mである。方位はN-67°-Wである。

### 第8号溝

第8号溝は、Dグリッド1から、Eグリッド1・2・3を横断している。堀跡と重複関係を持つ。堀跡断面図を参考にされたいが、障子堀ではなく、その後の段階の埋め戻した堀跡（第11層の上面）よりは古いが、障子堀との関係は不明。幅1.25m、深さ0.6mである。断面形は箱型である。方位はN-71°-Wで

第25図 第4・5号溝跡



SD-4

- |                  |                                      |
|------------------|--------------------------------------|
| 1 暗褐色土 (10YR3/3) | しまり良く砂質。ローム粒子、炭化物を少量む。               |
| 2 黒褐色土 (10YR3/2) | しまり良く砂質。1層よりもやや黒味が強い。<br>炭化物粒子を少量含む。 |

SD-7

- |                  |                                                 |
|------------------|-------------------------------------------------|
| 1 暗褐色土 (10YR3/4) | 少量のロームブロック (1cm 前後) を含む。焼土粒子も含み、炭化物は少ない。粘土質シルト。 |
| 2 暗褐色土 (10YR3/4) | ロームは粒子状で、まばらに入り、粒の径は小さい。粘土質シルト。                 |
| 3 暗褐色土 (10YR3/3) | ロームブロック (2cm 前後) を多く含む。焼土及び炭化物は少ない。粘土質シルト。      |
| 4 暗褐色土 (10YR3/3) | ローム、焼土、炭化物などの混じりはない。粘土質                         |

- |        |                |                                  |
|--------|----------------|----------------------------------|
| SAP1 1 | 暗褐色土 (10YR3/4) | ロームブロック・ローム粒子多量                  |
| SAP2 1 | 暗褐色土 (10YR3/4) | ロームブロック・ソフトローム多 FeO <sub>2</sub> |
| SAP3 1 | 暗褐色土 (10YR3/4) | ローム中ブロック・ローム粒子中量                 |
| SAP4 1 | 暗褐色土 (10YR3/4) | 焼土少量ローム粒子・ソフトローム含<br>硬質シルト中粒少量   |
| SAP5 1 | 暗褐色土 (10YR3/4) | ローム粒子少量 硬質シルト中粒少量                |

ある。

遺物は、在地産の内耳鍋（第22図16）、常滑の大甕（同17）、板碑（第43図3、第44図15）がある。

#### 第9号溝

第9号溝は、Eグリッド2・3を横断している。堀跡区画mにぶつかっている。切り合いは不明である。幅は西端で2.1m、その東で1.05mである。深さは0.1mである。方位はN-71°-Wである。

遺物には、煙管の吸い口（第49図21）、縁釉皿（第22図1）、木製品では漆碗（第46図3）が出土している。

### (4) 土 壤

#### 第1号土壙

第1号土壙はB3グリッドに位置する。平面形は円形である。短径0.5m、長径は0.5mである。長径方向の下場は0.28mである。深さは0.28mである。

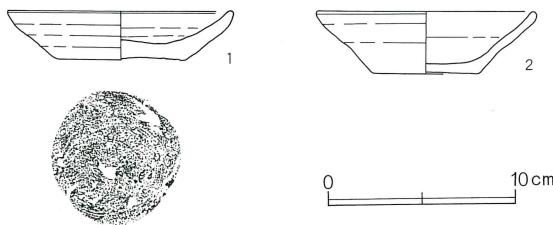
#### 第2号土壙

第2号土壙はB3グリッドに位置する。平面形は円形である。短径は0.65m、長径は1.01mである。長径方向の下場は0.4mである。深さは0.22mである。方位はN-27°-Wである。

#### 第3号土壙

第3号土壙はB3グリッドに位置する。平面形は円形である。短径は0.5m、長径は0.81mである。長径方向の下場は0.12mである。深さは0.58mである。

第26図 土壙出土遺物



第26図 土壙出土遺物観察表

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	備考
1	土師器	皿	11.9	2.60	6.80	普通	A,B,C	橙	100	
2	土師器	皿	(11.6)	3.25	(5.6)	普通	A,B,C	橙	30	

方位はN-24°-Wである。

#### 第4号土壙

第4号土壙はB3グリッドに位置する。平面形は円形である。短径0.46m、長径は0.6mである。長径方向の下場は0.3mである。深さは0.18mである。

#### 第5号土壙

第5号土壙はB3グリッドに位置する。平面形は円形である。短径1.18m、長径は1.2mである。長径方向の下場は0.8mである。深さは0.22mである。遺物は、土師器皿（第26図1）が1点ある。

#### 第6号土壙

第6号土壙はA4グリッドに位置する。平面形は円形である。短径1.12m、長径は1.26mである。長径方向の下場は0.16mである。深さは0.53mである。方位はN-3°-Wである。

#### 第7号土壙

第7号土壙はA4グリッドに位置する。平面形は円形である。短径1.3m、長径は推定で1.40mである。長径方向の下場は0.7mである。深さは0.15mである。方位はN-62°-Wである。

#### 第8号土壙

第8号土壙はA4グリッドに位置する。平面形は円形である。短径1.18m、長径は1.19mである。長径方向の下場は0.79mである。深さは0.3mである。方位はN-64°-Wである。

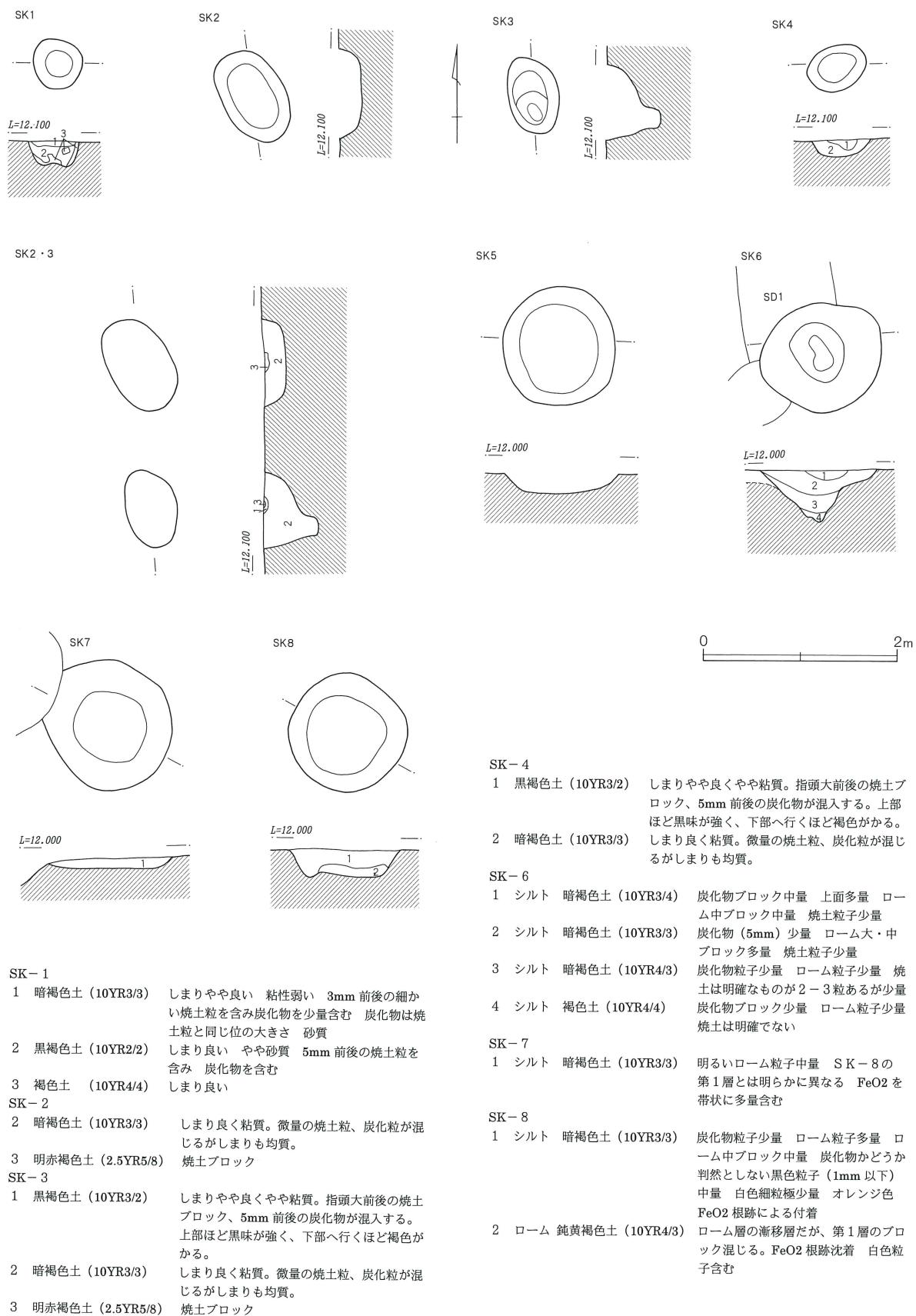
#### 第9号土壙

第9号土壙はA4グリッドに位置する。平面形は円形である。短径0.7m、長径は0.72mである。長径方向の下場は0.54mである。深さは0.3mである。方位はN-58°-Wである。

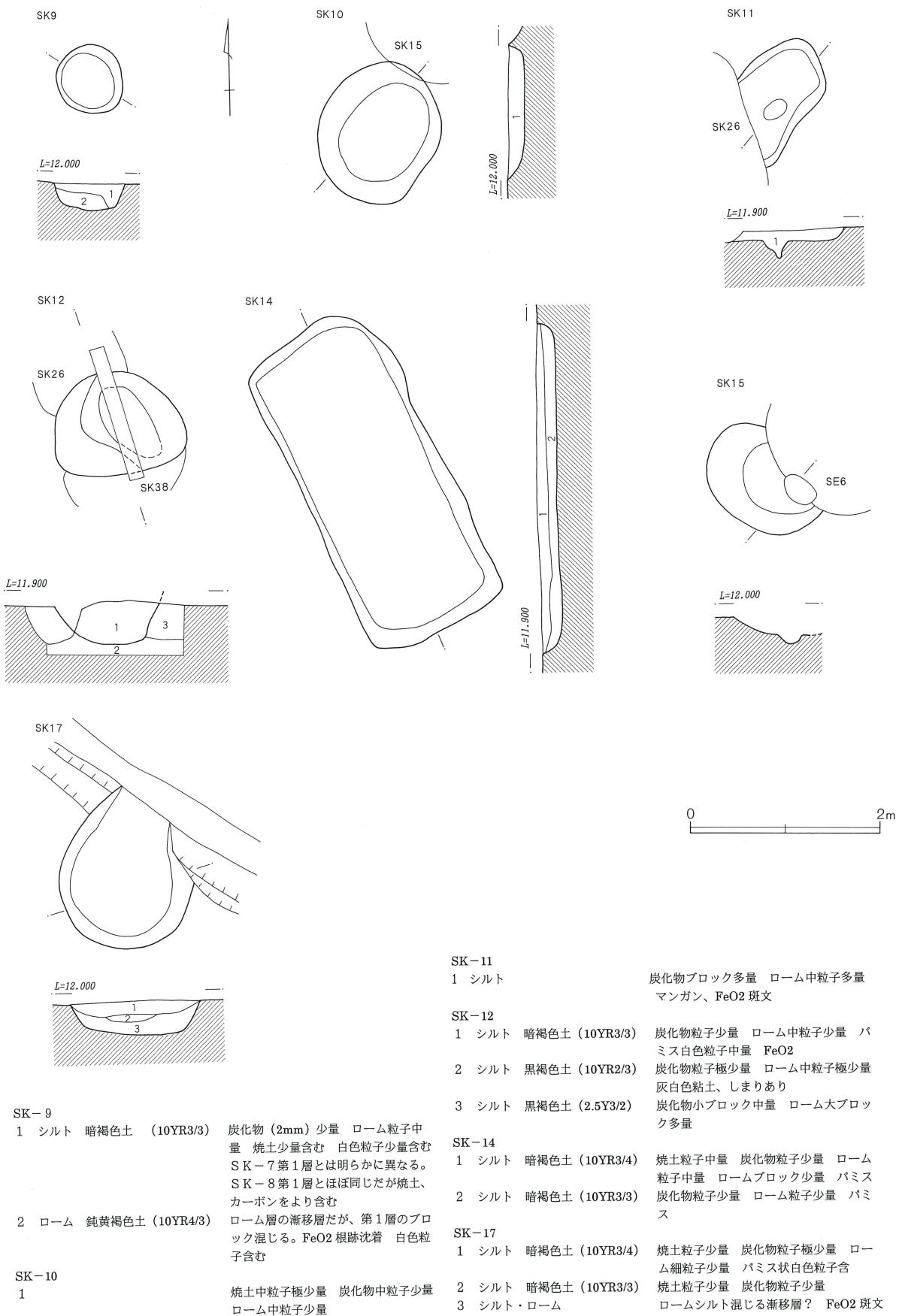
#### 第10号土壙

第10号土壙はB4グリッドに位置する。平面形は円形である。短径1.26m、長径は推定で1.46mである。長径方向の下場は0.82mである。深さは0.16mであ

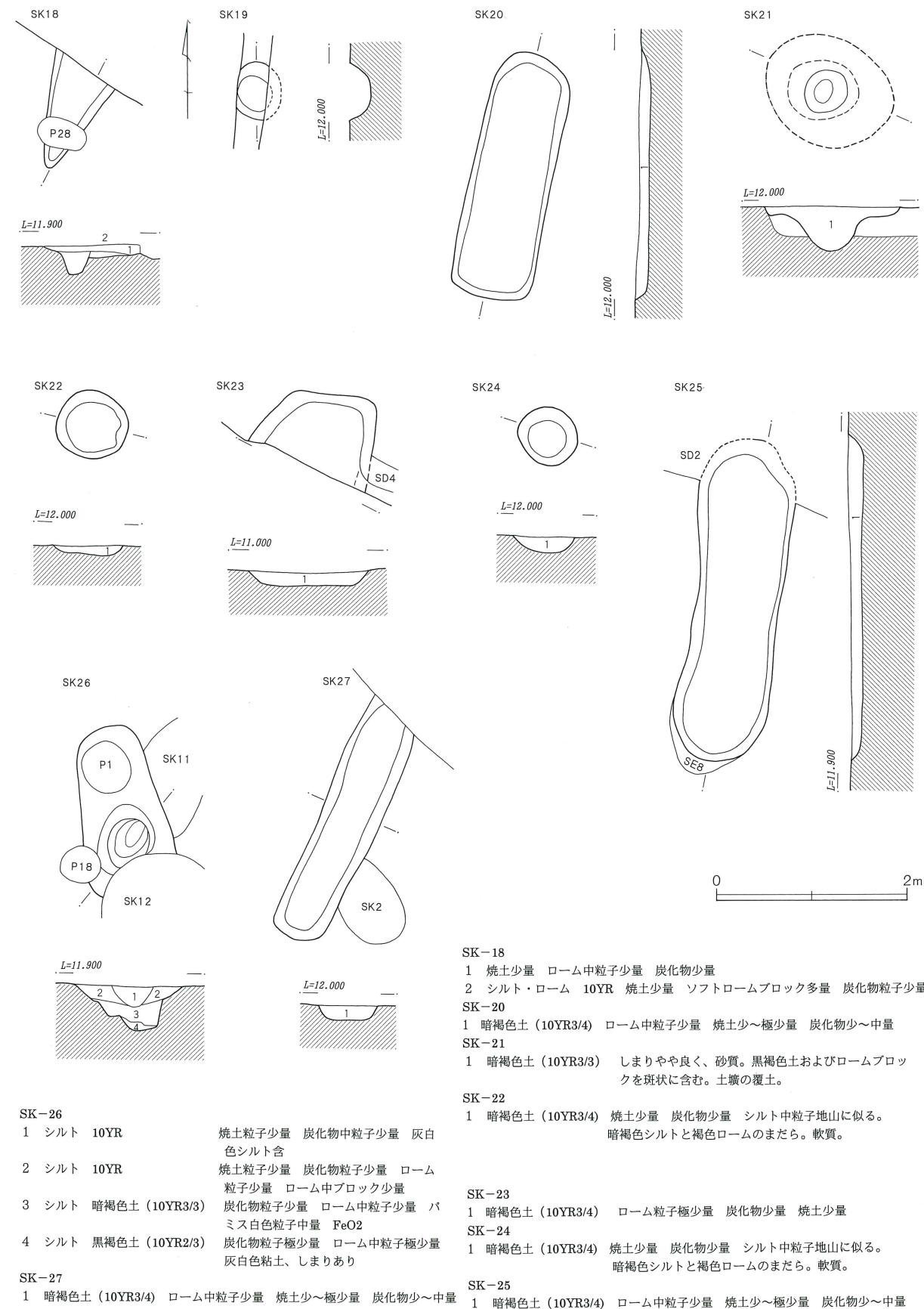
第27図 土壌(1)



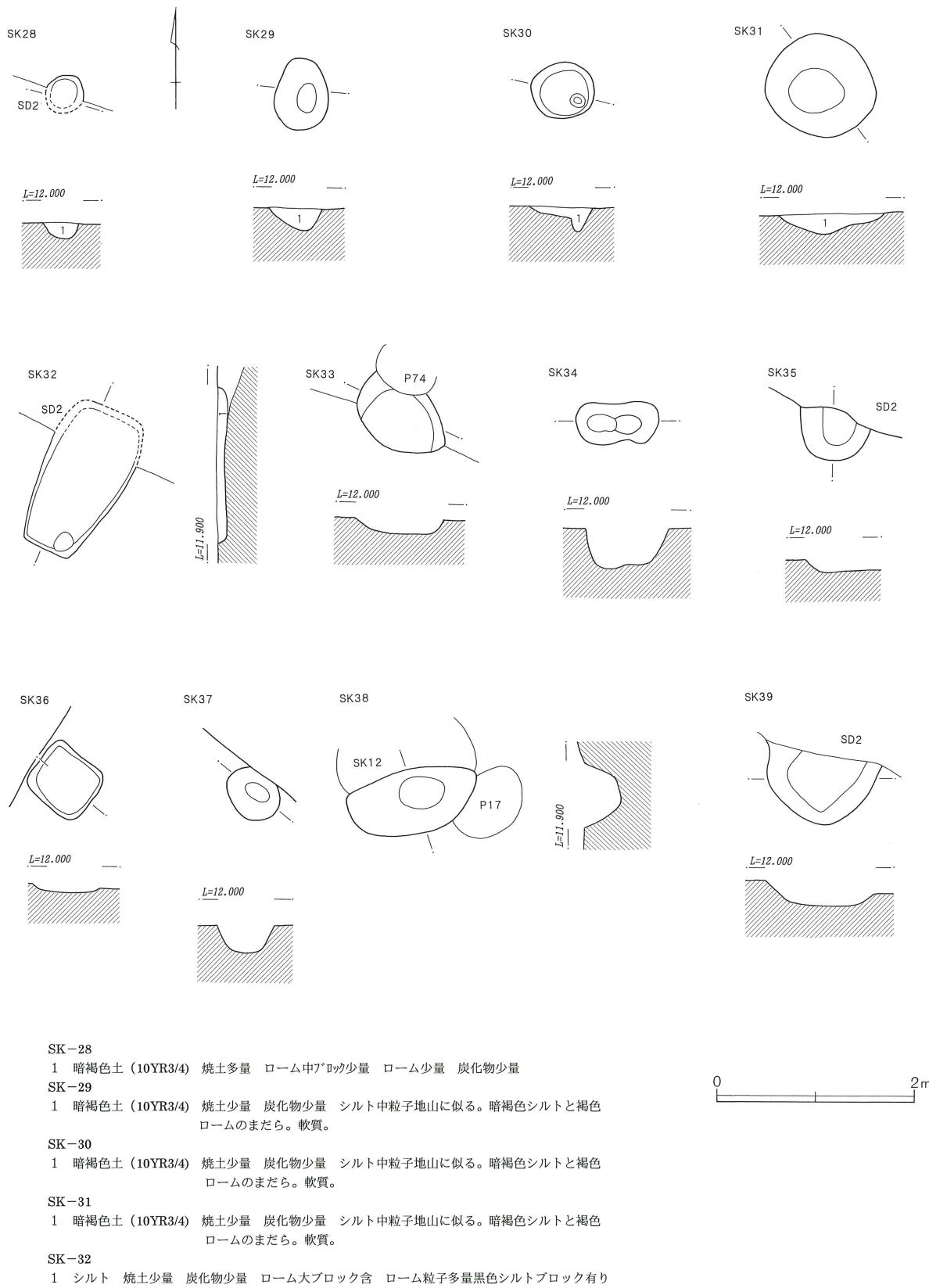
第28図 土壌(2)



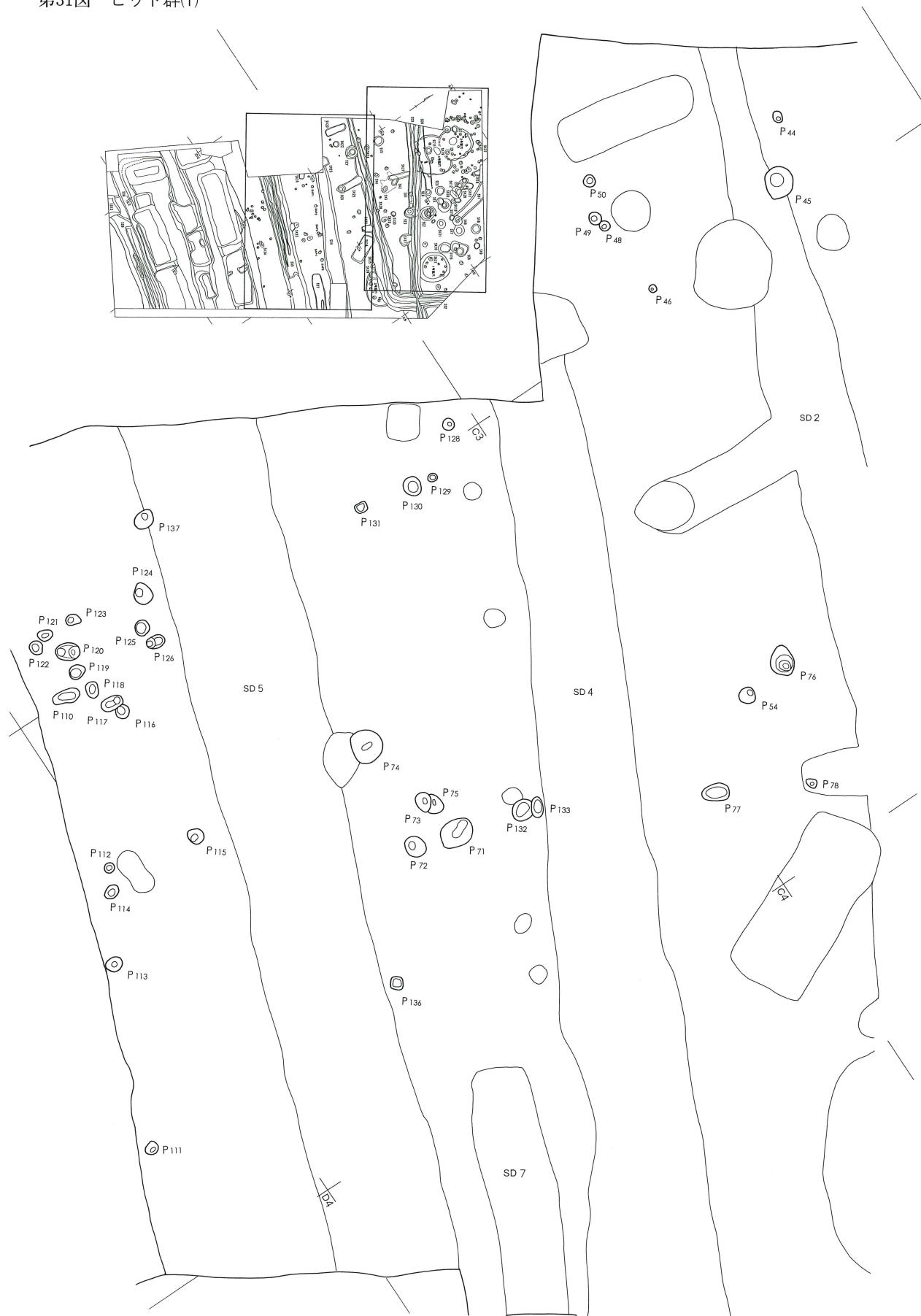
第29図 土壌(3)



第30図 土壌(4)



第31図 ピット群(I)



第32図 ピット群(2)



る。方位は N-48°-W である。

#### 第11号土壌

第11号土壌は A 4 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径 0.78m、長径は検出部分で 1.06m である。長径方向の下場は検出部分で 0.96m である。深さは 0.3m である。方位は N-40°-E である。

#### 第12号土壌

第12号土壌は A 4 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径 0.96m、長径は 1.36m である。長径方向の下場は 0.48m である。深さは 0.56m である。方位は N-74°-E である。

#### 第14号土壌

第14号土壌は C 4 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径 1.5m、長径は 3.5m である。長径方向の下場は 3.24m である。深さは 0.22m である。方位は N-22°-W である。

#### 第15号土壌

第15号土壌は B 4 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径は推定で 1.06m、長径は推定で 1.34m である。長径方向の下場は推定で 0.82m である。深さは 0.19m である。方位は N-81°-W である。

#### 第17号土壌

第17号土壌は B 4 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径 1.4m、長径は検出部分で 1.54m である。長径方向の下場は検出部分で 1.38m である。深さは 0.36m である。方位は N-26°-E である。

#### 第18号土壌

第18号土壌は A 4 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径 0.6m、長径は検出部分で 1.09m である。長径方向の下場は検出部分で 1.00m である。深さは 0.14m である。方位は N-27°-E である。

#### 第19号土壌

第19号土壌は A 3 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径は検出部分で 0.5m、長径は 0.6m である。長径方向の下場は検出部分で 0.36m である。深さは 0.24m である。方位は N-0°-である。

#### 第20号土壌

第20号土壌は B 2 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径 0.85m、長径は 2.6m である。長径方向の下場では 2.42m である。深さは 0.14m である。方位は N-12°-E である。

#### 第21号土壌

第21号土壌は B 4 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径 1.16m、長径は 1.45m である。長径方向の下場では 0.23m である。深さは 0.46m である。方位は N-66°-W である。

#### 第22号土壌

第22号土壌は B 2 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径 0.7m、長径は 0.76m である。長径方向の下場では 0.55m である。深さは 0.1m である。方位は N-75°-E である。

#### 第23号土壌

第23号土壌は B 2 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径は検出部分で 0.8m、長径は 1.12m である。長径方向の下場では 0.83m である。深さは 0.17m である。方位は N-20°-E である。

#### 第24号土壌

第24号土壌は B 3 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径 0.62m、長径は 0.64m である。長径方向の下場では 0.38m である。深さは 0.18m である。方位は N-73°-W である。

#### 第25号土壌

第25号土壌は B 3 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径 0.88m、長径は 3.4m である。長径方向の下場では 3.12m である。深さは 0.16m である。方位は N-8°-E である。

#### 第26号土壌

第26号土壌は A 4 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径 0.93m、長径は推定で 1.81m である。長径方向の下場は 0.3m である。深さは 0.48m である。方位は N-12°-W である。

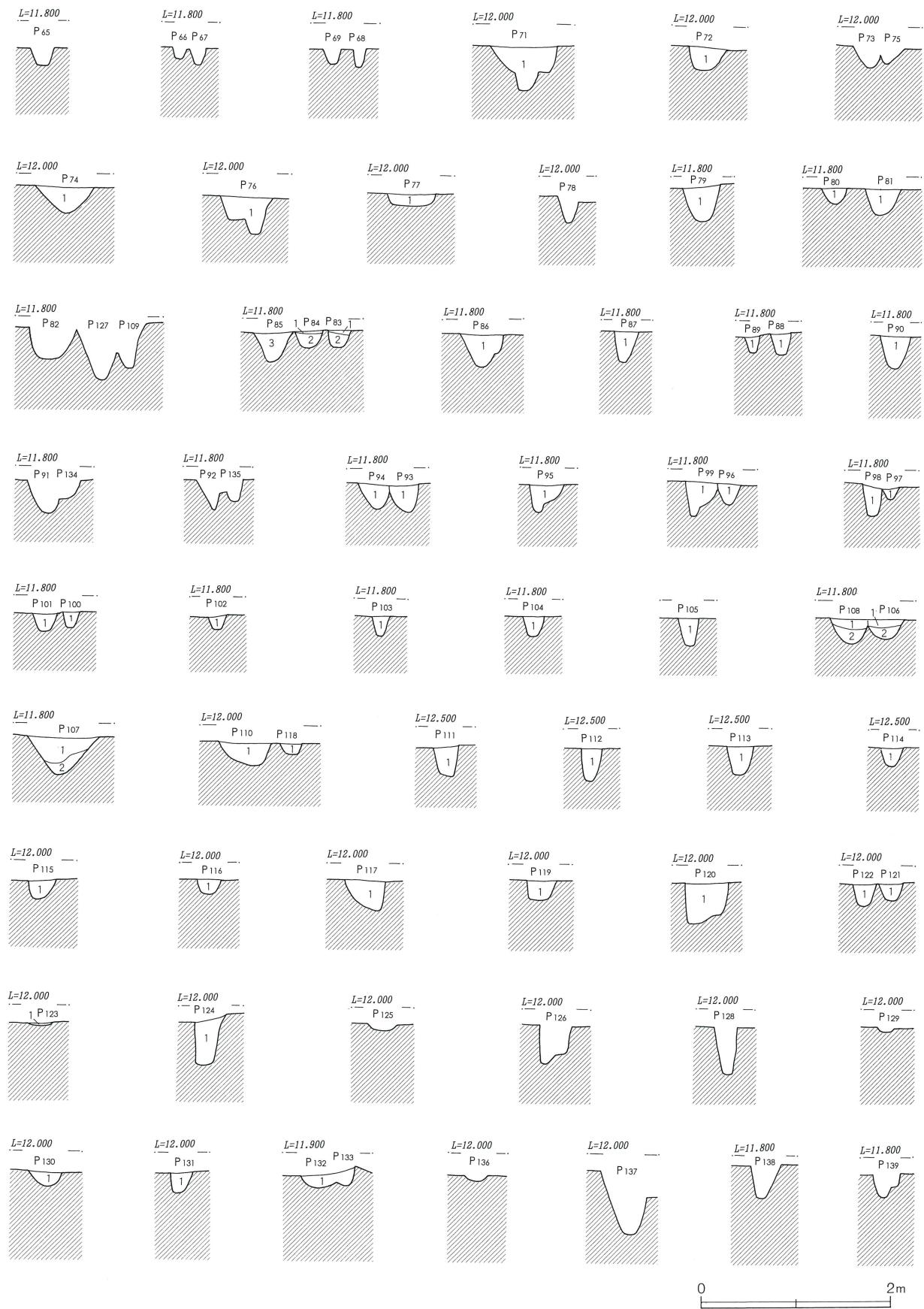
#### 第27号土壌

第27号土壌は B 3 グリッドに位置する。平面形は

第33図 ピット(1)



第34図 ピット(2)



P1	1 シルト 鈍黃褐色土(10YR4/3) 炭化物(少) ローム粗粒(少)、灰色粘土 2 シルト 暗褐色土 (10YR3/3) 炭化物(少) 3 シルト 暗褐色土 (10YR3/4) FeO2(少)、シルト純層	P38	1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、ローム(中)、炭化物(少)
P3	1 シルト 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物粒子(少)、ローム粒子(少)、マンガン、FeO2(中) 2 シルト 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物粒子(少)、焼土粒子(少)、ローム粒子(少)、FeO2 粒子(少) 3 ローム 褐色土 (10YR4/4) ソフトローム 4 シルト 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物粒子(少)、焼土粒子(極少)、ローム粒子(極少)、シルト	P39	1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、ローム(多)、炭化物(少)
P4	1 シルト 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物粒子(中)、FeO2(中)、焼土(極少)	P42	1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(中)、ローム(中)、炭化物(多)
P7	1 シルト 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物粒子(中)、FeO2(中)、焼土極(少) 2 ローム 漸移層 3 ローム	P53	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム(中)、炭化物(中)、ソフトロームブロック入る
P8	1 シルト 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物粒子(中)、FeO2(中)、焼土(極少) 2 ローム	P54	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム(中)
P9	1 シルト 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物粒子(少)、ロームブロック(少) 2 シルト 暗褐色土 (10YR3/4) ローム小ブロック(極少)、FeO2(少) 3 シルト 褐色土 (10YR4/4) ソフトローム	P71	1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、ローム(中)、炭化物(少)
P10	1 シルト 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中ブロック(極多)、焼土(少)、炭化物細粒(少)、FeO2(少) 2 シルト 暗褐色土 (10YR3/3) ローム中ブロック(中)、焼土(極少)、炭化物(極少)、シルト主体、粘質あり	P72	1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土含、ローム(中)、炭化物含
P11	1 シルト 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物粒子(中)、FeO2(中)、焼土(極少) 2 シルト 第1層に類似、ローム大ブロック含む 3 ローム	P73	1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土含、ローム(中)、炭化物含
P12	1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、炭化物(少)、暗褐色シルトと褐色ローム、やや固めのシルト中粒子、FeO2 粒含	P74	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
P13	1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、炭化物(少)、暗褐色シルトと褐色ローム、やや固めのシルト中粒子	P76	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒子(中)、炭化物(中)
P15-P20+P21-P22	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少)、炭化物(少) 2 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)、バニス状白色粒子あり 3 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、炭化物・焼土(極多) 4 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中) 5 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中) 6 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、ロームブロック含、焼土(少～極少)、炭化物(少～中) 7 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、ローム中ブロック含、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)	P77	1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、ローム中粒(少)
P17	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、ロームブロック(多)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)	P79	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
P18	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)	P80-P81	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
P23	1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、ローム(少)、炭化物(少)	P82	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
P24	1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、ローム(少)、炭化物(少)	P109	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
P25	1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、ローム(少)、炭化物(少)	P83-P84+P85	1 暗褐色土 (10YR3/3) 炭化物(多)、焼土(少) 2 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物(少)、焼土(少) 3 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
P26	1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、ローム(少)、炭化物(少)	P86	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
P27	1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、ローム中量、炭化物(少) 2 暗褐色土 (10YR3/3) 黒色のシルト粒中量、ローム中粒(少)、底部ブロックあり、焼土、炭化物なし	P87	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
P28	1 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物粒子(少)、シルト純層	P88-P89	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
P34	1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、ローム(少)、炭化物(少)	P90	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
P35-36	1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、ローム(中)、炭化物(中)	P91	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
P37	1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、ローム(中)、炭化物(中)	P92	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
		P93-P94	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
		P95	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
		P96-P99	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
		P97-P98	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
		P100-P101	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
		P102	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
		P103	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
		P104	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
		P105	1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)
		P106+P108	1 黒褐色土 (10YR2/3) ローム細粒子(少)、FeO2 斑文 2 黒褐色土 (10YR2/3) ロームブロック(多)、FeO2 斑文
		P107	1 黒褐色土 (10YR2/3) ローム中ブロック(中)、FeO2(少) 2 鈍黃褐色 (10YR4/3) ソフトローム(多)

円形である。短径0.63m、長径は推定で2.6mである。長径方向の下場は推定で2.5mである。深さは0.14mである。方位はN-20°-Eである。

#### 第28号土壌

第28号土壌はB 3 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径は推定で0.4m、長径は推定で0.4mである。長径方向の下場では推定で0.3mである。深さは0.18mである。方位はN-16°-Eである。

#### 第29号土壌

第29号土壌はB 3 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径0.54m、長径は0.82mである。長径方向の下場は0.29mである。深さは0.22mである。方位はN-4°-Eである。

#### 第30号土壌

第30号土壌はB 3 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径0.57m、長径は0.67mである。長径方向の下場は0.6mである。深さは0.26mである。方位はN-78°-Wである。

#### 第31号土壌

第31号土壌はB 4 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径1.04m、長径は1.09mである。長径方向の下場は0.5mである。深さは0.2mである。方位はN-36°-Wである。

#### 第32号土壌

第32号土壌はB 3 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径0.87m、長径は1.58mである。長径方向の下場は1.47mである。深さは0.12mである。

方位はN-23°-Eである。

#### 第33号土壌

第33号土壌はC 3 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径0.93m、長径は推定で7.4mである。長径方向の下場は推定で0.58mである。深さは0.14mである。方位はN-65°-Wである。

#### 第34号土壌

第34号土壌はC 3 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径0.4m、長径は0.85mである。長径方向の下場は0.56mである。深さは0.4mである。方位はN-90°-Wである。

#### 第35号土壌

第35号土壌はB 4 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径は検出部分で0.58m、長径は推定で0.72mである。長径方向の下場は0.32mである。深さは0.1mである。方位はN-0°-である。

#### 第36号土壌

第36号土壌はC 2 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径0.6m、長径0.68mである。長径方向の下場は0.6mである。深さは0.08mである。方位はN-50°-Wである。

#### 第37号土壌

第37号土壌はA3グリッドに位置する。平面形は円形である。短径は推定で0.46m、長径は5.8mである。長径方向の下場は2.6mである。深さは0.29mである。方位はN-51°-Wである。

#### P110-P118

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム(少)、炭化物(少)、シルト粘土、灰白色、FeO2 根跡斑文
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) ロームブロック(多)、シルト中粒子含

#### P111

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム(少)

#### P112

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム(多)、硬質シルト中粒多

#### P113

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、炭化物(少)、シルト中粒子、暗褐色シルトと褐色ローム、軟質

#### P114

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム(多)

#### P115

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) ロームブロック(多)

#### P116

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) ロームブロック(多)、シルト中粒子含

#### P117

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、炭化物(少)、シルト中粒子、暗褐色シルトと褐色ローム、軟質

#### P119

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、炭化物(少)、シルト中粒子、暗褐色シルトと褐色ローム、軟質

#### P120

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) ロームブロック(多)、シルト中粒子含

#### P121-P122

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、炭化物(少)、シルト中粒子、暗褐色シルトと褐色ローム、軟質

#### P123

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、炭化物(少)、シルト中粒子、暗褐色シルトと褐色ローム、軟質

#### P124

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) ロームブロック(多)、シルト中粒子含

#### P126

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) ロームブロック(多)、シルト中粒子含

#### P128

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)

#### P129

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)

#### P130

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土(少)、炭化物(少)、シルト中粒子、暗褐色シルトと褐色ローム、軟質

#### P131

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) ローム中粒子(少)、焼土(少～極少)、炭化物(少～中)

#### P132-P133

- 1 炭化物含

### 第38号土壌

第38号土壌はA 4 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径0.64m、長径は1.36mである。長径方向の下場は0.47mである。深さは0.39mである。方位はN-73°-Eである。

遺構	径(m)	深さ(m)	備考
P 1	0.54	0.4	
P 2	0.37	0.55	
P 3	0.33	0.34	
P 4	0.48	0.16	
P 5	0.38	0.32	
P 6	0.34	0.3	
P 7	0.72	0.3	
P 8	0.56	0.2	
P 9	0.44	0.34	
P 10	0.44	0.34	
P 11	0.66	0.34	
P 12	0.2	0.2	
P 13	0.48	0.3	
P 14	0.26	0.22	
P 15	0.26	0.2	
P 16	0.26	0.1	
P 17	0.85	0.22	
P 18	0.3	0.78	
P 19			欠番
P 20	0.32	0.23	
P 21	0.56	0.38	
P 22	0.44	0.32	
P 23	0.36	0.24	
P 24	0.26	0.18	
P 25	0.26	0.24	
P 26	0.48	0.32	
P 27	0.36	0.32	
P 28	0.34	0.24	
P 29	0.3	0.2	
P 30	0.38	0.22	
P 31	0.25	0.24	
P 32	0.24	0.3	
P 33	0.35	0.3	
P 34	0.26	0.5	
P 35	0.36	0.34	
P 36	0.4	0.38	
P 37	0.28	0.24	
P 38	0.28	0.44	
P 39	0.36	0.46	
P 40	0.28	0.22	
P 41	0.43	0.24	
P 42	0.4	0.48	
P 43	0.25	0.28	
P 44	0.21	0.3	
P 45	0.56	0.26	

### 第39号土壌

第39号土壌はC 4 グリッドに位置する。平面形は円形である。短径は検出部分で0.67m、長径は1.09mである。長径方向の下場は0.64mである。深さは0.19mである。方位はN-24°-Eである。

遺構	径(m)	深さ(m)	備考
P 46	0.16	0.16	
P 47			欠番
P 48	0.22	0.34	
P 49	0.26	0.34	
P 50	0.23	0.35	
P 51	0.27	0.3	
P 52			欠番
P 53	0.4	0.3	
P 54	0.32	0.36	
P 55	0.29	0.32	
P 56	0.34	0.44	
P 57	0.31	0.33	
P 58	0.18	0.14	
P 59	0.4	0.24	
P 60	0.3	0.26	
P 61	0.4	0.26	
P 62	0.16	0.2	
P 63	0.32	0.3	
P 64	0.14	0.12	
P 65	0.24	0.19	
P 66	0.13	0.13	
P 67	0.17	0.18	
P 68	0.13	0.2	
P 69	0.29	0.15	
P 70			欠番
P 71	0.7	0.48	
P 72	0.41	0.27	
P 73	0.29	0.25	
P 74	0.63	0.29	
P 75	0.23	0.16	
P 76	0.56	0.4	
P 77	0.53	1.4	
P 78	0.22	0.29	
P 79	0.4	0.4	
P 80	0.28	0.17	
P 81	0.39	0.27	
P 82	0.49	0.35	
P 83	0.25	0.19	
P 84	0.29	0.2	
P 85	0.44	0.35	
P 86	0.48	0.35	
P 87	0.25	0.34	
P 88	0.21	0.25	
P 89	0.17	0.19	
P 90	0.31	0.36	

## (5) ピット群

ピットの総数は135基であった。建物を想定できるような配列はなかったが、特に集中する部分があり、その周辺には建物跡の存在が予想される。

検出位置をグリッド別に集計すると、A 3 グリッドが最も多く、63基を数え、他グリッドのピット数から突出している。さらに隣接の北側グリッドで10基、東に接するA 4 グリッドの8基を合わせると総数で82基となり、全体の60.7%を占める。

大きさは、0.13m～0.85mとややばらつきがあるが、0.25m～0.45mのものが最も多い。ただし、この中においても規格の揃ったものではなく、ほぼ万遍なくある。深さは、0.06m～1.40mまであり、やはりばらつきがある。深さ1.40mはひとつだけ突出しており、それを除いて最も大きいものは、0.78mである。0.20m～0.35mのものが最も多いが、やはり突出した規格を持たない。大きさと深さはほぼ相関する。

一部に径の小さい割には深さ0.20m～0.25mとやや深いもの、径の大きい割には深さ0.22m～0.30mとやや浅いものがある。

大きさや深さによる位置的な傾向は、顕著には窺われない。A 3 グリッドにおいては、径0.13m～0.77mと小さいものから大きいものまである。ただし、径0.17m以下のピットはA 3 グリッドにしかない。

これらの位置的な特徴は、北側に向うに従いピット数を増すということである。これは先にも触れたが、御蔵屋敷の中心部が発掘区の北側にあるためと考えられる。ピット群の検出傾向は、他の遺構の検出傾向と一致する。すなわち、北側には建物・柵列などの施設を想定し得るピット群があり、南に向うに従い、井戸となり、その間に土壙と区画溝が走る。そして最後に堀跡となる。ピットは南に全くないわけではないが、その疎密には大きな差がある。

遺構	径 (m)	深さ (m)	備考
P 91	0.34	0.36	
P 92	0.34	0.33	
P 93	0.31	0.33	
P 94	0.33	0.3	
P 95	0.37	0.3	
P 96	0.23	0.22	
P 97	0.19	0.12	
P 98	0.21	0.35	
P 99	0.35	0.38	
P100	0.18	0.17	
P101	0.26	0.22	
P102	0.2	0.16	
P103	0.18	0.2	
P104	0.23	0.21	
P105	0.22	0.29	
P106	0.39	0.23	
P107	0.77	0.42	
P108	0.4	0.29	
P109	0.29	0.48	
P110	0.54	0.27	
P111	0.27	0.36	
P112	0.21	0.37	
P113	0.28	0.32	
P114	0.24	0.2	

遺構	径 (m)	深さ (m)	備考
P115	0.29	0.23	
P116	0.25	0.17	
P117	0.42	0.34	
P118	0.22	0.22	
P119	0.31	0.22	
P120	0.47	0.43	
P121	0.25	0.3	
P122	0.26	0.24	
P123	0.28	0.5	
P124	0.31	0.53	
P125	0.31	0.08	
P126	0.34	0.42	
P127	0.43	0.55	
P128	0.24	0.5	
P129	0.18	0.06	
P130	0.36	0.18	
P131	0.24	0.21	
P132	0.37	0.13	
P133	0.22	0.21	
P134	0.23	0.22	
P135	0.15	0.25	
P136	0.26	0.08	
P137	0.49	0.67	
P138	0.32	0.36	
P139	0.29	0.26	

## (6) グリッド・表採遺物

1～6は、土師器皿である。1・2は、口径が12cmを超え、器高が2.70cm前後と低い。また、ロクロの引上げ痕を明瞭に残す。6はロクロによる引上げの後、内底面を押し込むような、指による3～4本の成形痕がある。この技法は菖蒲城跡に多く見られたが、私市城武家屋敷跡の本調査では、2～3点ほどしかない。胎土分析を行っているので、附編を参照されたい。5は口縁が内湾し、丸皿風である。器厚で、口径・器高とも大きい。

擂鉢は、在地産の瓦質のものと鋳釉のかかった瀬戸・美濃産のものがある。掲載遺物の総数10点のうち、瀬戸・美濃産5点、在地産5点である。堀跡から6点（第18図）、井戸跡から1点（第21図）、グリッドから3点（第35図）である。

第35図7～9は、瀬戸・美濃産である。7は、口縁部縁帯がほぼ垂直に垂下する。下方部があまり引き出されていない。縁帯幅は1.5cmである。縁帯の下部が水平方向に引き出されていないので、大窯第2段階に相当する。8は、口縁の断面形が三角形を呈する。さらに口縁縁帯部に溝状の沈線を入れる。縁帯の幅は、1.5cmである。小破片であるが、口縁部の形状から第1段階の可能性が高い。

10～14は在地産の内耳鍋である。内耳鍋は、概して残存率が悪いが、私市城跡でも5～10%程度がほとんどである。特に底部を欠損する場合が多い。私市城に限らず普遍的な現象である。11だけが耳付である。10～12は口径が小さくやや深いタイプである。13・14は口縁が大きく、やや浅いタイプである。底部に熱を受けたことによる皺が残り、また、口辺部に煤が付着する。11は耳を作る際のユビ跡が明確に観察された。一方向からだけではなく、両方向（左右方向）から交互に成形している。この手法は菖蒲城跡の内耳鍋と共通している。耳の位置も口縁部に付くほどの上位に位置している。

第35図15は、常滑の大甕である。16は瀬戸・美濃の茶壺である。17は瀬戸・美濃産の徳利である。底部

のみの出土であるが、瀬戸市月山窯跡出土徳利I類に類似する。平底で底部および胴部にかけて、回転ヘラ削りによって成形している。釉薬は底部から胴部にかけて鋳釉を掛け、底部周辺を除いて内外面とも鉄釉をかける。釉薬の色調は内面が、にぶい赤褐色（2.5YR 4/3）、外側が極暗褐色、底部の鋳釉部分がにぶい赤褐色（7.5R 4/3）である。おそらく、上方は撫で肩で、頸部は短く口縁はラッパ状に開く形態と考えられる。月山窯は、大窯の第3段階に比定されている。

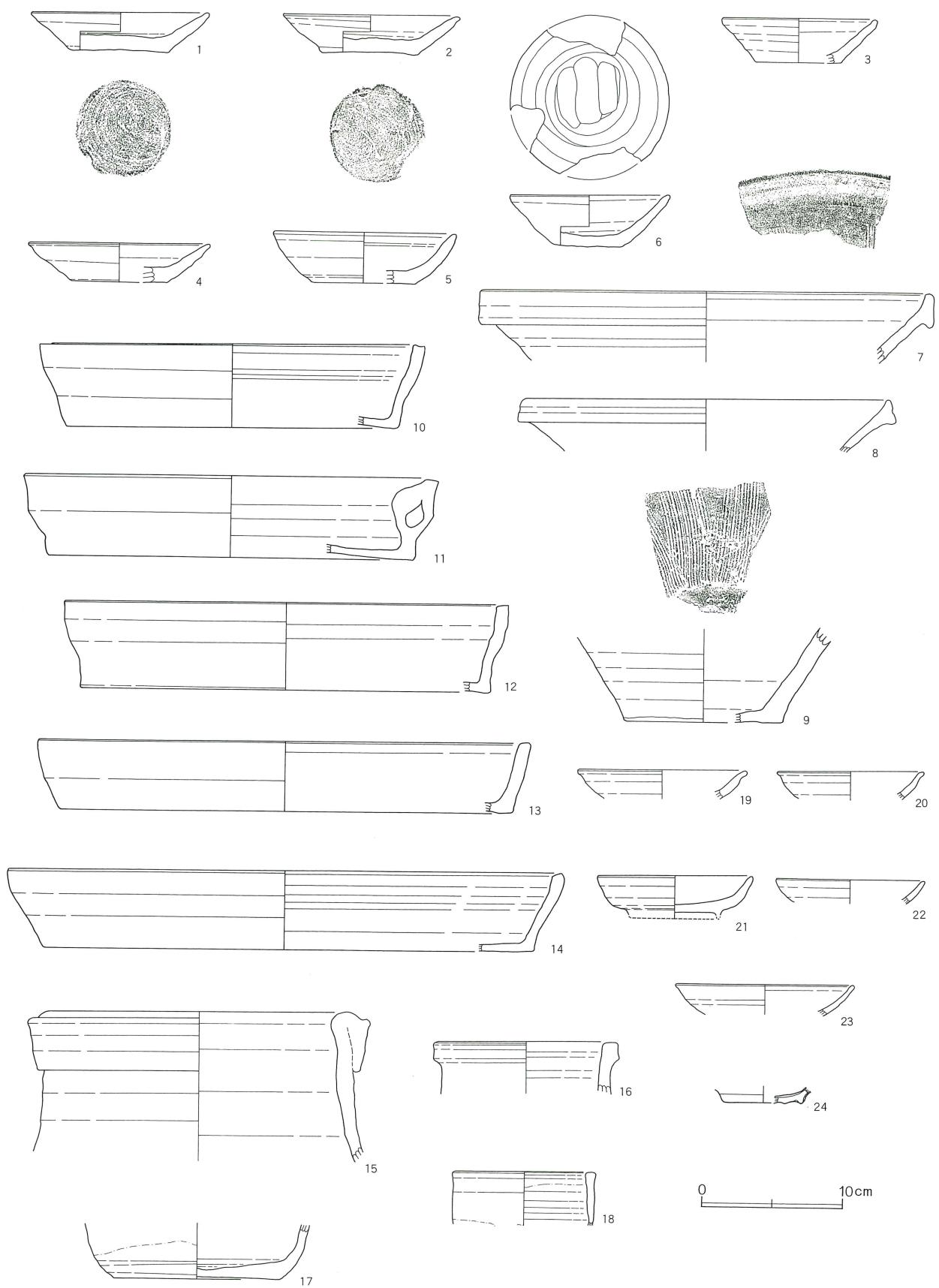
18は筒形香炉で、口縁から胴部の下半部にかけて灰釉が施されている。19～24は瀬戸・美濃産の灰釉皿である。19は、口辺の立ち上がり緩く開いた感じがする。器壁が厚く口辺上部に稜が入り、下半にかけて直線的になる。口唇部は軽く外反して玉縁状になる。20・21は、端反の丸皿である。21は口辺部の下半で膨らみ、その後口縁部までは直線的に開く。高台は、削り出し高台で、残りが悪いが、断面三角である。ハの字状には開かない。ヘラ削りで成形しているが、口辺上半はその後ナデ整形している。22は、口縁部の小破片である。やや丸みの強い丸皿と考えられる。口辺の中位でわずかに稜を作る。

23は19～22までの灰釉皿とはやや趣が異なる。器厚が薄く、釉がそれほど厚くない。器形も平碗形を呈する。24は、底部だけの破片である。底部に輪ドチ痕を残す。削り出し高台で、断面三角である。ハの字状に開いているが、隙間に灰釉が入っている。菖蒲城跡に例はない。従って、高台の外周辺だけが分厚く釉薬が溜まりとなって、断面形は通常の逆三角形を呈する。全面施釉である。

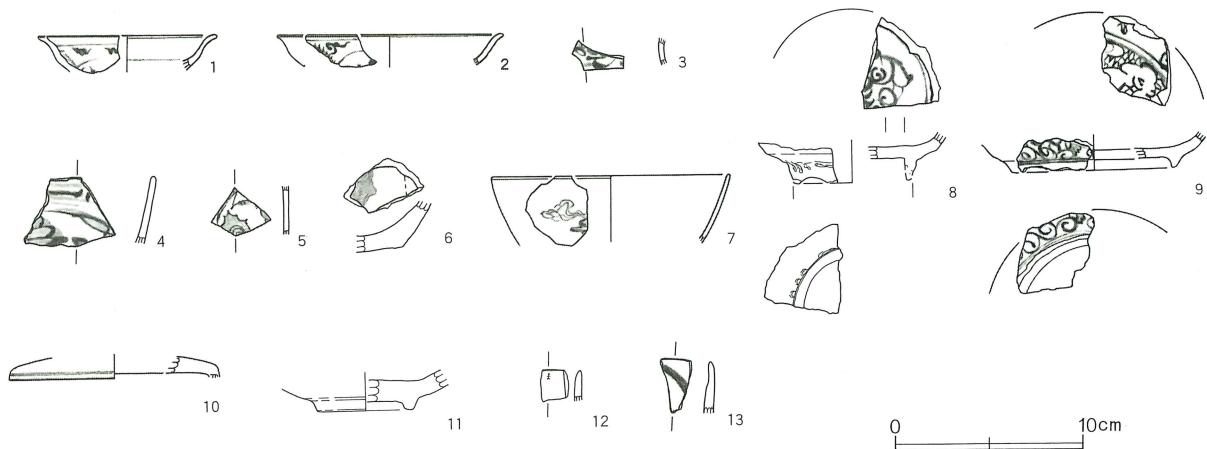
## (7) 染付・五彩・青磁

染付は、15世紀中頃～16世紀にかけての中国産染付と近世肥前系の染付とに分かれる。後者は、近世遺物の中で触れている。ここでは、中世中国産の染付を扱う。中国産は、微細な細片まで含めると20点が出土した。うち8点を第36図に載せている。

第35図 グリッド・表採遺物



第36図 染付・五彩・青磁



第35図 グリット・表採遺物 観察表

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	備考
1	土師器	皿	12.5	2.75	6.7	B	A,E	橙	100	底部糸切り
2	土師器	皿	12.50	2.70	6.9	B	B,C,E	橙	90	底部糸切り
3	土師器	皿	(11.0)	3.1	(6.0)	A	B,C,E	橙	10	底部糸切り
4	土師器	皿	(12.8)	2.7	(7.0)	B	A	にぶい橙	60	底部糸切り
5	土師器	皿	(12.8)	3.55	(7.2)	B	F	浅黄橙	25	底部糸切り
6	土師器	皿	(11.2)	3.55	4.80	B	E	灰白	80	底部糸切り
7	瀬戸・美濃	擂鉢	(31.40)	<4.90>		A	C,F,G	褐灰	10	
8	瀬戸・美濃	擂鉢	(25.4)	<3.65>		A	A,B,G	暗赤灰	5	使用痕あり
9	瀬戸・美濃	擂鉢		<6.70>	(11.00)	A		赤灰	10	底部糸切り 使用痕あり
10	在地・瓦質	内耳鍋	(27.10)	5.80	(23.20)	A	B,C,E	灰	5	
11	在地・瓦質	内耳鍋	(29.2)	5.6	(25.65)	A		灰	10	
12	在地・瓦質	内耳鍋	(31.20)	5.10	(28.80)	B	B,C,E	にぶい黄燈	10	
13	在地・瓦質	内耳鍋	(34.65)	4.9	(31.7)	B	B,C,E	褐灰	35	
14	在地・瓦質	内耳鍋	(39.1)	5.5	(34.4)	A	C,E,F	灰	10	
15	常滑	大甕	(20.6)	<9.75>		A	G,H	灰赤	10	
16	瀬戸・美濃	茶壺	(12.90)	<3.65>		A		暗赤褐	5	
17	瀬戸・美濃	徳利		<3.75>	(11.80)	A		暗赤褐	15	
18	瀬戸・美濃	香炉	(9.80)	<3.70>		A		灰白	15	
19	瀬戸・美濃	灰釉稜皿	(12.05)	<2.00>		A		浅黄	5	端反り
20	瀬戸・美濃	灰釉稜皿	(10.20)	<1.90>		A		浅黄	10	端反り
21	瀬戸・美濃	灰釉稜皿	(11.0)	<2.80>	(6.50)	A		浅黄	20	
22	瀬戸・美濃	灰釉丸皿	(10.40)	<1.60>		A		浅黄	5	
23	瀬戸・美濃	灰釉皿	(12.45)	<2.20>		A		灰白	5	貫入
24	瀬戸・美濃	灰釉皿		<1.15>	(5.45)	A		暗オリーブ	5	

第36図 染付・五彩・青磁 遺物観察表

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	備考
1	中国・染付	皿	(9.60)	<1.90>		A		明青灰	5	付着物あり 端反り
2	中国・染付	皿	(12.0)	<1.65>		A		明青灰	5	端反り
3	中国・染付	碗						明青灰		
4	中国・染付	碗		<3.6>				明青灰		
5	中国・染付	碗						明青灰		
6	中国・染付	碗						にぶい赤褐		
7	中国・五彩	碗	(12.60)	<3.15>		A		灰白	5	
8	中国・染付	皿		<2.30>	(6.30)	A		明青灰	5	
9	中国・染付	皿		<1.80>	(8.65)	A		明青灰	10	
10	中国・青磁	香炉蓋?	(11.2)	<1.2>				明緑灰		
11	中国・青磁	碗		<2.1>	(5.1)			緑灰		
12	中国・青磁	碗						緑灰		
13	中国・青磁	碗						緑灰		

第37図 和鏡



1は端反りの丸皿である。内面口縁部に界線、外面には蓮池文風の文様を施す。16世紀中葉と考えられる。2は端反りの丸皿で、径がやや大きい。内面は界線を1条施し、体部外面には宝相華唐草文を施す。15世紀末葉と考えられる。3～6は碗の細片と考えられるが、5だけは曲線部分がなく平坦であるため、他器種の可能性がある。7は五彩である。雲文を施す。雲文の中心には金彩が施してあったが、もろいため落ち

てしまった。8は、高台に2条の界線を施す。高台が高いうえ釉薬が厚く、陶器系である。内面見込に界線を施し、なかに十字花文を施す。15世紀中葉以降と考えられる。9も同様の染付皿である。内面には、二重の界線内に草花文を施し、体部外面に唐草文を施す。15世紀末葉頃と考えられる。

10～13は、極めて小さい細片の青磁である。釉調がそれぞれ微妙に異なる。10は香炉の蓋か、11は碗の高台部である。12・13は碗の口縁の細片である。印刻で文様がある。

#### (8) 和鏡・古銭

第37図は、和鏡である。B-3、D-4 グリッド出土。火熱を受けて著しく変形しているため、鏡背文様はあまり鮮明ではない。全体の約2分の1を遺存し、鏡径約12.0cmに復元される。内区の外縁は唐式鏡の八花鏡を模した花弁形の二重の界線を巡らす。内区中央に亀紐を配し、その上部に口嘴する2羽の鶴が描かれている。また、亀紐の周囲には草文（菊花文か）

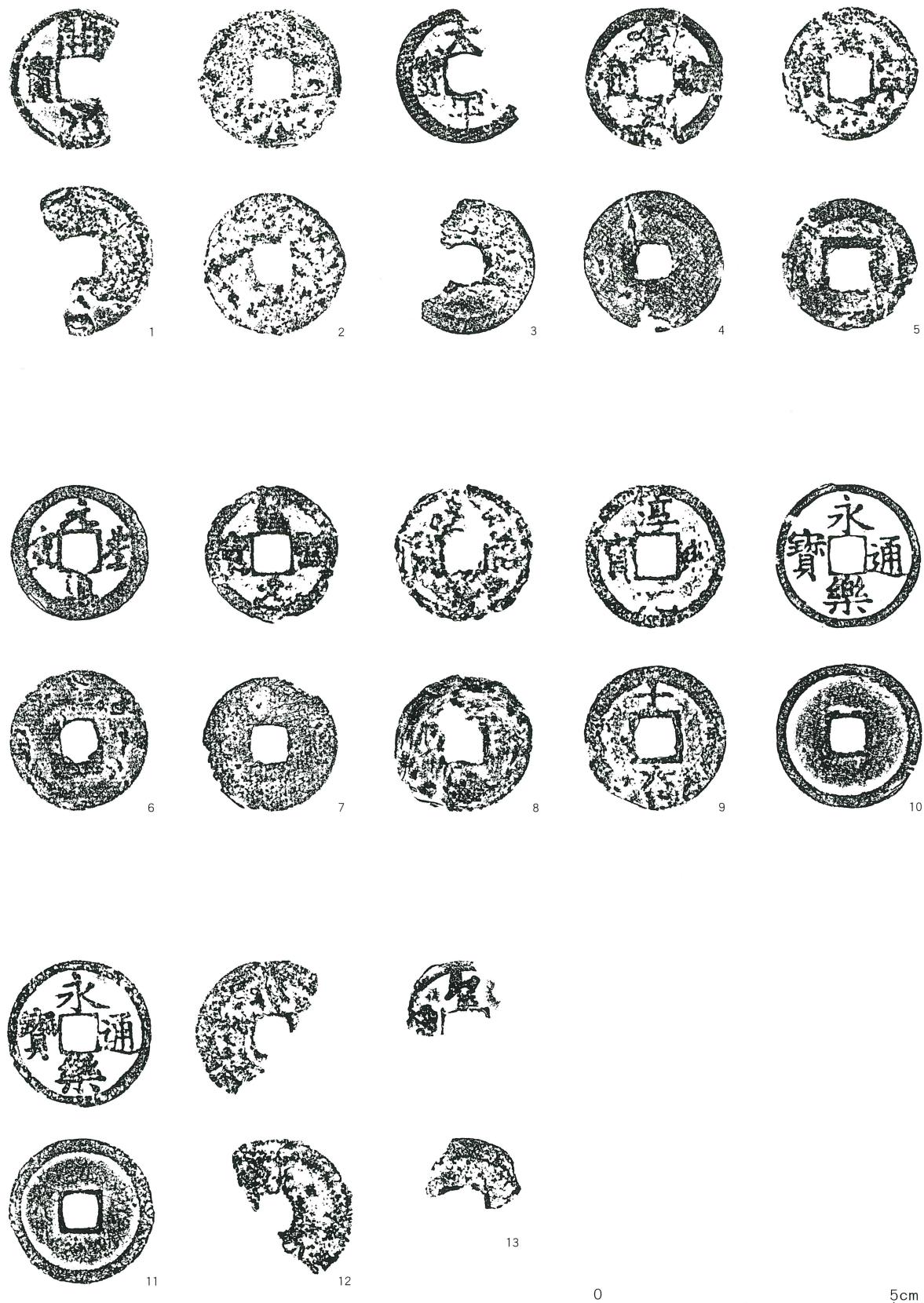
第37図 和鏡観察表

番号	産地・材質	器種	計測値	残存率	備考
1	銅製品	和鏡	直径12.7×厚さ0.9cm	50	

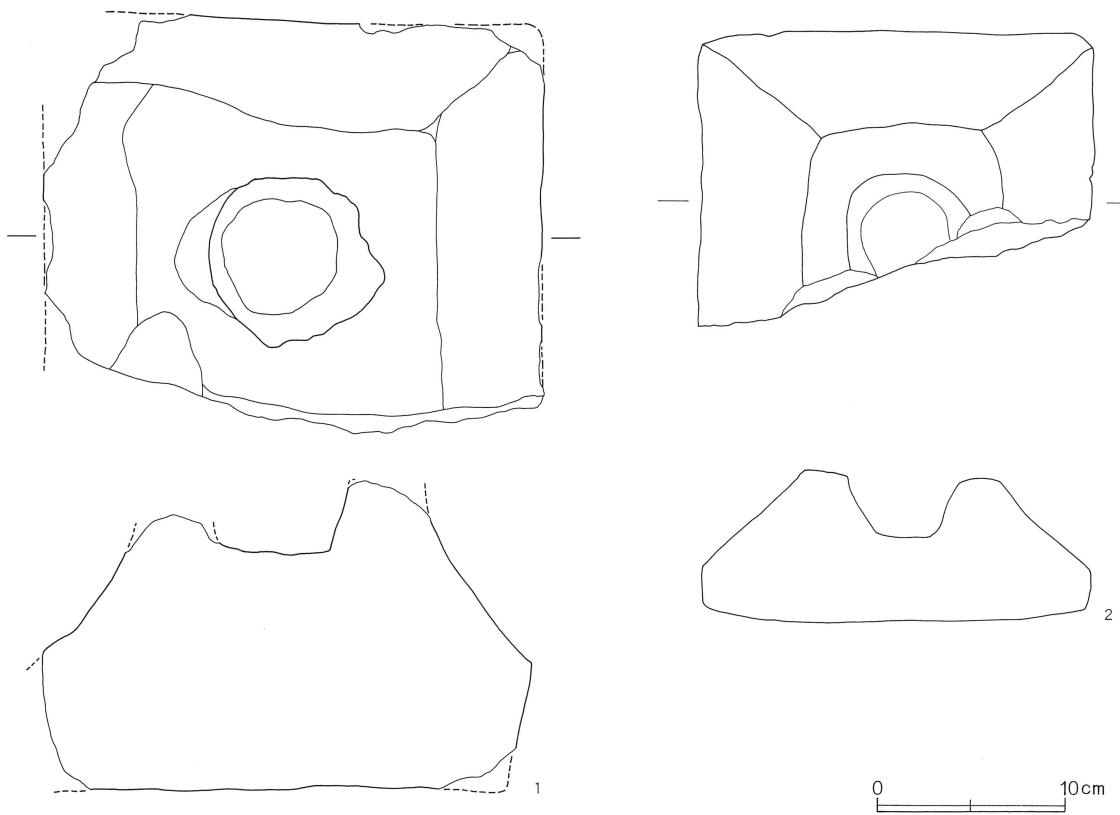
第38図 古銭 観察表

番号	錢貨名	初鑄年	錢径 (cm)	穿径 (cm)	重量 (g)	出土地点	備考
1	開元通寶	唐、621年	2.53	0.67	(1.11)	D2 (No.40)	1/2欠損
2	開元通寶	唐、621年	2.45	0.65	2.27	C3 (No.400)	
3	太平通寶	北宋、976年	2.30	0.65	(1.00)	C4 (No.234)	1/3欠損
4	景德元寶	北宋、1004年	2.45	0.56	2.29	B3 (No.232)	
5	熙寧元寶	北宋、1068年	2.37	0.68	2.28	D2 (SD12)	真書
6	元豐通寶	北宋、1072年	2.38	0.59	2.34	B3 (No.399)	行書
7	紹聖元寶	北宋、1094年	2.33	0.62	2.48	B4 (No.223)	行書
8	海東通寶	高麗、1097年	2.31	0.65	(1.13)	D2 (No.302)	一部欠損
9	淳熙元寶	南宋、1174年	2.45	0.68	2.63	D2 (No.108)	真書・背十六
10	永樂通寶	明、1408年	2.52	0.57	2.02	B3 (No.259)	
11	永樂通寶	明、1408年	2.47	0.58	3.31	D2 (No.256)	
12	□□□寶	—	2.50	—	(0.84)	B4 (No.300)	S E2 錢種不明 1/2欠損
13	聖□□寶	—	—	—	(0.59)	B3 (No. 9)	聖宋元寶・折二錢(北宋、1101年)か

第38図 古銭



第39図 五輪塔



第39図 五輪塔 観察表

番号	産地・材質	器種	長さ	厚さ(径)	幅	出土位置	石 材	備 考
1	石製品	五輪塔	<22.6>	17.35	<22.0>	D3	角閃石安山岩	
2	石製品	五輪塔	20.9	8.15	<15.6>	E2	角閃石安山岩	

第40・41図 石臼 観察表

番号	産地・材質	器種	直径	底径	高さ	孔径	出土位置	備 考
1	石製品	石臼	<25.1>	(28.8)	10.2	(1.6)	堀跡	
2	石製品	石臼	(23.90)	(25.0)	8.3	(1.60)	D 1・2	
3	石製品	茶臼	<22.85>	<19.9>	7.0	(2.0)	堀跡	底面黒色変化
4	石製品	茶臼	(18.0)	(18.0)	7.5		溝跡	
5	石製品	茶臼	(24.2)	(23.7)	<6.3>		堀跡	
6	石製品	茶臼	(24.2)	(24.2)	<7.1>		堀跡	
7	石製品	石臼	(27.0)	<18.0>	9.3	4.0	溝跡	
8	石製品	茶臼	(28.1)	(27.2)	<5.6>		溝跡	
9	石製品	石臼	(27.4)	(27.0)	<5.7>		堀跡	
10	石製品	茶臼	<27.0>	<27.0>	<5.5>	2.5	堀跡	
11	石製品	茶臼	(27.5)	<26.8>	<5.1>		堀跡	
12	石製品	石臼	(31.0)	(29.6)	10.1		堀跡	
13	石製品	石臼	(30.0)	<27.4>	<8.0>		堀跡	煤付着
14	石製品	石臼	(34.3)	(31.6)	7.0		B 3	
15	石製品	石臼	(32.5)	(32.5)	10.5		堀跡	黒色変化あり
16	石製品	石臼	<10.3>	<10.3>	<9.3>	2.6	堀跡	
17	石製品	石臼	(24.6)	(24.6)	7.5		堀跡	
18	石製品	石臼	(28.4)	(28.4)	<4.8>		溝跡	
19	石製品	石臼	24.6	(18.3)	11.5		堀跡	

を配しているが細部の表現は不明である。外区は幅0.6cmの隆帶上に菊花文の退化した二重連珠文を巡らし、地紋に櫛歯紋様の細線を充填する。縁は幅0.4cm、高さ0.9cmの直角式である。縁の形状や文様の特徴から判断すると鎌倉時代末から室町時代初め頃の作と推定される。なお、騎西城二の郭からも鏡径6.7cmの群鳥双鶴円鏡が出土している。

第38図1~13は、古銭である。出土した古銭は総数13枚を数える。いずれも渡来銭で、初鑄年代の一一番古いものは開元通寶（唐621年）、新しいものは永樂通寶（明1408年）である。その内訳は、開元通寶2枚、太平通寶1枚、景德元寶1枚、熙寧元寶1枚、元豐通寶1枚、紹聖元寶1枚、海東通寶1枚、淳熙元寶1枚、永樂通寶2枚、不明銅錢2枚を数える。出土位置は、B3グリッド4枚、B4グリッド2枚、C3・C4グリッド1枚、D2グリッド5枚である。このうち遺構に伴うものは、5の熙寧元寶がSD12、12の不明銅錢がSE2からの出土である。

#### (9) 石製品

第39図は五輪塔である。1は堀跡区画dより出土した。角閃石安山岩である。屋根部の約5分の1を欠損しているが、3辺は原形を残こし大きさを計ることができる。2はSD8からの出土である。1より小さいが、作りや石質は2のほうが良質である。約3分の1を欠損している。

第40図は石臼である。19点あり、うち4点が下臼である。残り15点が上臼で、圧倒的に上臼が多い。また、大きさも大中小とあり、厚さも厚い薄いがある。1~3は、溝跡がはっきりしている。10は中央の穴が残されていた。すべて角閃石安山岩である。

第42図は砥石である。1が泥岩である他は、すべて凝灰岩である。第43~45図は板碑である。板碑は銘文がわずかでも観察されるものすべてを載せた。1・2・4は山形に二条線を残す。3は「南（無）」の銘文が見える。4はやや浅い二条線の下に「南（無）」「南（無）」の銘文が見える。6は光明真言の一部と考えられる。7は深い線刻であるが、キリークと蓮座の一部が見える。8は蓮座である。9は「南（無）」

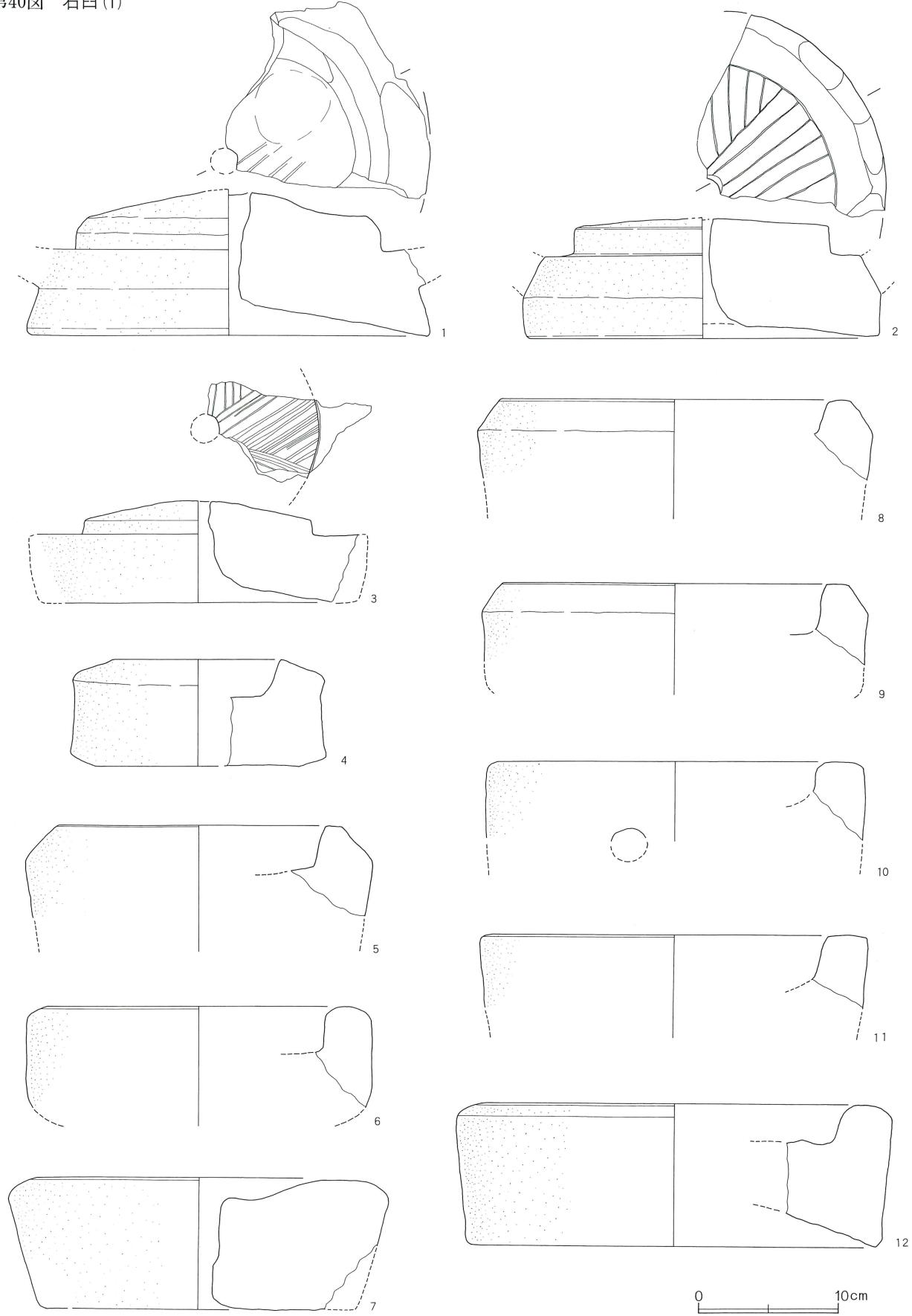
第42図 砥石 観察表

番号	産地・材質	器種	底径	長さ	厚さ(径)	石材	出土位置	備考
1	石製品	砥石	<6.00>	1.00	3.00	粘板岩	B3	
2	石製品	砥石	<6.70>	3.40	3.40	凝灰岩	堀跡	
3	石製品	砥石	<7.30>	2.10	3.65	凝灰岩	A3	
4	石製品	砥石	6.30	1.70	3.40	凝灰岩	C3	
5	石製品	砥石	4.70	5.35	<5.00>	凝灰岩	B4	
6	石製品	砥石	<10.85>	2.30	5.40	凝灰岩	B4	
7	石製品	砥石	10.25	3.60	4.70	凝灰岩	SD2	

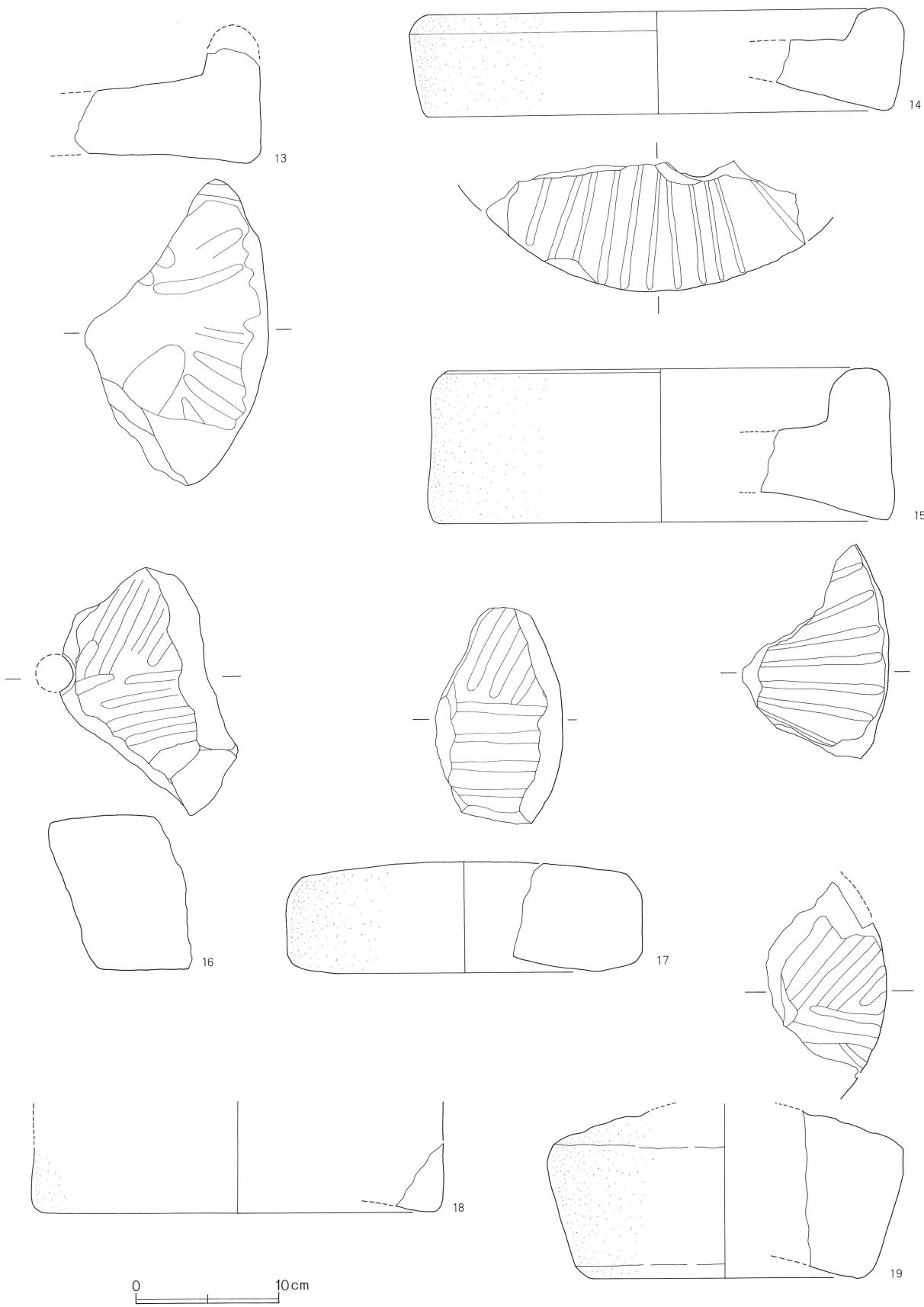
第43・44・45図 板碑 観察表(1)

番号	製品名	器種	形状	長さ	厚さ(径)	幅	石材	出土位置	備考
1	石製品	板碑		<15.30>	2.45	<11.60>	緑泥片岩	E3	
2	石製品	板碑		<14.30>	2.55	<12.80>	緑泥片岩	SE8	
3	石製品	板碑		<21.60>	2.20	<17.80>	緑泥片岩	SD8	
4	石製品	板碑		<8.80>	1.70	<7.30>	緑泥片岩	SE2	
5	石製品	板碑		<17.35>	1.35	<17.25>	緑泥片岩	SE8	
6	石製品	板碑		<11.30>	1.90	<12.30>	緑泥片岩	堀跡	
7	石製品	板碑		<24.45>	0.95	<13.25>	緑泥片岩	A3	
8	石製品	板碑		<13.10>	1.95	<7.50>	緑泥片岩	堀跡	
9	石製品	板碑		<10.30>	1.50	<6.85>	緑泥片岩	堀跡	
10	石製品	板碑		<13.10>	0.90	<9.50>	緑泥片岩	堀跡	
11	石製品	板碑		<10.75>	1.45	<12.00>	緑泥片岩	堀跡	
12	石製品	板碑		<10.60>	1.60	<10.15>	緑泥片岩	堀跡	
13	石製品	板碑		<15.10>	1.90	<6.30>	緑泥片岩	溝跡	
14	石製品	板碑		<8.45>	1.65	<7.00>	緑泥片岩	E2・3	

第40図 石臼(1)



第41図 石臼(2)



第42図 砥石



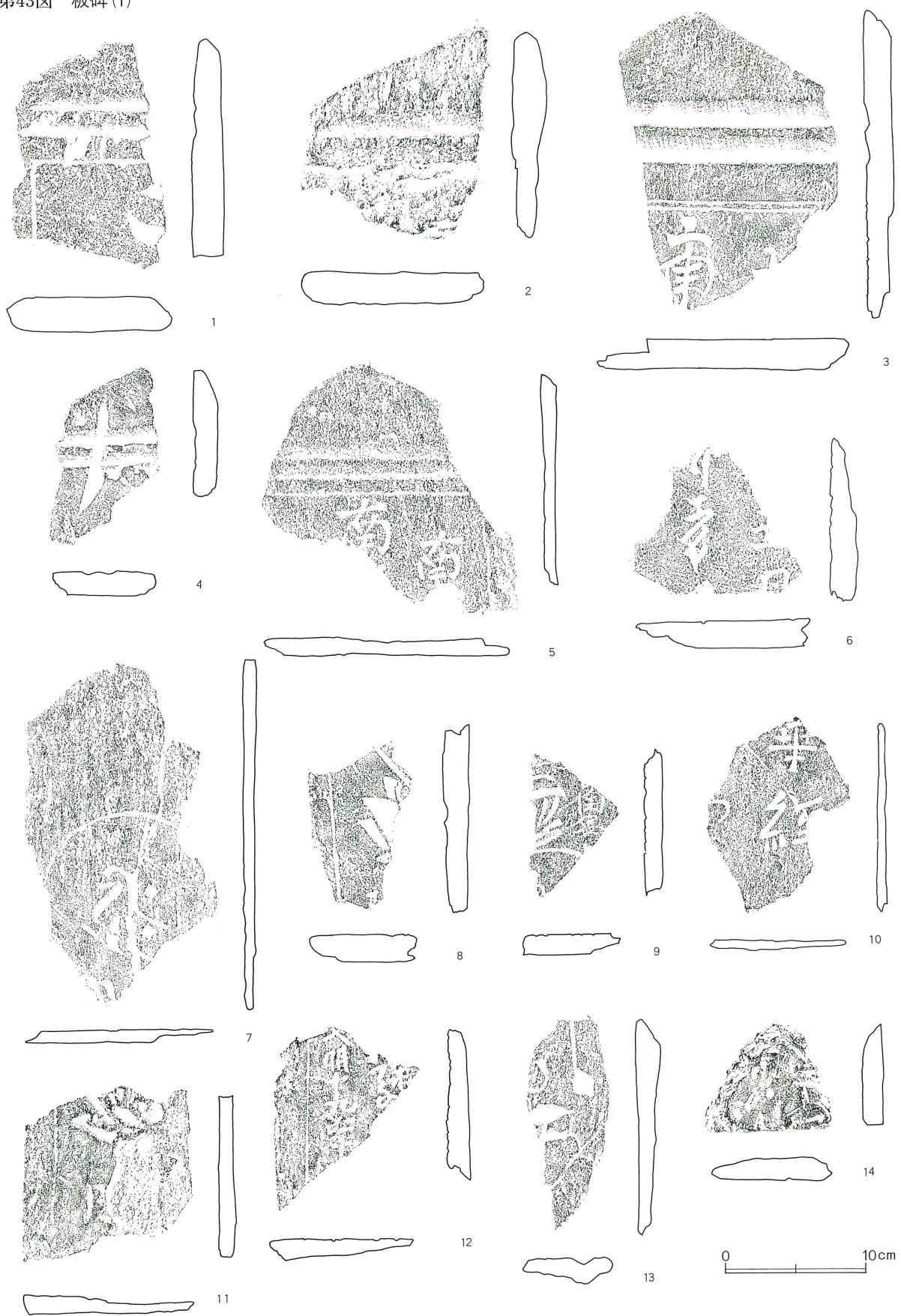
第43・44・45図 板碑 観察表(2)

番号	製品名	器種	形状	長さ	厚さ(径)	幅	石 材	出土位置	備 考
15	石製品	板碑		<27.3>	1.9	<10.30>	緑泥片岩	S D8	
16	石製品	板碑		<32.65>	2.40	<13.00>	緑泥片岩	S E8	
17	石製品	板碑台石		<28.70>	2.30	<12.90>	緑泥片岩	E2	
18	石製品	板碑台石		<44.60>	3.30	<16.70>	緑泥片岩	SE6	
19	石製品	板碑台石		<21.05>	3.02	<6.35>	緑泥片岩	D4	
20	石製品	板碑台石		<16.10>	4.30	<9.30>	緑泥片岩	A4	
21	石製品	板碑		<15.50>	1.90	<7.40>	緑泥片岩	堀跡	
22	石製品	板碑		<13.90>	1.30	<6.90>	緑泥片岩	表採	
23	石製品	板碑		<17.80>	1.10	<15.85>	緑泥片岩	S E6	
24	石製品	板碑		<23.50>	1.95	<17.85>	緑泥片岩	A3	

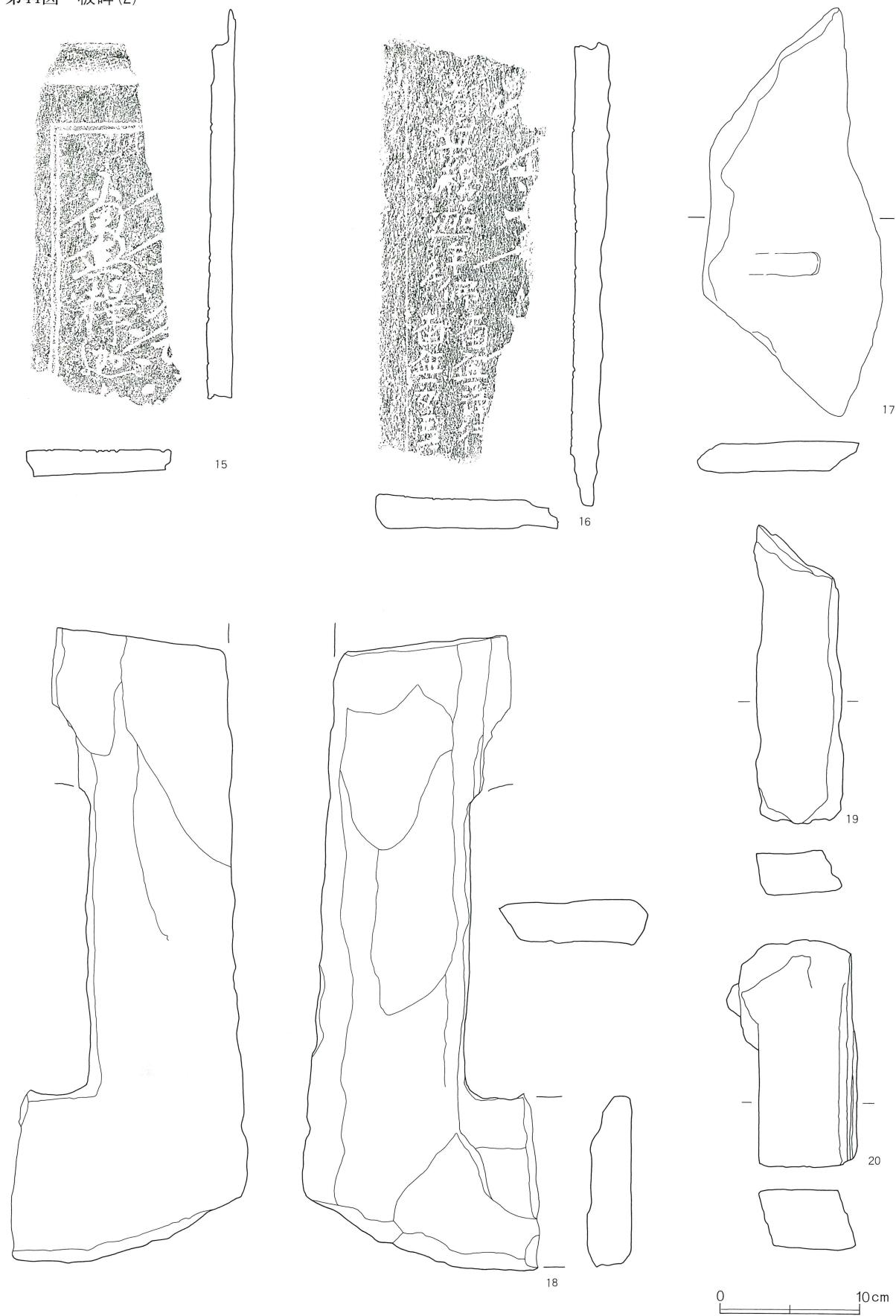
第46・47・48図 木製品 観察表

番号	製品名	器種	長さ	厚さ	幅	出土位置	備 考
1	木製品	漆椀	口径13.15×器高5.2×底径6.7			堀跡	外面黒漆 内面朱漆
2	木製品	漆椀	器高<3.7>×底径7.0			D2グリッド	外面黒漆 内面朱漆
3	木製品	漆椀	器高<1.2>×底径(7.7)			S D9	外面黒漆 内面朱漆
4	木製品	独楽	4.9	3.7		D1グリッド	
5	木製品	不明	13.8	4.85	5.0	D2グリッド	
6	木製品	下駄	17.2	1.6	10.1	D2グリッド	
7	木製品	下駄	18.6	1.6	9.3	堀跡	
8	木製品	オサ	48.6	2.9	5.95	堀跡	ムシロ織り
9	木製品	曲げ物蓋	22.0	1.7		B4グリッド	
10	木製品	曲げ物蓋	21.3			B4グリッド	
11	木製品	曲げ物蓋	8.2	0.8		堀跡	
12	木製品	板材	8.8	0.7	4.3	堀跡	
13	木製品	板材	9.8	0.5	2.9	堀跡	
14	木製品	板材	<25.1>	0.5	5.7	D2グリッド	

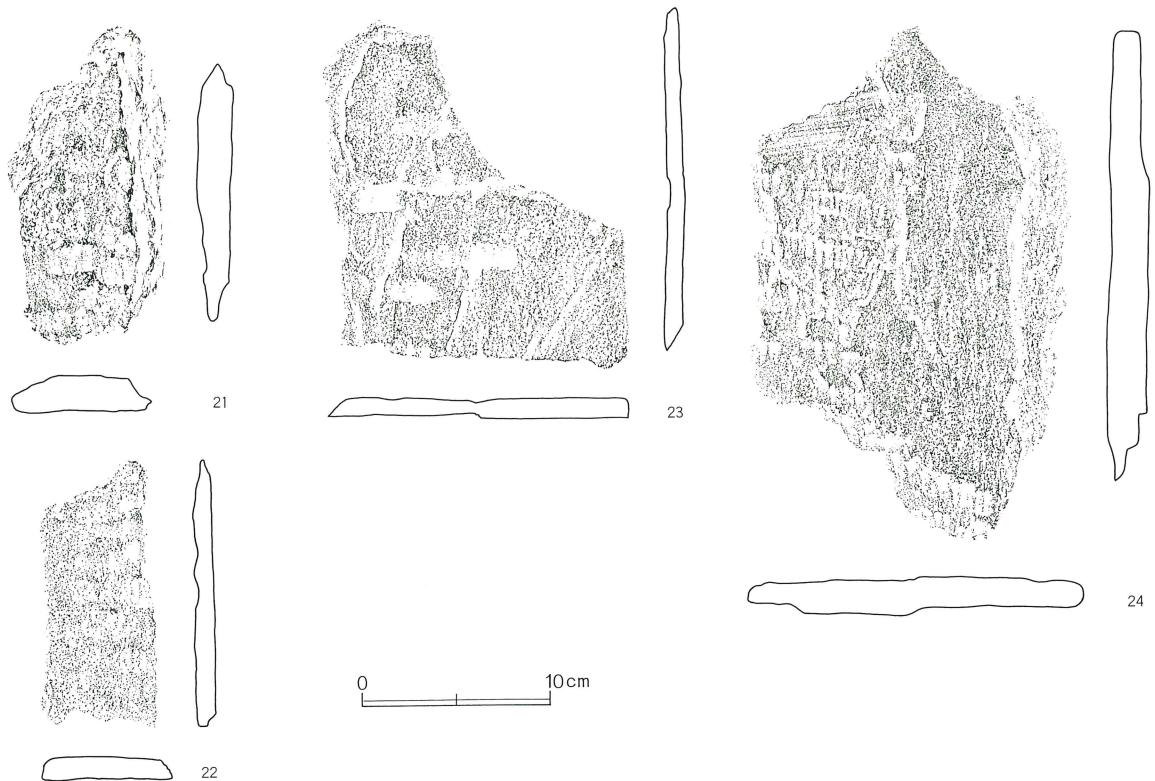
第43図 板碑(1)



第44図 板碑(2)



第45図 板碑(3)



第46・47・48図 木製品 観察表

番号	製品名	器種	長さ	厚さ	幅	出土位置	備考
15	木製品	板材	<6.1>	0.6	3.85	SE6	
16	木製品	板材	11.6	1.1	5.7	堀跡	
17	木製品	板材	10.2	1.5	5.4	D2グリッド	
18	木製品	不明	17.8	2.0	4.5	SD12	
19	木製品	板材	<13.4>	1.1	4.55	SE6	
20	木製品	板材	14.9	1.7	5.7	堀跡	
21	木製品	板材	14.0	1.2	4.7	B4グリッド	
22	木製品	板材	13.8	1.3		B4グリッド	
23	木製品	板材	<13.6>	<1.2>	5.6	B4グリッド	
24	木製品	板材	13.9	1.00	6.25	B4グリッド	
25	木製品	板材	13.7	1.1		B4グリッド	
26	木製品	茶杓?	<7.9>		2.9	堀跡	
27	木製品	板材	52.0	1.1	13.5	堀跡	
28	木製品	不明	36.9	3.3	3.6	D2グリッド	
29	木製品	不明	32.2		3.6	C2グリッド	
30	木製品	竹杭	39.4	3.1		D2グリッド	
31	木製品	杭	43.5	3.4		D1グリッド	桜材
32	木製品	杭	58.8	4.4	6.85	S D5	
33	木製品	杭	57.2	4.7	8.0	S D5	